おねがい♪マイメロディ はいすく～る



著♥山田隆司
監修♥(株)サンリオ
イラスト♥宮川知子


フラットくん
バク
こぐれかける
木暮駆
ひいらぎじゅん
柊潤
マイメロディ
クロミ


バコ
藤崎真菜(ふじさきまな)
夢野歌(ゆめのうた)
桜塚美紀(さくらづかみき)
ピアノちゃん


LOVE

おねがい♪マイメロディ はいすく～る

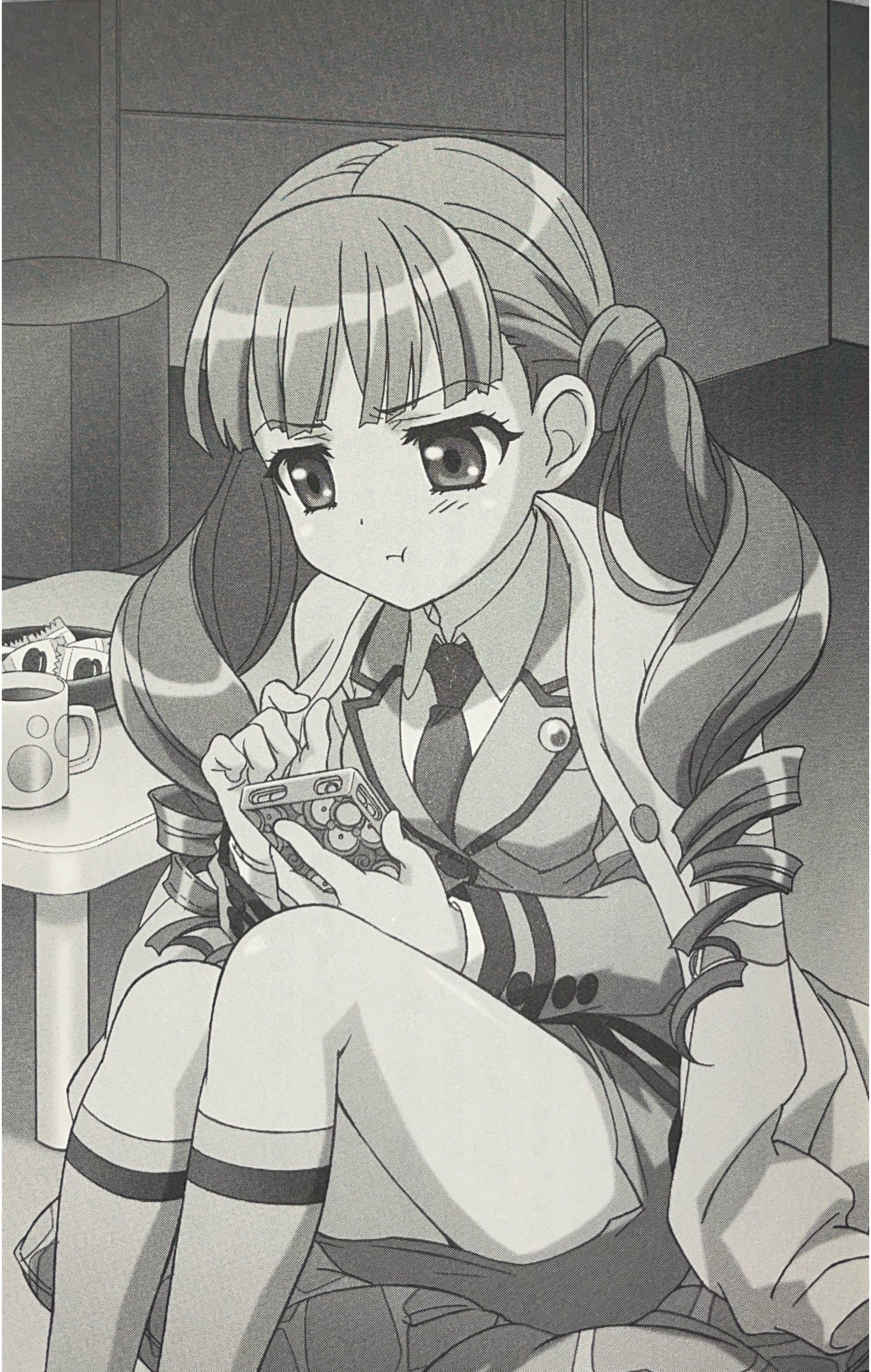
おねがいマイメロディ　はいすく～る

もくじ

序章　高校生の歌ちゃんもイイナ！



晴れた朝、爽やかな空気を取り込もうと窓を開けると、桜の花びらが一枚部屋の中に舞い込んできた。
「桜ももう終わりだね」
夢野歌はベッドの上に舞い降りた花びらをそっと拾った。桜の花びらは少女の指先の爪の色のように、ほんのりとピンク色をしている。
「歌ー、起きたのー？」
階下から姉の奏の声が聞こえて、歌は返事をすると急いで制服に着替えた。机の上の置時計の時間は、まもなく七時になるところだ。
スマホをチェックするが、受信メールなし。
「つたくもう……」
歌が少し憤慨しながら階段を下りると、すでに家族はテーブルについていた。
「いただきまーす」
妹の琴が待ちきれないようすで、パンを皿に取った。
そんな三人の様子を微笑ましく見守る父、雅彦。
夢野家の、ごく普通の朝食時の風景だ。
夢野雅彦は紀行ライターを職業として、一年中国内外を旅している。家に戻ると次の依頼までは、原稿をまとめている。



「フルーツもあるわよ」

「わーい、イチゴ大好きー！」

長女の奏がテーブルにイチゴを置く。奏はこの春女子大生となり、高校時代から読者モデルとして活躍している。ファッションセンスに優れた美人だ。

食欲旺盛なのは末っ子の琴で、歌や奏が通っていた夢ヶ丘学園の中等部に入学したばかりだ。テニス部に入部したのだが、今は部活が楽しくてたまらない様子だ。

「ちょっと、私の分まで食べないでよー」

そう叫んだ次女の歌は夢ヶ丘学園高等部の二年生になったばかり。軽音楽部に所属している。親友の桜塚美紀と藤崎真菜も同じ高等部で、中等部時代からずっと仲良しだ。

桜塚美紀は、お嬢様っぽくのんびりした性格の少女で、歌と同じ軽音楽部に所属している。楽器は弾かないが、今も得意のポエムを作っている。しかし、未だに歌たちには理解不能の内容なのは変わりなかった。

藤崎真菜は関西出身で元気な少女だ。高等部に入ってからは運動部には所属せず、格闘家を目指してジムや道場に通っている。可愛いものが苦手なことも、変わっていない。三者三様の性格だが、今でも親友だ。

歌には一応、彼氏もいる。中学が一緒だった小暮駆という少年で、今は別の高校で寮生活を送っている。

中等部時代に駆に告白され、交際が始まった。家族も公認の仲なのだが、陸上競技の盛んな都内の高校に進学したため、なかなか会えないし、メールもたまにしかくれないのが歌には少々不満だ。
（本当に彼氏なのかな？）
と思う。歌は駆から付き合ってくれと告白され、生まれて初めてのキスでＯＫの意思表示をした。だが、キスをしたのはそれきりで、その後は手さえ握ってこない駆の気持ちが理解出来なかった。これでは単に親しい男友達で、とても彼氏とは言えないんじゃないかと疑問に思っているのが、今の正直な気持ちだ。
夢野家には母親がいない。末っ子の琴が赤ん坊の頃に亡くなっていたからだ。それ以来、長女の奏が妹たちの母親代わりになっていた。雅彦も家にいる時は積極的に家事をしているが、今は三姉妹が成長し、それぞれが家事を分担している。
父親の雅彦は、美人な奏、可愛い歌、元気な琴の三人の娘を溺愛していて、それぞれが魅力的な女の子として成長した今は、心配の種がつきない。
「マイメロ……どうしているかな」
歌はイチゴを摘み上げ、じっと見た。
「歌ねえったら、またマイメロのこと思い出してる」
琴にはすっかり呆れられるが、時折歌は、マイメロをふと思い出す。特に春の頃には。

マイメロこと、マイメロディは、一見するとうさぎのぬいぐるみなのだが、マリーランドという、人間たちの夢で出来ている不思議な国に暮らす可愛い生き物だ。歌とはドリームパートナーという絆で結ばれていて、マイメロが人間の世界に来てからずっと、家族のような間柄だった。

「そうね。元気にしているかしら」

奏がヨーグルトを食べながら懐かしそうに言うと、

「マイメロがマリーランドに帰ってから、もう三年だよ。たまには顔ぐらい出してくれてもいいじゃない」

怒った口調で言い、歌はイチゴをパクッと一口で食べた。

彼氏も親友も家族もいて、毎日楽しく暮らしている歌だったが、マイメロはまた特別な存在なのだ。当然、マイメロもそう思ってくれているはずなのに、三年もの間音沙汰なしというのはどういうことなんだろうか。

「まあまあ、マリーランドとこっちじゃ、時間の流れが違うんだろう。それに、案外忙しくしているかもしれないじゃないか」

雅彦がなだめるが、

「分かってるわよ。マイメロの世界は私たちと全然違うって」

時々こんなふうに歌が切り出し、家族がなだめている。歌たちの世界が平和だというこ

とは、マイメロたちもマリーランドできっと幸せに暮らしているのだと思うが、それならそれで連絡くらいはほしい気がする。

「朝からカッカしてると、美容に悪いわよ」

「歌ねえもそろそろ支度しないと、遅れるよ」

しっかり身支度を整えている奏と琴に言われ、歌はカフェオレを飲み干すと、洗面所に向かった。

「事件が起きたり、困ったことが起きたら、マイメロも私のところに来てくれるかもしれないけど……そんなの寂しいな……何にも起きない時にだって、来てくれなきゃ」

いくら考えたって仕方がない。

歌はツインテールにした髪をくるくると器用にカールする。鏡に映った歌の姿は、ブレザーの制服のせいか、三年前より少しだけ大人っぽく見える。

「行ってきまーす！」

琴の元気な声が玄関から聞こえると、歌も急いでブラシに髪を巻きつけ、ドライヤーの風を当てる。

「よしっ、完璧！」

歌は左右を向いてチェックすると、鏡に向かってVサインを出した。髪型が決まると、気分がいいものだ。マイメロのことは気になるけれど、気持ちを切り替えてドライヤーを

片付けた。
「お姉ちゃん、お父さん、行ってきます」
カバンを掴むと、歌が外に飛び出した。
「私も大学に行く時間だわ。今日は少し遅くなるけど、夕食は家で食べるから」
奏は洗い物を済ませると、立ち上がった。ファイルをショルダーバッグに入れ、コートを羽織ると、玄関先で雅彦に声をかけた。
「気をつけて行っておいで」
三人の娘を送り出すと、雅彦は二杯目のコーヒーをカップに注ぎ、ソファに腰かけた。
思い出したように立ち上がり、洗濯機のスイッチを入れる。娘たちの成長を楽しむ一方、年頃になり、どんどんキレイになっていく彼女たちを見ると、雅彦は複雑な心境だ。
「マイメロか……」
いっそ、マイメロのように、ずっと同じ子供の姿でいてほしいとも思うこともある。
マイメロとその仲間たちがいた日々は、過ぎてしまえば夢のような時間だった。
マイメロやマリーランドの住人たちとの交流と、それにまつわるさまざまな事件。まるでファンタジーだ。もしも自分が紀行ライターでなくファンタジー小説家だったら、マイメロたちを題材に、色んな話が書けるのにと、雅彦はコーヒーをゆっくりと飲みながら考えていた。

第一章　王様になれたらイイナ！



マリーランドは今日も快晴である。

野山には色鮮やかな花々が咲きほこり、人間界への出入口である巨大なホルンが浮かぶ空では、小鳥たちが楽しそうにさえずっている。

山の向こうには、七色の虹が連なるように三つも出ている。

さすがは人間たちの夢で出来ている国である。

——なんのこっちゃ？

と、思っていらっしゃる読者のために、ちょっとだけマリーランドのことを話そう。

マリーランドは、生命が地球に誕生した時には、まだ存在しなかった。

猿かチンパンジーか見分けがつかない猿人の時代にもなかった。

人間が人間として道具や火を使い始め、言葉を喋り始めた頃、ある一人の人間が、

「争いごとのない平和な世界になれば、みんな幸せになれるのに」

と、天に向かって自分の夢をつぶやいた時、マリーランドは突如として誕生したのである。

それから、人間たちはたくさんの夢を持つようになる。

「愛するあの人と結婚出来たらいいな」

「空を飛べたら、どんなに自由でいいだろう」

「いつか必ずビッグになって、家族を幸せにしてみせる」

などなど、人間が抱く夢がどんどんマリーランドに送り込まれて、現在のマリーランドが創り上げられていったのである。

たとえば、人間界で戦争が起こり、人々が夢さえ抱くことが出来なくなれば、マリーランドは疲弊し、農作物も花や木も萎れてしまう。自然だけではない。マリーランドの住民たちも活気を失い、やる気もなくしてしまうのである。

逆に、人間界が平和で、誰もが輝かしい未来に向かって自分の夢が抱ける時代には、マリーランドは活性化して、住民たちも活気に満ちた生活を送ることが出来るのである。

しかし、人間は良い夢だけを抱くことはない。

中には悪い夢を抱く者もいる。

そういう悪い夢もマリーランドには送り込まれてくる。

しかし、そこは初代国王、エレファント一世の力により、『黒の森』が創られ、そこに悪い夢を閉じ込めることによって、住民たちには直接悪い影響を受けさせないようにしたのである。

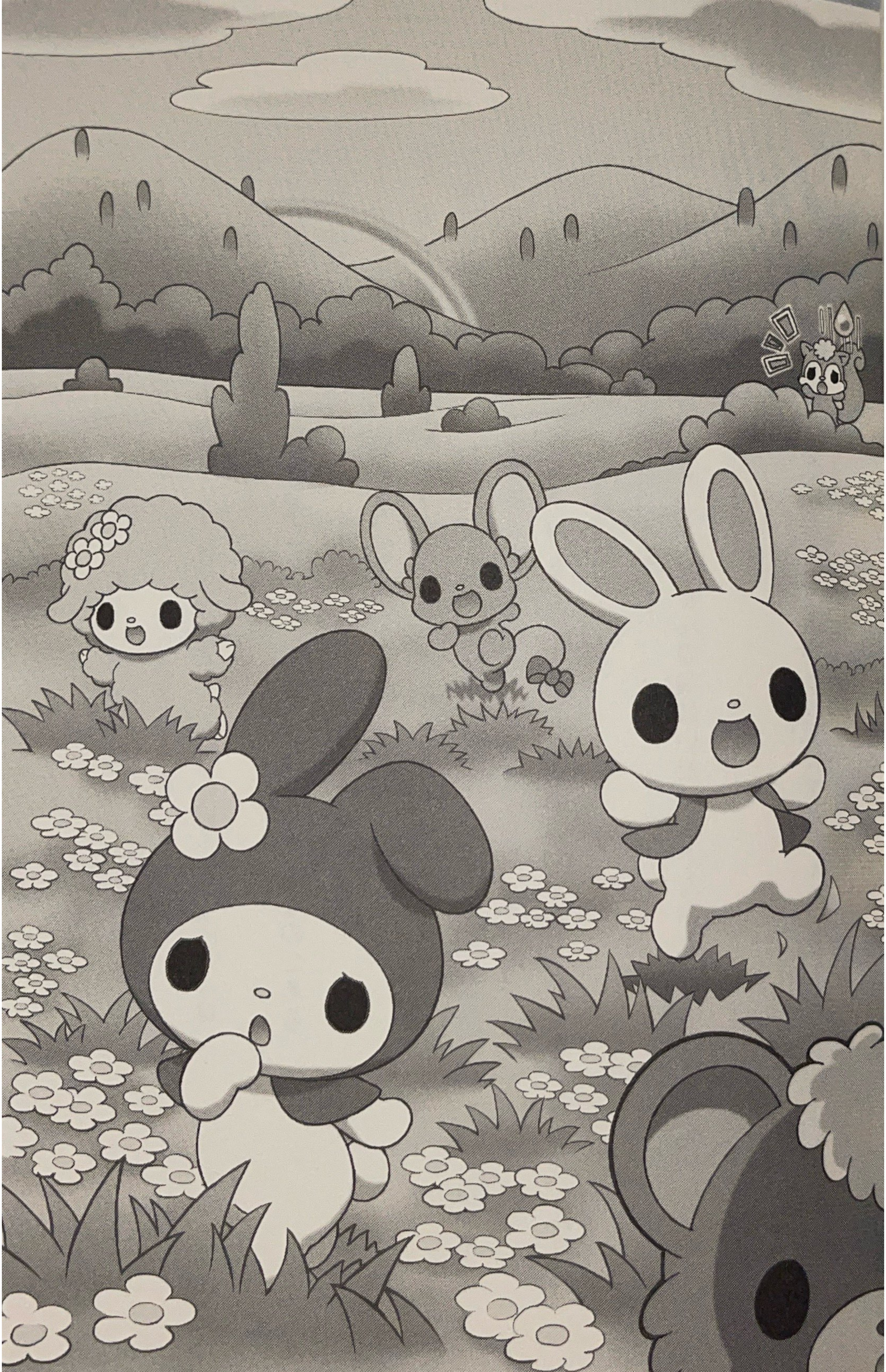
だが、人間があまりにも悪い夢ばかり抱くため、黒の森には悪い夢が充満して、やがてダークパワーになってしまった。さらに、人間界から悪い夢が送り込まれ続け、ダークパワーが黒の森から溢れ出るのを恐れた何代か前の国王により、番人を置き監視させるようになった。

その結果、マリーランドは平和が続くのだが、番人の役を仰せつかった者は、ダークパワーの力を浴び続けたため、恐ろしいダークパワーの精になってしまう。
ダークパワーの精は、黒の森から飛び出してマリーランドで暴れ回り、甚大な被害を与えたが、時の国王により、そのパワーを奪われ、黒の森の地下深く封印されてしまう。
それから時が流れ、ダークパワーの精の存在をマリーランドの住民たちが忘れかけた頃、この物語の主人公である、うさぎのぬいぐるみのような姿をしたマイメロディ、通称マイメロがダークパワーの精を封印していた石を、漬物石にちょうどいいと思い、持ち帰ってしまう。
それにより、ダークパワーの精が復活する。
しかし、ダークパワーが削がれているせいで実体がないばかりか、微力だったため、ダークパワーの精は人間界に散らばっていたダークパワーを、マリーランドの厄介者であるクロミと、その手下のバクを巧みに操って集めさせ、徐々に力を回復していく。
そして、決して夢を抱かない天才ヴァイオリニストの柊恵一や、その弟で恵一にコンプレックスを抱いていた柊潤に取り憑き、人間界を滅びの雲で覆い、人間たちから夢を奪って、マリーランド滅亡を企んだ。
それに敢然と立ち向かい、ダークパワーの精——この頃はクロミによって『ダーちゃん』と呼ばれていた——をやっつけ、滅亡しかけていた人間界とマリーランドのピンチを

救ったのが、マイメロと、ドリームパートナーである夢野歌と、その仲間たちであった。
その功績が認められ、マイメロはマリーランドの女王に推挙され、一時はその座に就いた時期もあったが、生来ののんびり屋さんで、そもそも政治など全く関心がないため、現在は前国王である象族のエレファント五五世がまた統治している。
とは言っても、エレファント五五世は根っからの遊び人で、実際に統治しているのは、王妃のルミちゃんであり、実務の方はモグラ族のドリアン大臣が担当している。
ちなみに、エレファント一世はマンモスだったというから、マリーランドでも進化というものはあるみたいだ。

「お姉ちゃん、遅いよ。早く早く」
マリーランドにあるアンダンテの森に、元気な男の子の声が響いた。
マイメロの弟のリズムくんである。
「はいはーい」
それでも、マイメロの歩みは全く速くならない。
あくまでも、マイペース。
「マイメロ～、先に始めちゃうぞ！」

ネズミ族のフラットくんが叫んでも、
「はいはーい」
マイメロの歩みは変わらない。
「わっぱ、めー！」
さらに、ヒツジ族のピアノちゃんが叫んでも、
「はいはーい」
それどころから、道端に咲く花や飛び交う蝶に、
「こんにちは。わたし、マイメロディ。みんな、マイメロって呼ぶんだよ。よろしくね」
なんて挨拶をしている。
どこまでもマイペース。
ところが、業を煮やしたクマくんとリスくんが、
「もう『どろけい』始めようクマ」
「ジャンケンで勝った組が『警察』で、負けた組が『泥棒』ってことにしよう」
今マリーランドの子供たちの間では、『どろけい』が大流行で、マイメロたちは毎日こ
の遊びにハマっていた。
『どろけい』の言葉を聞いたマイメロの耳がピーンと立った。
「いや〜〜ん。マイメロが行くまで、ジャンケンしないで。おねがい♥」



と、可愛いポーズを取った途端、みんなの顔もはにゃ～んとほころぶ。
マイメロのこのおねがいポーズに、みんな、やられっ放しだ。
マイメロのライバル――マイメロは友達だと思っている――クロミは、
「あんなの計算に決まってるよ！」
と酷評するのだが、全く効果なしで、みんな、はにゃ～んなのである。
結局、待つこと五分。
ようやくマイメロが到着して、ジャンケンとなった。
「グーなし、ジャンケン、ポン！」
結果は、チョキのリズムくん、フラットくん、ピアノちゃんが『警察』組、パーのマイメロ、ハリネズミくん、クマくんが『泥棒』組ということになった。
ピアノちゃんは手の形からチョキしか出せないので、グーなしジャンケンなのは、みんなの優しさの表れだ。
「おかしいでっす。七人いたはずなのに……」
ハリネズミくんが言った時、クマくんの横にいたリスくんが、涙目になりながら、パーを出した手を見せる。
「僕もいるんだけど……」
「リスくん、体も声も小さすぎだよ。もっと元気にアピールしないとね」

最年少のリズムくんが生意気なことを言うものだから、日頃から影の薄いリスくんは、ますます小さくなった。
「じゃあ、『どろけい』始めよう」
フラットくんの号令で、『泥棒』組が逃げ出そうとした時だった。
マイメロが悲しそうな表情になって、
「マイメロ、いい子だから、泥棒さんにはなれない……」
「だったら、チョキを出せば、『警察』になれたのに」
リズムくんに突っ込まれても、マイメロは、
「………」
ぽかーんとしている。どうやら意味が分からないらしい。
「マイメロ、警察さんがいい……フラットくん、代わって」
「ええ――っ!?」
フラットくんが露骨に嫌そうな顔になる。
「フラットくん、おねがい、おねがい♥」
またしても、おねがいポーズ。
たちまち、はにゃ～んとなったフラットくんは、
「分かったよ、マイメロ。交代しよう」

とてつもない破壊力である。
「それじゃあ、始めよう！」
泥棒組のフラットくん、ハリネズミくん、クマくんが一斉に逃げようとした時、上空から大きな声が聞こえてきた。
「ちょっと待ってくれゾナ～～」
バク族のバク一郎、通称バクが十三人の弟や妹を引き連れて舞い降りてきた。
「どうしたの、バクくん？」
マイメロが尋ねると、
「これからバクとバク二郎、バク三郎はスーパーのアルバイトがあるゾナ。すまないけど、弟たちやバコも一緒に遊んでくれないゾナか？」
「お願いするだっぺ」
バク四郎が頭を下げると、兄妹たちが次々と頭を下げていく。
「だっぺ」
「だっぺ」
「だっぺ」
「だっぺ」

「だっぺ」
「だっぺ」
「だっぺ」
「でちゅ」
最後に末っ子のバコちゃんが一番丁寧に頭を下げた。
三年前に生まれたバコちゃんも今ではしっかり空を飛び、兄弟たちと遊べるようになっていた。
バコちゃんは生まれてすぐにダークパワーの精、ダーちゃんに取り憑かれ、彼の意のままに操られていたため、その言動が両親やバクたちには天才だと勘違いされていたが、ダーちゃんが体から出て行った後は、普通のバク族の女の子になっていた。
しかし、その目はバク一族の特徴であるつり上がった目ではなく、クリッとした愛らしい目であるため、兄弟たちだけでなく周りの者からも愛されていた。ちなみにバク十一郎もバク十二郎もバク十三郎もバコちゃんが生まれる前はみんなから可愛がられていたが、声変わりをしたため、他の兄弟と同じ扱いをされて、現在に至っている。
「『どろけい』は人数が多い方が楽しいよ。バク四郎くんたちもじゃんけんで警察組と泥棒組に分かれて」

リズムくんがちょっと先輩風を吹かせて言った。

バク四郎たちやバコが、ジャンケンを始めたのを見届けると、バクとバク二郎、バク三郎はアルバイトへ出かけて行った。

ジャンケンが終わり、バク兄妹たちもうまい具合に六人が警察、五人が泥棒に分かれた。

「九人ずつでちょうどいい！　それじゃあ始めようか！」

と、フラットくんが言った時、

「あたち、マイメロちゃんと一緒がいいでちゅ」

「え～、そんなワガママ言っちゃダメだよ」

自分のことは棚に上げ、マイメロが注意した。

「おねがいでちゅ。マイメロちゃんと一緒にしてくださいでちゅ」

瞳をキラキラさせて頼むバコちゃんにマイメロ以外の全員がはにゃ～んとなってしまう。お願いポーズをしていない分、バコちゃんの方が可愛さの破壊力は上だといっていい。

「分かったよ、僕が代わってあげる」

リズムくんはバコちゃんと交代してあげた。

「ありがとうでちゅ」

リズムくんが泥棒側に移動し、バコちゃんがマイメロの隣に来た。
「…………」
マイメロの表情は穏やかだが、誰の目にも、自分より可愛いバコちゃんが警察組に入ることを拒んでいるように見えた。だが、そこはマイメロで、
「バコちゃん、警察がんばろうね」
と、笑顔で話しかける。
「はい、がんばるでちゅ」
こちらもとびきりの笑顔で応える。
ようやく組み合わせも決まり、『どろけい』が始まろうとした時のことだ。
派手なクラクションの音を響かせながら、一方から土煙を上げた一団が押し寄せて来た。
お揃いの特攻服を着て、サングラスをかけ、改造した三輪車に乗ったクロミが率いるクロミーズ５のメンバーである。
「おらおらおら、いい年こいて、くだらねえ遊びしてるんじゃねえよ！」
リーダーのクロミがハリセンで肩を叩きながら凄んだ。
「クロミちゃん、せっかく遊ぼうとしていたのに、邪魔しないで」
「うるさい！　ここは今からあたいらのシマだよ！」

「へ？　クロミちゃん、ここはアンダンテの森で、島じゃないよ」
「そういう意味じゃないよ！」
その時、メンバーの一人、黒犬のワンミがクロミに言った。
「リーダー、こいつらあたいらのこと舐めてますよ。ここは一発いつもの決めゼリフを」
「おうよ！　じゃあ、みんな行くよ！」
クロミがバシッとハリセンで地面をはたくと、バッと三輪車から降り、
「クロミーズ５リーダー、クロミ」
メンバーも三輪車から飛び降り、
「ヒラ、黒犬のワンミ」
「同じく、黒狐のコンミ」
「同じく、黒鼠のチュウミ」
「我ら、クロミーズ５！」
全員でポーズを取って、凄んだ。
ところが、マイメロたちはいつの間にか用意した紅茶を全員でのんびりと飲んでいた。
「ああ、紅茶がおいしい」
「マイメロの紅茶ってほんとにおいしいっぺ」
「最高でちゅ」

などと言いながら美味しそうに紅茶を味わっている。
「お……お前ら～～～！」
逆上したクロミーズ５の面々が三輪車に跨り、一同の中に突っ込んでいく。
「いや～～～ん」
「や、やめろー」
「た、助けてクマー」
逃げ惑うマイメロたちを次々に三輪車で吹っ飛ばしていくクロミたち。
「みんな、俺たちに掴まれっぺ」
バク四郎の声に、マイメロたちはバク兄妹に掴まり、上空へ脱出した。
「ははは、はじめっから素直に従ってれば吹っ飛ばされずにすんだのに、バカな奴らだぜ」
クロミが高笑いしながら、上空のマイメロたちを見上げた。
「クロミちゃん、メッでちゅ」
バコちゃんがマイメロより早く注意した。
「バコちゃん、それマイメロのセリフだよ」
マイメロが口を尖らせたが、すぐに、
「あら？」

と、クロミたちを見て首を傾げた。

「マイメロ、どうしたの？」

バク五郎の背中に乗ったフラットくんが尋ねた。

「ニャンミちゃんがいない」

マイメロの指摘を受けてフラットくんたちがクロミーズ５を見ると、確かにサブリーダーのニャンミがいなかった。

「クロミ、それじゃ、クロミーズ４じゃないか」

フラットくんの言葉に、クロミが少しうろたえた。

「そういえば、ここのところニャンミの奴、あたいらの集会に来ないね。どうしたんだい？」

「そ、それは……」

ワンミたちは顔を見合わせると、視線を地面に落とし、押し黙った。

「なんで黙っちまうんだい⁉　クロミーズ５のメンバーに秘密は御法度だよ。知ってんならしゃべんな！」

クロミの一喝に、再びワンミたちは顔を見合わせると、コンミが重い口を開いた。

「リーダー、実は……ニャンミの奴は、昔リーダーが憧れていたライオン先輩の友達のジャガー先輩と付き合ってるみたいなんです」

「なんだって⁉　ニャンミの奴、水臭いな。それならそうと言ってくれればいいのに」
「そ、それが……」
チュウミが何か言おうとした時、マイメロが先に呟いた。
「おかしいなあ……ジャガー先輩にはヤマネコちゃんっていう彼女がいたような……」
「な、なんだって⁉　ニャンミのやつ、二股かけられてるのかよ！」
クロミが吐き捨てるように言うと、今度はフラットくんが言った。
「この間僕が見た時はヤマネコちゃんじゃなかったな。ハクビシンちゃんだったような」
「違うクマ。アライグマちゃんだったクマ」
「わっぱ、めーめー」
ピアノちゃんも別な彼女の名前を言っているみたいだ。
「な、なんだよ！　二股じゃなくて何股もかけてんのかよ！　とんでもないプレイボーイだな、ジャガー先輩って。なんか、ニャンミが心配になってきた。みんな、行くよ！」
クロミーズ５のメンバーたちは再び土煙を上げ、走り去った。
「クロミちゃん……」
マイメロが心配そうにクロミたちを見送った。

アンダンテの森を抜けて、マリーランドの城下町に入ると、クロミが急ブレーキで三輪車を止めた。
ワンミたちも慌ててブレーキを踏むと、
「ここは手分けして捜そう」
「分かりました、リーダー！」
「ニャンミを見つけたら、すぐにあたいに連絡をくれ！」
「はい！」
再び三輪車を駆り、街中に入ると、ワンミ、チュウミ、コンミは次々と脇道に入っていく。
クロミはとりあえずニャンミの家に行ってみたが、家族は誰も行方を知らなかった。
「くそ、どこへ行っちまったんだニャンミの奴！」
クロミは再び三輪車へ跨ると、ライオン先輩の屋敷がある海岸通りへ向かった。
二十分ほど三輪車を東に走らせると、潮の匂いが漂ってきた。
海岸通りに出て、さらに三輪車を走らせているとクロミの脳裏にニャンミとの思い出が蘇ってきた。
いつもいい子ぶるマイメロと比較して注意ばかりする両親に反発し、家出をしてレディースのチームを作った時、いの一番に駆けつけてくれたニャンミ。

クロミが愛する柊 恵一のために、メロディ・ヴァイオリンをマリーランドの城から盗もうとした時、ワンミたちを説得し、協力してくれたニャンミ。

常にリーダーである自分を立ててサブリーダーとして陰から支えてくれたニャンミ。

大好きなたい焼きをとびっきりの笑顔で食べるニャンミ。

ニャンミとの思い出に浸りながら海岸通りをひた走っていたクロミの三輪車のペダルが徐々に遅くなっていき、やがて止まった。

「ニャンミ……。今度はあたいがあんたを助ける番だ。プレイボーイのジャガー先輩とキッパリ別れさせてやるよ」

再びクロミがペダルを踏みだした時だった。右手に見える岬の断崖の上に、小さな人影が見えた。

人影の後ろには、自分と同じ三輪車らしきものが見える。

「ひょっとして……！」

クロミは猛然とペダルを漕ぎ出し、岬に続く道にタイヤを軋ませながらカーブして、さらにスピードを上げた。

「いくらジャガー先輩にフラれたからって早まったマネするんじゃないよ！」

しかし、クロミの叫び声は、断崖の絶壁にぶつかる波の音に掻き消された。

その時だった。

ニャンミが断崖に向かって駆け出すのが見えた。
「ニャンミ――ッ!!」
猛スピードの三輪車を乗り捨て、クロミがニャンミに向かって猛然とジャンプする。その叫び声に驚いたニャンミが振り返ると、必死の形相をしたクロミの顔が視界に飛び込んできた。
「リーダー!?　ひえぇぇぇ!!」
このままでは激突すると思ったニャンミは、慌てて身を屈めた。ニャンミを抱き止めようとしたクロミは勢い余り、断崖を飛び越え宙を舞った。
「へっ?　なんで屈むんだよ――ッ!」
クロミは懸命に手足をジタバタさせるが、引力には逆らえず、そのまま落下し、海にジャポーン!　水柱が上がった。
「リ、リーダーー!」
ニャンミが断崖から海を見下ろすと、二〇メートルほど下の海面でクロミが溺れているのが見えた。
「リーダー、今、助けに行くよ!」
すぐさま助走して、海に飛び込むニャンミ。



三〇分後、クロミとニャンミは、岬の手前にある、カキくんがオーナーシェフをしている海鮮レストランにいた。

二人は、レストランの名物である生がきに舌鼓を打っていた。殻入れの中には、すでに一〇個ほどの殻が入っている。

「あたいはただ、海に向かって大声を出したかっただけだったんす」

「あたいは、てっきり身投げでもするんじゃないかと思っちまったんだよ」

「ほんと、リーダーには迷惑かけちまって面目ないっす。ここは奢りますから、バンバン食べて下さい」

「そうかい。悪いね」

クロミは生がきに手を伸ばすと、レモンを絞り、ペロリと食べた。

「さすが、リーダー。見事な食べっぷりっすねえ。さあさあ、もっと食べて下さい」

ニャンミは残っている生がきにレモンを絞って、勧めた。

（ニャンミの奴、わざと陽気に振る舞いやがって……）

柊　恵一との実らぬ恋で苦い経験をしているクロミには、さっきからわざと陽気にしているニャンミの気持ちが痛いほど分かった。

（こういう時は、泣いちまえば少しは気が晴れるのにさ……）

クロミは心の中でそう呟いて、本題に入った。
「それにしても、ジャガー先輩の野郎、ひどい奴だな。何股もかけてたんだってな？」
「…………」
ニャンミの目に涙が浮かんだ。だが、懸命に零れるのを堪えながら、吐き出すように言った。
「あいつ……一番目で良かったら、付き合ってやってもいいって、言ったんだ」
「じゅ……二股もかけてやがったのか！　ニャンミ、もちろん、ぶっ飛ばしてきたんだろうね⁉」
「…………」
ニャンミは無言で頭を横に振った。
「何でだよ⁉」
クロミが身を乗り出して、睨みつけた。
周囲の客たちが一斉にこちらを見ている。
「見るんじゃないよ！」
クロミの一喝に、客たちは慌てて視線を元に戻した。
「…………」
沈黙を続けるニャンミ。クロミが不貞腐れたように椅子に座り直した時だった。

　ニャンミがポツリと言った。
「……あたいが初めて好きになった男だったんだ。リーダーが言うように殴りたかったさ。でも、拳を握り締めただけだった」
「だったら、あたいが代わりにぶっ飛ばしてきてやるよ！　あたいの大事なマブダチの心を弄びやがって！」
「リーダー……」
　ニャンミの目から堪えていた涙が溢れ出たかと思うと、テーブルに突っ伏して、嗚咽した。
「ニャンミ……！」
　クロミが立ち上がって、ニャンミの横に行こうとした時、入口からおばさんの一行が入ってくるのが見えた。その中には、なんとマイメロのママの姿があった。
「や、やばいっ！」
　クロミは慌てて身を屈めて、ニャンミの横へ移動すると、小声で言った。
「マイメロのおふくろが来やがった。ニャンミ、絶対振り返るんじゃないよ」
「は、はい」
　ニャンミもマイメロのママの毒舌ぶりはよく知っていた。
　もし、自分が二股もかけられていたことを知られたら、何を言われるか分からない。

一生立ち直れなくなるかもしれない。
二人は息を殺して、マイメロのママたちがテーブルに着席するのを待った。
運悪く、マイメロのママたちは、二人の背後のテーブルに来てしまった。
しかし、衝立があるため、マイメロのママたちには、クロミたちは見えない。
「これじゃ、出るに出れませんね、リーダー」
小声で言うニャンミの目には、もう涙はなかった。
マイメロのママに見つかる恐怖の方が大きくて、涙が引っ込んでしまったのだ。
「とにかく、こいつらが帰るまでは、じっとしてようぜ」
クロミも小声で言った。
マイメロのママたちは、同窓会の帰りに立ち寄ったことが、その会話からすぐに分かった。おばさんたちの話は展開が早くて話題がコロコロ変わる。同窓会に来た仲間の変わり様から始まり、旦那たちの愚痴や、子供たちの自慢、さらにはバーゲンセールの話と、どうでもいいようなことをコーヒー一杯で、本当によく喋る。おまけに声も大きいので、周囲の客たちは呆れて、次々に帰って行く。
調理場からカキくんが、迷惑そうな表情で睨んでも知らんぷりだ。
（早く帰ってくれよ。頼むからさあ）
クロミとニャンミは祈るような気持ちで、時間が過ぎるのを待っていた。

ところが、話題が王様と王妃様に変わってからは、逆に聞き耳を立てるのだった。
「まさか、王妃様も出席なさるとは思わなかったわ」
「本当よねえ。いろいろお忙しいはずなのに、さすが王妃様よねえ」
「マリーランドの住民が幸せに暮らせているのは、王様より王妃様のお陰ですものね」
「さっきから、王妃様、王妃様って言ってるけど、同級生なんだから、ルミちゃんでいいんじゃない？」
マイメロのママが指摘した。
「そりゃそうだけど……」
おばさんたちは、昔のようにルミちゃんと呼ぶことには抵抗があるらしい。
「いいのよ、ルミちゃんで。一時はグレて、レディースの初代リーダー、グラサンのルミって言われてたじゃない」
「そういえば、あの頃、怖かったわよね」
「でも、今やマリーランドの王妃様だもの。私たちの中では、一番の出世頭よ」
「そうかしら？」
いよいよマイメロのママが毒を吐き始めた。
「ルミちゃんだって、今日出てきたのは、気晴らしがしたかったんだと思うわ」
「どういうこと？」

「あのちゃらんぽらんな王様を旦那に持ってるんですもの、毎日苦労の連続みたいよ」
「なるほどねえ」
おばさんたちは納得した。
「そういえば、昔、噂で聞いたことがあるんだけど、王様がまだ王子の時代に、ルミちゃんと結婚したいあまり、王立魔法研究所のメガネザル博士に頼んで、とんでもないアイテムを作らせたんですって？」
「知ってる、知ってる。ルミちゃんの弟のことを恋人だと勘違いした今の王様が、二人の仲を引き裂こうとして、何とかボーとかいうのを作らせたんでしょう？」
「ドクロボウよ」
ルミちゃんと仲が良いマイメロのママが言った。
「何なの、それって？」
「なんでも、ドクロのついた矢を射る弓でね、一瞬のうちに愛する者同士を引き裂いてしまう、悪のアイテムらしいわ。でも、恋人じゃなくて弟だと分かったから、ドクロボウは使われることなく、城のどこかに封印されているらしいわ」
ここまでマイメロのママたちの話を聞いていたニャンミの瞳の奥に、鈍い光が宿った。
「リーダー、出よう！」
「えっ⁉」

ニャンミは戸惑うクロミの腕を掴むと、レジへ急いだ。
すぐに、マイメロのママが二人に気づいた。
「あら、クロミちゃんに、ニャンミちゃんじゃない！　こんなところで何してるの？」
「な、何でもないっす！　さいなら！」
二人は支払いを終えると、ダッシュで店を飛び出すのだった。

「一体、どうしたんだい？　そんなに慌てて……」
店を出て、改造三輪車を一〇分ほど走らせたところで、クロミが尋ねた。
「あたい……さっきおばさんたちが話していたドクロボウを盗み出そうと思う」
ニャンミが真顔になって言った。
「な、何だって⁉」
思わず、クロミのサングラスがずり落ちそうになる。
「リーダー、あたい、あたいの心をズタズタにしたジャガー先輩に、ドクロポウで復讐したいんだ！　協力してくれるよね？」
「そ、それは……」
クロミは一瞬ためらいの表情を浮かべたが、これまでクロミーズ5のリーダーであ

る自分を陰になり日向になり支えてくれたニャンミに、今こそ報いる時だと思い直した。
「分かったよ。城に侵入して、ドクロボウを盗み出せばいいんだろう？」
「リーダー！」
ニャンミのサングラスの奥で嬉し涙が光っている。
「そうとなったら、善は……じゃなかった、悪は急げだよ！　ワンミたちにも手伝ってもらいたいところだが、もし失敗した時のことを考えると、ここはバク一人の方がいいな」
「……リーダーにお任せします」
二人は、バクが弟二人とアルバイトをしているスーパーマーケットへ急行した。

「お城に忍び込むゾナか……!?　失敗したら、何年も反省部屋に入れられ、臭い飯を食べなきゃならなくなるゾナよ」
スーパーマーケットの裏口に呼び出され、クロミとニャンミから事情を聞いたバクは、大いに悩んだ。
だが、そこは、バクのことを知り尽くしているクロミである。
「ジャガー先輩は、ニャンミも含めて二股もかけていた、とんでもないプレイボーイなんだぞ！」

未だに一度もモテ期が来ていないバクの体に、負け犬オーラが迸った。
「二股ゾナかあ！　男の風上にも置けない奴ゾナ！　分かったゾナ！　手伝うゾナ！」
（単純な奴……）
と、クロミは思いつつ、空を飛べるバクが仲間に加われば、百人力である。
「それじゃあ、行くよ！」
「ちょっと待つゾナ。店長さんに早退届を出してくるゾナ！」
（何、のんきなこと言ってんだよ！）
クロミは口の先まで出かかった言葉を飲み込んだ。
バクのこうした律儀なところが嫌いではなかったからだ。
「早く行ってきな」
「はいゾナ！」
バクは笑顔で店内に戻っていった。

バクを仲間に加えたクロミとニャンミは、城の正門前の植込みの裏に接近し、城の様子を窺っていた。
さすがに王宮だけあって、大勢の近衛兵たちが城壁の上にも五メートル間隔に立って

おり、アリの子一匹通さない警備網を敷いていた。

「とても正面からは侵入出来ませんね、リーダー」

ニャンミが困惑した顔をクロミに向けた。

「夜になるまで待った方がいいかもしれないね」

クロミがサングラスを外して言った。

「心配ないゾナ。近衛兵たちをよく見るゾナ」

バクの言葉に、二人が近衛兵たちを見ると、警備をそっちのけでお喋りをしたり、鼻をほじったり、中には隠れてお酒を飲んでいる兵までいた。

「ダーちゃんがいなくなり、ここ数年平和が続いて、みんな、平和ボケになってるゾナ。たぶん、裏門の方はガラガラゾナ」

バクの言う通り、三人が裏門に移動すると、近衛兵は一人もおらず、そればかりか、門の鍵も開けっ放しになっていた。

「な、何なんだ、このザルな警備は！」

呆れながら、三人は難なく城の中へ侵入出来た。

城の中の警備は、さらにひどく、近衛兵たちは控室に入ったまま、テレビを観たり、カードゲームに興じたりしており、危機管理ゼロである。

三人は徒歩で地下の廊下の奥にある秘密の部屋に辿り着くことが出来た。

何度も秘密の部屋に忍び込んだ経験があるクロミとバクは、勝手知ったる他人の家状態で、迷うことは全くなかったし、途中で近衛兵に出会うこともなかった。
しかし、秘密の部屋に入ると、三人は愕然となった。
ドクロボウがないのだ。
以前、侵入した時には、宝箱のような箱が何個か置いてあったのだが、今はゴミ一つなく、ガランとしていた。
「本当に、ここにあるんですか、リーダー？」
「う〜む……封印されてあるからには、この部屋だと思うんだけど……」
「悪のアイテムだから、どこかに秘密の扉があるんじゃないゾナか」
バクの言葉に、クロミとニャンミが煉瓦の壁を見渡す。
「あれは⁉」
ニャンミが何かを見つけて、壁に近づくと、一つの煉瓦にピンクの音符のマークが刻んであった。
「押してごらん」
クロミが言い、ニャンミが音符マークの煉瓦を押すと、ひとりでにそのマークの周辺の煉瓦が動きだし、バクが一人入れるほどの空間が出来た。
三人がその空間の奥を覗き込むと、なんと以前マイメロが使っていたメロディ・タクト

という魔法のアイテムが入っていた。
「ちっ、ハズレだよ。他には目印らしいものはないのかい？」
三人がまた壁を見回すと、煉瓦にドクロの刻印がある煉瓦が見つかった。
「ドクロのマークとは怪しいゾナ。押してみるゾナ」
バクがドクロマークの刻んである煉瓦を押すと、先程と同様にひとりでに壁の煉瓦が動いて、空間が出来た。
バクの予想通り宝箱のような箱があり、開けてみると、ドクロの装飾が施された弓と、先端にドクロが付いた数本の矢が入った矢筒と取扱説明書が入っていた。
「弓矢ゾナ！　ドクロボウゾナ！」
「これさえあれば、ジャガー先輩に復讐出来る！」
ニャンミは矢筒を紐で背中に括りつけると、ドクロボウを掴んだ。
「それじゃ、クロミ様、戻るゾナよ」
まだ何か物色しようとしているクロミに向かって、バクが言った。
「メロディ・キーはないのかね？」
メロディ・キーとは、以前にクロミが使っていた、悪夢魔法をかけることが出来る魔法アイテムである。
「クロミ様、長居は無用ゾナ！　行くゾナよ！」

「う〜〜ん……分かったよ！」
クロミは渋々承知して、三人は秘密の部屋を出ていった。
ドアが閉まると、その裏に隠れていた壁の煉瓦の一つに、『鍵』のマークが刻まれていた。
恐らく、クロミが探していたメロディ・キーはここに隠してあったのだ。

三人は侵入した時と同じく簡単に建物の外に脱出することが出来た。
「さーて、あとはジャガー先輩を捜して、その矢を先輩の胸に射れば、ニャンミの気も晴れるな。よーし、バク、いくよ！」
「はいゾナ！」
バクはクロミとニャンミを背中に乗せ、城から脱出しようと正門近くまで飛んできた時、眼下から言い争う声が聞こえてきた。三人が城のバルコニーを見下ろすと、王様のエレファント五五世と王妃様のルミちゃんが夫婦喧嘩をしていた。
「なんか面白そうだね。ちょっと見物してこうぜ」
クロミの提案に乗り、バクはバルコニー近くのマリーランドの国旗が頂上でたなびいている塔の上に舞い降りて行った。

王様と王妃様の喧嘩は実にくだらないものだった。
王様は人間界のテレビを観ることを何よりも楽しみとしており、以前は美人お天気お姉さんの雨宮晴香にハマり、ポスターやフィギュアなどの晴香グッズを集めまくっていた。
現在は、結婚して引退した雨宮晴香から人気美人局アナのタンパンこと丹下あゆみに乗り換え、夢中になっていた。
嫉妬深いルミちゃんは、それを許さず今日も喧嘩をしていたのだ。
「人間界のテレビに毒されるのもいい加減にしなさい！　ちょっと姿が見えないと思ったら、こんなものを人間界に行って買いあさってくるとは！」
そう言ってルミちゃんは写真週刊誌に乗っている丹下あゆみのパンチラ写真や胸の谷間が見える写真を王様に突きつけた。
「くっだらねえ。リーダー、バク、行こうぜ」
見ている方がバカバカしくなったニャンミがイラつきながら言った。
「ちょっと待つゾナ。様子がおかしいゾナ」
ニャンミが見ると、今まで喧嘩していたはずの二人が、何かあやしい雰囲気になってきた。
王様がルミちゃんの肩を抱き、
「刺身にたとえれば、タンパンは刺身のツマの大根で、ルミちゃんがメインの刺身じゃよ！　刺身を美味しく食べるためにツマは必要じゃろ？　ワシは刺身のルミちゃんを美味

しく食べたいだけなのじゃ」

「まあ、王様ったら」

ポッと頬を赤らめ、王様にしなだれかかる。

「夫婦喧嘩は犬も食わないっていうゾナが、見てる方が恥ずかしくなってきたゾナ。帰るゾナ」

「ホントだね。行こう行こう」

クロミが同意した時、

「ちょっと待って」

ニャンミが制した。

「どうしたんだい、ニャンミ？」

「あんなラブラブな二人は、ドクロボウを試す格好のターゲットだと思うんだ」

「なるほど。矢は六本あるんだから、一本ぐらい使っても構わないよな。ニャンミ、やってみな」

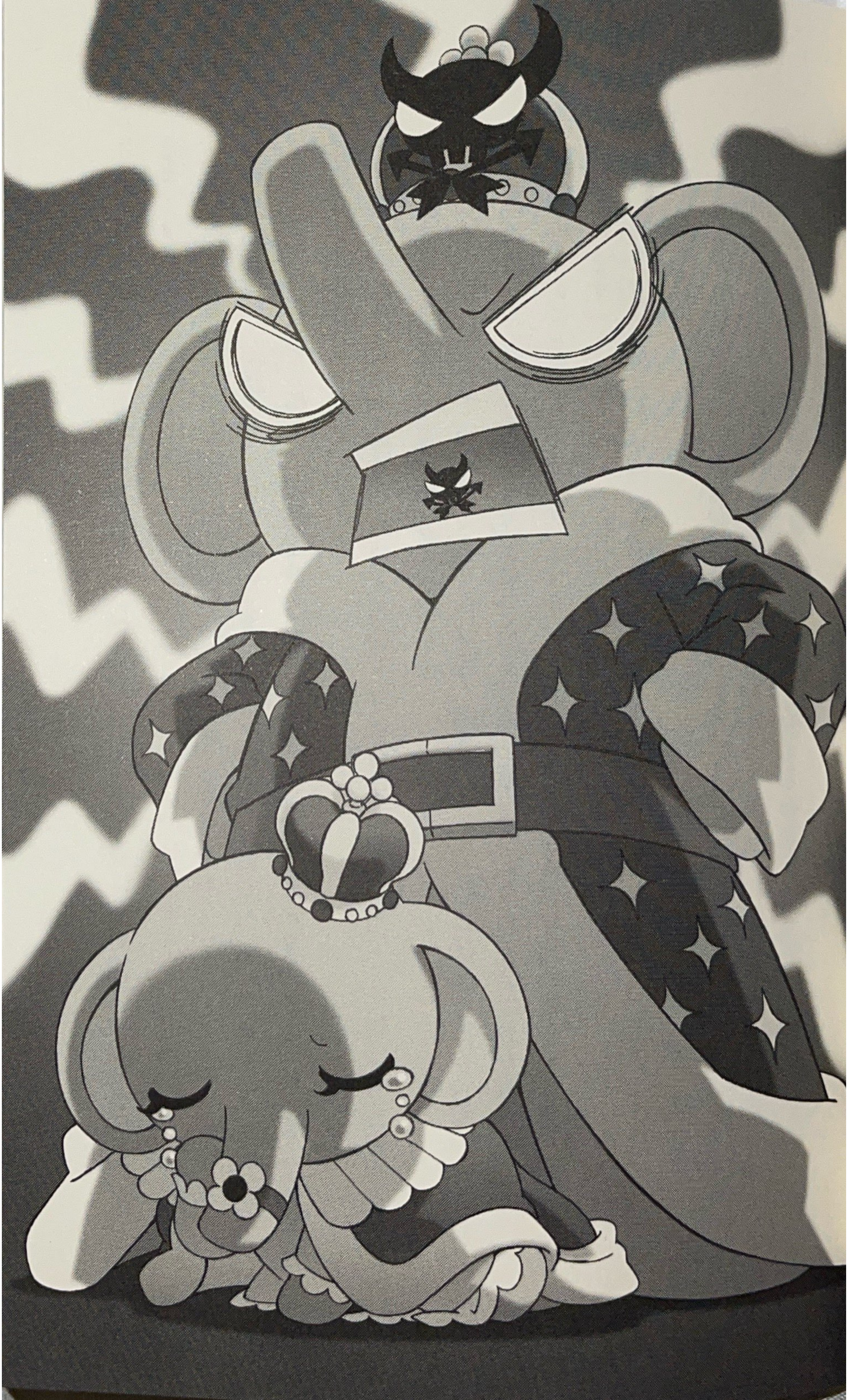
ニャンミは頷くと背中の矢を抜き、ドクロボウにつがえて弦を力いっぱい引っ張った。

そして、的である王様の胸に矢先がピタリと一致した時、矢を射った。

ところが、ちょうど王様がルミちゃんをお姫様抱っこしようと少し身を屈めたため、矢は王様の王冠に命中してしまった。その瞬間、矢は閃光し王冠に吸い込まれ、ドクロマ

ークが出現した。同時に王様の目が険しくなった。
「パオーーン！　なんでワシがこの女をお姫様抱っこしなきゃいけないんじゃ！」
そう言うと、王様はルミちゃんを床に放り投げた。
「い、痛い！　何をするのですか！」
「パオーーン！　黙れ黙れ！　タンパンの写真を集めたぐらいで文句を言うような女とは離婚だゾウ！」
「な、なんですってー！」
「離婚じゃ離婚じゃ！」
「それがあなたの本心なら、私にも覚悟はあります。ドリアン大臣！」
即座にドリアン大臣がバルコニーに飛び出してきた。
「なんでございましょう、王妃様」
「ドリアン大臣、ルミちゃんとはたった今離婚したところじゃ。ワシはタンパンこと丹下あゆみちゃんと結婚するゾウ！」
「はあ？」
ドリアン大臣は何がなんだか分からずポカンとしていた。
「ドリアン大臣、こんなバカ王様のことは放っておいて、すぐに元老院の方々を城に集めなさい！」

「かしこまりました、王妃様」
ドリアン大臣は一礼すると、猛スピードでバルコニーから建物の中へ駆け込んだ。
「な、何をするつもりじゃ」
「ふふふ、それは元老院の皆様が集まるまでのお楽しみよ」
その表情は優しい王妃様ではなく、『グラサンのルミ』と呼ばれていた頃のレディースのリーダーの顔になっていた。
その様子を塔から見ていた三人は思わず顔を見合わせた。
「なんかとんでもないことになってきたねえ」
「王妃様、怖いゾナ」
「ドクロボウの魔力ってすごいね！　リーダーもっと見ていこうぜ」
「あ、ああ……」
「ゾナ」
ニヤリと笑ったニャンミの瞳の奥で、微かに鈍い炎が燃え上がったが、一瞬だったためにクロミもバクも気がつかなかった。
一時間後、城内にある議事堂には、マイメロの祖父やマリーランドの長老たちで構成



されている元老院の面々が集まっていた。その中には、歳は若いが常に冷静な判断が下せるマイメロのママの姿もあった。

元老院の決定は、この国では王様の決定より重きが置かれていた。

議長の前に、王様とルミちゃんが並び、その後方に元老院の面々が並んでいる。

まず、ドリアン大臣が、王様とルミちゃんの離婚騒動の顛末を報告し、二人の離婚の是非について話し合われた。

ドクロボウによって付けられた王冠のドクロマークの影響で、王様は先程のベランダ以上の暴言をルミちゃんに向かって吐いた。

すでに冷静になっていたルミちゃんは軽く聞き流すと、時には涙を浮かべながら、自分がどれだけちゃらんぽらんで浮気者である王様を献身的に支えてきたかを語った。

「王様からの一方的な離婚宣告ですが、元老院としてはこれを認めるかどうか、議論したいと思います」

議長が元老院たちを見渡しながら言った。

「議長！」

マイメロのママが、手を挙げて立ち上がった。

「時間の無駄よ。こんなちゃらんぽらんな王様はこちらから願い下げよ。王妃様を女王にして、王様をクビにしてマリーランドから追放するのがいいと思うわ」

「な、なんじゃと⁉　やい、マイメロのママ！　王様のわしに対して何を言うか！」
しかし、マイメロのママは冷静だった。
「王様と言う割には、あなた、マリーランドのために、何か役立つことをしたことがあったかしら？」
「な、何っ⁉」
「あるんなら、言ってごらんなさい」
「い、いくらでもあるゾウ！」
王様は懸命に考えた。
「………」
王様は額に汗を浮かべながら考えた。
「………」
結局、何も出てこなかった。
「ほーら、ごらんなさい。この遊び人のゾウより、王妃様の方がどんなにマリーランドにとって重要な人物か、お分かりになったでしょう？」
マイメロのママの発言に、元老院の全員が大きく頷いた。
「どうやら、結論は出たみたいですね。マイメロのママが言うように、王妃様に女王になって頂き、王様はクビということでよろしいですね？」

「異議なし！」
元老院の全員が挙手した。
「パオーーン！　そんな裁定、わしは認めんゾウ！　おのれ、マイメロのママ！」
やけっぱちになった王様が、マイメロのママに詰め寄ろうとした時、怒りを露わにしたルミちゃんがその間に駈け込み、
「いい加減にしなさい‼」
強烈な右ストレートを放った。
パンチは王様の顔面を直撃した。
「うがっ！」
あまりの破壊力に王様は吹っ飛び、後方の壁にめり込む。
王冠は頭から落ち、王様は気絶した。
「お、王妃様、怖すぎるよ。さすが、伝説のレディースのリーダー……」
天井近くの天窓から見ていたクロミたちは震え上がった。バクに至っては、おしっこをチビるどころか、脱糞していた。
こうして、王様はその位を奪い取られ、ただのゾウさんとなって、近衛兵たちによって

城の外へ放り出された。王の服もマントも王冠も剥奪され、裸同然の姿で。
　王冠を被っていないため、もうドクロボウの魔力の影響は受けていなかった。
「なんで、わしがこんな目に遭わなきゃならんのじゃ！　ルミちゃん、入れてくれ！　ルミちゃん、お願いだゾウ！」
　頑丈な門を何度叩いても開くことはなかった。
「ルミちゃん……」
　ただのゾウさんは、ガックリと項垂れると、とぼとぼ歩きながら城から離れていった。
　その様子をバクの背中に乗ったクロミとニャンミが見ている。
「哀れの一言だね……」
「可哀想すぎるゾナ……」
　バクの目には涙が浮かんでいた。
「でも、ドクロボウの威力がよく分かったぜ。これで、ジャガー先輩も同じ目に遭わせてやる！　リーダー、先輩を捜しに行きましょう！」
「お、おおっ。バク、行くよ」
「分かったゾナ」
　三人はジャガー先輩を求めて、城下の街へ飛び去った。

議事堂に集まった全員が退室した後、室内の照明を消そうとしたドリアン大臣は、王様が壊した壁の近くで、何か光っているものを発見した。
「おおっ、あれは！」
王様が落としたドクロマーク付きの王冠だった。
ドリアンは王冠を拾うと、うっすらと笑みを浮かべた。
「もし私が王様になれば、マリーランドはどんなに良い国になるか……。そうなれば、王妃様も私のことを見直して……」
ドリアンは妄想した。自分が王様になり、ルミちゃんが自分の妻になることを。
実は、ドリアンは以前からルミちゃんに好意を寄せていた。どうして、聡明で優しいルミちゃんがあんなちゃらんぽらんな王様の妻でいるのか、ずっと腹立たしく思っていたのだ。
「王妃様が女王様になられてはもう遅いが……ああ、王様になりたかった」
そう言いながら、なんとなく王冠を頭に乗せた瞬間だった。
王冠のドクロマークが激しく閃光したかと思うと、ドリアンの丸いサングラスが尖ったパンクっぽいデザインに変わった。
「ぐわっはっはっ！　なんだ、この高揚感は？　体中にとてつもないパワーが漲って来

たぞ！」

ドリアンは議事堂を飛び出していくと、近衛兵に命じて新女王になったルミちゃんを謁見の間に呼び出した。

「どうしたのですか、ドリアン大臣？」

部屋に入ってきたルミちゃんは、玉座にふんぞり返っているドリアンを不審そうに見ながら尋ねた。

「今日から私がこの国の王様になることを決めたよ、ルミちゃん」

「ル、ルミちゃん⁉」

王様以外から名前で呼ばれたことがなかったので、ルミちゃんの顔が一瞬のうちに凍りついた。だが、新女王として、ここは威厳を保たなければならない。すぐに冷静さを取り戻して言った。

「何を冗談言っているのですか。私の機嫌が悪いのを分かってるでしょう？　早く玉座から降りないと、大臣をクビにしますよ」

「私が……いや、わしが慕っておったことにも気づかず、あんなちゃらんぽらんなゾウとイチャイチャしおって！　お前のように空気が読めない女は城から追放だ！」

ドリアンの王様以上の暴言に、ルミちゃんはワナワナと震え出した。

「大臣、許しません！　皆の者、この無礼な男を捕まえて、反省部屋に放り込んでしまい

なさい！」
ルミちゃんの命令に、近くにいた近衛兵たちが一斉にドリアン大臣めがけて殺到した。
「わしに逆らえばどうなるか、思い知らせてやる！　うわおおおお——っ‼」
王冠のドクロマークが強烈に輝くと、ドリアンの体がみるみる大きくなっていく。
「こ、これは⁉」
ダークパワーのせいで何度も悪夢を見せられているルミちゃんの背筋に悪寒が走った。
「女王様、危険です！　お逃げ下さい！」
近衛兵たちは守られながら、ルミちゃんは謁見の間を逃げ出した。

ルミちゃんが城の建物から脱出してきた時、騒ぎに気づいたメガネザル博士が、城の敷地内にある王立魔法研究所から駆けつけた。
「王妃様……いや、女王様、如何なさいました？」
「メガネザル博士、あれを！」
遂に城の天井や壁をぶち壊して、強大化したドリアン大臣が土煙の中から現れた。
「さあ、わしに跪け！　さもないと、踏み潰すぞ！」
城の侍従たちは悲鳴を上げて、城門の方へ逃げ出したが、近衛兵たちの何人かは果敢

に槍を持ってドリアンに立ち向かった。
だが、二〇メートルはあろうドリアンにあっさり蹴り飛ばされてしまう。
メガネザル博士は、すぐに大臣が被っている王冠の中央にドクロマークがあるのに気づいた。
「あのマークは⁉　間違いない！　女王様、大臣は禁断の魔法アイテム、ドクロボウの影響で暴れているのです」
「なんですって⁉」
ルミちゃんは以前、王様からその存在を聞いており、愕然とした。
「ここは、あの子に頼んで大臣の暴走を止めるのが第一！　私についてきて下さい！」
そう言うと、メガネザル博士はルミちゃんの手首を掴み、城の裏の方へ駈け出した。
二人がやって来たのは、城内の秘密の部屋だった。
「やはり、そうであったか……！」
メガネザル博士は、開けっ放しになっている、ドクロボウが封印されていた壁の穴を見るなり言った。
そうしている間にも、城が破壊される音や近衛兵たちの悲鳴が聞こえてくる。

メガネザル博士は、壁にもう一つ穴を発見した。

「ま、まさか……」

博士の危惧はすぐに消えた。穴の中に入っていた宝箱は開けられていたが、幸いにもメロディ・タクトは無事だった。

博士がメロディ・タクトを掴むのを見て、ルミちゃんは言った。

「この危機を救えるのは……マイメロしかいませんね！」

博士は大きく頷いた。

それから、二人は秘密の部屋を出ると、気球で上空へ脱出した。

城のほぼ半分を破壊し、近衛兵のほとんどを吹っ飛ばした巨大化ドリアン大臣は、ルミちゃんを捜していた。

「ルミちゃんはどこへ行った？」

大臣は倒れている近衛隊長をつまみ上げて尋ねた。

「わ、分かりません……」

「この役立たずめが！」

近衛隊長を放り投げた時、気球が上空の遥か先に浮かんでいるのを発見した。

「おのれっ、脱出したか！　わしを新しい王様に任命するまでは、どこまでも追いかけてやるぞ！」

ドリアンはそう叫ぶと、城の破壊を止め、気球を追った。

アンダンテの森で、『どろけい』で遊んでいたマイメロたちは、泥棒組の圧勝に終わり、帰路につこうとしていた。

「マイメロ――ッ！」

上空からルミちゃんの声が聞こえてきた。

マイメロたちの前に気球がゆっくり下りてくる。

「王妃様だ！」

まだ女王になったことを知らない子供たちが駆け寄っていった。

気球が着地する同時に、ルミちゃんとメガネザル博士が降り立ち、お城の大異変について手短に説明した。

「またドリアン大臣かあ」

ドリアンが何度もダーちゃんやダークパワーに体を乗っ取られて大暴れしていることを知っている子供たちは、さほど驚かなかった。

だが、突然地響きがしたかと思うと、森の木をなぎ倒して近づいてくるドリアン大臣の巨大な姿を見た途端、表情が一変した。

「うわあああ——っ！」
「こ、怖いクマ〜〜ッ！」
一番怖がりのクマくんはオシッコをちびった。
グングン近づいてきて、マイメロたちを見下ろしながら、ドリアンは言った。
「さあ、ルミちゃん、大人しく捕まって、マリーランドの住民どもに、今日からお前に代わってこのドリアンが王様になったことを宣言してもらおうか」
「そんなこと、するわけがありません！」
ルミちゃんはきっぱり拒否すると、メガネザル博士を見た。
博士は大きく頷くと、手に持っていたメロディ・タクトをマイメロに差し出した。
「うわあ、メロディ・タクトだ」
「マイメロ、これでドリアン大臣を倒して、元の大臣に戻すのじゃ」
「はいはーい」
マイメロは、メロディ・タクトを振りながら呪文を唱えた。
「メロディーマーク！　くるくるシャッフル！」
空中にメロディ・コンパクトが出現すると、蓋がひとりでに開いて、二〇枚ほどの裏返しのカードが飛び出してきて、くるくると円を描きながら回り出す。そして、回転が止まると、一枚のカードがクルリと飛び出してくる。

そのカードはお助けキャラで、バイクに乗った『グラサンのルミ』である。
その瞬間、ルミちゃんが瞬時に消え、代わりにカードの絵と同じサングラ
レディースの特攻服を着たグラサンのルミがバイクに跨って現れ、エンジンの爆音
かせた。
「グラサンのルミさん、ドリアン大臣をなんとかして。おねがい♥」
グラサンのルミは、ポッと頬を赤らめたが、すぐにドリアン大臣に視線を向けた。
「このグラサンのルミが来たからには、タイマン勝負だよ！　行くぜ、ドリアン！」
フルスロットルで、ドリアンの足めがけてバイクを突進させた。
「ふん、威勢だけはいいが、今のわしに勝てるはずがないわ！」
バイクごとルミを蹴り飛ばした。
「きゃあああああ！」
ルミは木に激突して、目を回してしまった。
「ありゃま」
マイメロはちょっとガッカリしたが、気を取り直して、
「グラサンのルミさん、頑張って。も〜〜っとおねがい♥」
可愛く頼んだ。
途端に、ルミは復活した。

「あたいとしたことが。ライオンにアリが突っ込んでも敵うわけないよ。ここは、ルミちゃんジャイアントだ！」
ルミの体が瞬時に、ドリアンと同じ大きさになった。
「な、何っ⁉」
ドリアンが怯んだ隙に、ルミの強烈なパンチが腹に決まる。
「うがっ！」
ドリアンが腹を押さえて蹲った瞬間、今度は強烈な回し蹴りが顔面に決まる。
「ぐわあああ！」
吹っ飛んだドリアンは森の木を数本なぎ倒して止まった。
「お、おのれ……」
ドリアンが歯を食いしばりながら立ち上がり、反撃に出ようとした時だった。
「そこまでだよ、ドリアン！　必殺『ガン飛ばし』！」
ルミはサングラスを外して、ドリアンに向かって睨みつけた。
その目から凄まじい光が飛び出して、ドリアンに命中！
ドッカーン！
大爆発して、煙が周囲を包んだ。
やがて煙が消えると、元の大きさに戻ったドリアンが倒れていた。

その前には王冠が転がっており、ドクロマークが突然閃光すると、矢に変わった。
メガネザル博士がすぐに駆け寄り、王冠から矢を抜くと、その矢先にはドクロがついていた。
「やはり、これはドクロボウの矢だ」
苦々しそうに言うと、その矢を膝で折って投げ捨てた。
マイメロはルミを見上げると、メロディ・キャンディを一粒出して、
「グラサンのルミさん、ありがとう。はい」
ルミの口に放り込む。
その途端、グラサンのルミは消え、代わりに女王のルミちゃんが現れた。
「マイメロ、見事です。よくやりましたね」
ルミちゃんが微笑んだが、すぐにハッとなった。
「ひょっ、ひょっとして、王様が豹変して、私と離婚をしようとしたのは、ドクロボウのせいだったのでは⁉」
「その通りです」
メガネザル博士が頷いた。
「わ、私はなんという間違いをしてしまったんでしょう……」
ルミちゃんがため息をついた時、女王を心配した近衛兵たちが駆けつけてきた。

「よくぞ、ご無事で。ドリアン大臣は？」
近衛隊長が尋ねた。
ルミちゃんは気絶しているドリアンを指差して、
「三日間、反省部屋に入れて反省させなさい」
「はっ」
隊長は部下に命じて、ドリアンを捕獲した。
ルミちゃんは、マイメロたちと一緒にいるハリネズミくんを呼び寄せた。
「ハリー、お城まで行って、例のコロリンで壊れた建物を元に戻してくれませんか」
「分かったでっす」
ハリネズミくんには、コロリンと前転するだけで、すべてなかったことにしてしまう凄い能力があるのだ。
ルミちゃんは一安心すると、再び真顔になり、近衛兵たちを見て言った。
「皆さん、大至急王様を捜し出して、城に連れ戻してきて下さい」
「女王様、それどころではありませんぞ。今はドクロボウを盗み出した犯人を捜し出して、捕まえるのが先です！」
博士の言葉にルミちゃんが大きく頷いて、近衛兵たちに犯人捜しを命じた時、ピアノちゃんが叫んだ。

「わっぱ、めーめーめー」
「えっ、お城からそんな凄い魔法アイテムを盗め出せるのは一人しかいない？」
フラットくんが翻訳して伝えた。
ルミちゃんはハッとして叫んだ。
「クロミ！　……そうですね！　そんな大胆なことが出来るのは彼女しかいません。皆の者、大至急クロミを捕まえるのです！」
「はっ！」
近衛兵たちが一斉に頷き、駆け去った。
「どうして、クロミちゃんが……」
見送りながら、マイメロが心配そうに呟いた。

その頃、クロミ、ニャンミ、バクは、ワンミたちと城下の公園にいた。
ワンミたちの話によると、ジャガー先輩はニャンミを思いきり振った後、付き合っている彼女たちと時間刻みでデートを楽しんでいるらしい。
クロミたちは、ワンミたちと合流後、街の人々から目撃情報を得ながら、ジャガー先輩の行方を追ったのだが、なかなか見つけることが出来ないでいた。

「こうなったら、また手分けして捜すしかないね」
クロミが言うと、ニャンミが首を横に振った。
「これ以上、リーダーたちの手を煩わせたくないよ。これから、あたい一人で決着をつけるよ」
「何を言ってるゾナ。あんなプレイボーイを放置しておくと、ニャンミみたいに悲しむ女の子が何人もでるゾナ！」
バクが負け犬オーラを放ちながら拳を握りしめた。
「バクの言う通りだ！　ニャンミ、あたいたちが必ず見つけ出してやるよ！」
「リーダー……」
ニャンミの目に熱いものが溢れた時だった。
「あっ、あれっ！」
コンミが一方を指差した。
クビに真っ赤なスカーフを巻き、白い高そうなシルクのシャツの上にグレーのベストを着たジャガー先輩が、ネコ族の可愛らしい女の子の肩を抱きながら、こちらの方に向かって歩いてきた。
「あいつ〜〜っ！」
ニャンミの瞳にメラメラと嫉妬の炎が燃え上がる。

「ニャンミ、早く矢をぶち込んでやりな！」
クロミの言葉に頷いて、ニャンミがドクロボウに矢をつがえて、弦をキリキリと引いた時だった。
「クロミがいました！」
という声が後方から聞こえてきた。
クロミたちが振り返ると、二〇人ほどの近衛兵たちが槍を構えて迫っている。
「あっ、ドクロボウらしきものを持っています！」
近衛兵の一人がニャンミが持つドクロを見て叫んだ。
「クソ〜〜ッ！　もう少しだったのに！」
ニャンミが射るのを諦めて吐き捨てるように言った時、ワンミ、コンミ、チュウミが素早く改造三輪車に飛び乗った。
「バク、ここはあたいたちに任せて、リーダーとニャンミを連れて逃げるんだ！」
「お前ら……！」
仲間のレディース魂に、クロミとニャンミの目に熱いものが浮かんだ。
「早く行って下さい！」
そう叫ぶと、ワンミたちはすぐ近くまで迫ってきた近衛兵たちに向かって改造三輪車で突っ込んでいった。

「絶対、捕まるんじゃないよ！　バク、行くよ！」
ニャンミと共に、クロミがバクの背中に飛び乗った。
「行くゾナよ！」
バクが上空に舞い上がった。
その背中から近衛兵たちを三輪車でぶっ飛ばしながら逃亡していくワンミたちに、クロミとニャンミは心の中で手を合わせるのだった。
「クロミ様、これからどこへ逃げるゾナ？」
「このままマリーランドにいたって、逃げ回るしかないよ。ほとぼりが冷めるまで人間界に行っていよう」
「それじゃあ、あたいの復讐が……」
「心配するなって。チャンスを窺って、また舞い戻ってくればいいさ」
「じゃあ、人間界へ行くゾナ！」
二人を乗せたバクが、ますますスピードを上げ、上空に浮かぶ人間界との出入口になっている巨大ホルンの中へ飛び込むと、大きな音が鳴り響いた。
近衛兵たちから報告を受けたルミちゃんは、直ちにマイメロ、フラットくん、ピアノち

やんを城の謁見の間に呼び寄せて、事情を話した。
ハリネズミくんのお陰で、城はすっかり元通りになっている。
「マイメロ、人間界に行き、フラットくんとピアノちゃんと協力して、クロミたちから
ドクロボウを取り戻してきて欲しいのです」
「うわ〜い、また歌ちゃんに会えるのね？　マイメロ、嬉しい」
「何をのんきなことを言っておるんじゃ！　クロミたちが人間界でドクロボウを使えば使
うほど、大変なことが起こってしまうのだ」
ルミちゃんの横に控えていたメガネザル博士が言った。
「大変なこと？」
フラットくんが聞き直すと、博士はドクロボウの取扱説明書を見ながら解説した。
それによると、王子時代のエレファント五五世の命により、ドクロボウを作った際、黒
の森から抽出したダークパワーを使ったため、矢を射るたびに射た者の体にダークパワ
ーが蓄積され、最後の矢を射た時、その者は完全にダークパワーに心も体も支配されてし
まうのだ。
「うわっ、めー！」
ピアノちゃんが震え出した。
もし、そんなことになったら、ダーちゃんの時のように、人間界の人々は夢を失い、マ

リーランドが滅びる可能性もあるからだ。
「マイメロ、大至急人間界へ行って、ドクロボウを取り戻そう！」
フラットくんの言葉に、マイメロは頷くも、
「でも、パパやママたちが心配するから、お家に帰ってちゃんとお話ししないとね」
どこまでもマイペースだ。
「そちらの方は私から知らせておきますから、直ちにクロミたちを追うのです」
「分かったわ。マイメロ、頑張る」
こうして、マイメロたちもルミちゃんたちに見送られて、傘でフワフワと舞い上がり、人間界へと旅立ったのであった。

第二章　会えたらイイナ！



マイメロたちより一足先に人間界の夢ヶ丘市に到着したクロミ、バク、ニャンミは、まずは自分たちが住める家を探すことにした。
「柊しゃまのお屋敷に行ってみようぜ」
「柊様も潤様も日本にはいないゾナ。行っても無駄ゾナよ」
「そんなの行ってみなきゃ分かんないだろ！　とにかく、行くんだよ！」
クロミがハリセンでバクの頭を叩いた。
「分かったゾナ……」
バクは渋々承知して、クロミとニャンミを背中に乗せ、柊家の屋敷へ向かった。
バクの予想通り、柊家の正門は頑丈な鎖と大きな南京錠で厳重に閉ざされていた。
三人は屋敷の建物の方を見たが、すべての窓にカーテンが引かれて、人の住んでいる気配は全く感じられない。
「諦めるゾナ」
宙に浮いていたバクがUターンしようとした時、
「何言ってんだい。誰もいないんなら好都合だろ？　とにかく、入ってみようぜ」
クロミがバクの背中から正門の上部に飛び移った。
その瞬間、クロミの体に電流が走った。
「ぎょえええええ――っ！」

感電したクロミは、地面に落下して気絶した。
「だから、言わないこっちゃないゾナ。柊家の警備システムは、マリーランドのお城とは『月とスッポン』ゾナ」
「塀から忍び込んだら、どうなんだよ？」
ニャンミが提案すると、バクは首を横に振った。
「無理だと思うゾナ。やるんなら、自分でやってみるゾナ」
バクが門の横の塀まで移動して、ニャンミが塀の上に移り、さらに敷地内に飛び降りた時だった。
庭の方から何やら茶色い二つの物体が地を這うように急接近してきた。
柊家で飼われている二匹のワニだった。
「な、何だよ、このワニは!?」
「柊家に飼われている『地獄のミッチャン』と『横須賀のヨッチャン』ゾナ！」
ミッチャンとヨッチャンは口を開け、鋭い歯をニャンミに向けて、間合いを詰めてくる。
「ひ……ひぃいいいいい——っ！」
あまりの怖さにニャンミが震え上がった瞬間、二匹のワニが飛びかかってきた。
だが、噛まれる寸前に、バクが上から飛んできてニャンミを掴んで急上昇したため、

二匹のワニは塀に激突して目を回した。
「危ないとこだったゾナ」
「あ、ありがとうよ、バク。……柊家、恐るべしだね」
ニャンミの声はまだ震えていた。
バクは路上で気絶しているクロミを回収して、柊家を離れようとした時、一台のリムジンが到着した。
「ん？　ひょっとして、柊しゃま⁉」
ようやく目を覚ましたクロミが瞳を輝かせながら言った。
だが、リムジンから出てきたのは、男女数人の使用人を引き連れた黒い背広姿に黒いサングラスをかけた、柊潤の執事のセバスタンだった。
セバスタンはポケットからおもむろに鍵を出すと、門に掛かっている南京錠を開け、鎖を外し始めた。
「バク、行くよ！」
「はいゾナ！」
三人はセバスタンの横へすっ飛んで行った。
「おおっ、これはクロミ様、バク様ではありませんか！　お懐かしゅうございます」
セバスタンは笑顔で言った。

「ホントだね、セバンスチャンさん」
クロミは名前を間違えた。セバスチャンは柊恵一の執事で、セバスタンの双子の兄の方だった。
「ク、クロミ様！」
バクがクロミに間違いを指摘する前に、セバスタンのサングラスがキラーンと光った。
「失礼な！　私は潤様の執事のセバスタンでございます！　この頭をお忘れになったのでございますか⁉」
禿げ頭のてっぺんににょろっと生えている一本の髪の毛を指差した。
「ああ……！　ご、ごめん。セバスタンさん」
「まったく失礼にも程があります！」
セバスタンは不愉快そうに鎖を外し、使用人たちに荷物を屋敷に運ばせた。
「セ、セバスタンさん……機嫌直してくれ……いや下さいよ。ちょっとした間違いなんだからさ」
クロミが下手に出てもセバスタンは無視して、屋敷の玄関へ向かって歩き出した。
「セバスタンさん、待つゾナ！」
バクがセバスタンの前に回り込むと、いきなり土下座をして、
「クロミ様の無礼、許して欲しいゾナ。この通りゾナ」

地面に額をつけて謝った。
セバスタンの口許に笑みが浮かんだ。
「さすがバク様。謝り方を分かっていらっしゃる」
バクは顔を上げ、小さく安堵の息を吐くと、セバスタンの目を見て言った。
「セバスタンさん、お願いがあるゾナ」
「何でございましょう？」
「バクら三人をまたこのお屋敷に住まわせてくれゾナ」
「うーむ……」
「この通りゾナ」
再び頭を下げるバクの肩に手を置き、セバスタンが済まなさそうに言った。
「バク様の頼みとはいえ、こればかりは私の判断だけで認めるわけには参りません。潤様の許可がない限り無理でございます。申し訳ございませんが、お引き取り下さい」
「そうゾナか……失礼するゾナ」
バクは立ち上がり、ガックリしながら不機嫌そうな顔で見ていたクロミとニャンミのもとへ歩き始めた。
「お待ち下さい、バク様」
セバスタンが呼び止めた。

「ゴールデンウィークの頃には、潤様が夢ヶ丘に帰って参ります。その時、またお越し下さい。潤様なら、多分許可して下さると思います」
「セバスタンさん！　有難うゾナ！」
バクは深々と頭を下げた。

「なんだい、なんだい、ちょっと名前間違えたくらいで勿体ぶっちゃってさ」
バクの背中にニャンミと乗って、上空を飛んでいるクロミが言った。
「そんなこと言うと罰が当たるゾナ。三週間我慢すれば、またあのお屋敷に住めるゾナよ」
バクがたしなめた。
「ふんっ！　その三週間をどこで雨露を凌ぐのさ！　アテもないくせにさ」
「アテならあるゾナ」
「ホントかい⁉」
「もうすぐ着くゾナ」
そう言うと、バクはゆっくり下降し始めた。
そして、到着したところはボロアパートだった。

「こ、ここは……！」
その今にも倒れそうな建物を見た途端、クロミが絶句した。ニャンミも露骨に嫌そうな表情に変わった。
そこは、以前柊家を追い出されたクロミとバクが住んでいた『負け犬荘』だった。
「なんだかオバケが出てきそうなアパートですね、リーダー」
玄関に入り、歩く度に軋む音を立てる廊下を歩きながらニャンミが言った。
「前に住んでいた時よりさらにボロッちくなってるよ。こんなところに住む奴の顔が見てみたいよ」
と、クロミが言った時、一番奥の部屋からハミングする声が聞こえて来た。
「誰かいるゾナか？」
バクはその部屋のドアの前に行くと、ノックしながら、
「ごめんくださいゾナ」
と、声をかけた。すると中から、
「鍵は開いているゾウ」
という声が返ってきた。
「失礼するゾナ」
バクがドアを開け、入って行くと、半畳程の台所で踏み台に乗った小さなゾウがハミ

ングしながらフライパンを振っていた。
バクの後ろから入ってきたクロミとニャンミが覗き込んだ。
「ん？　どこかで見たような……」
その時、ジャンパーの上からエプロンをしたゾウが振り返った。王様のエレファント五世……いや、今はただのゾウさんだった。
「おお、クロミ、バク、ニャンミではないか！」
「お……王様!?」
三人が驚愕すると、ゾウさんは照れ笑いを浮かべて、
「ほっほっほ、王様はクビになったゾウ。今はただのゾウさんじゃ」
「またクビになったゾナか！　知らなかったゾナ」
「それよりお前たち、なんでここにおるんじゃ」
ゾウさんの問いに三人は顔を見合わせた。
「あ、その……ちょっと訳ありで、また人間界にやってきたんだよ」
「また何か悪さをしたんじゃろ」
三人はドキッとし、冷や汗をタラタラ流していた。
「そ、そ、そんなことはないゾナ」
「まあ、どうでもいいゾウ。今のわしは王様ではなく、ただのゾウさんじゃからのう。そ

れよりお前たち、腹は空いておらんか？」

「はあ……」

途端に、三人のお腹がグ～ッと鳴った。

「ほっほっほっ、お腹は正直じゃのう。ちょうど今チャーハンを作っていたところだ。四人分作るから、テーブルの上をこれで拭いてくれ」

と言ってゾウさんは布巾をバクに投げた。バクは布巾をキャッチし、すぐに卓袱台を拭いた。

ゾウさんは四人分のご飯をフライパンに入れると、それまで炒めていた野菜や魚肉ソーセージと混ぜて炒め始めた。

バクが王様の横に行き、四枚の皿を用意している間、クロミとニャンミは卓袱台の前に座り、四畳半の部屋を見回すと、壁のあちこちにタンパンこと丹下あゆみのポスターや雑誌の切り抜き写真が貼ってあった。

「さあ、出来たゾウ」

王様とバクが四人分のチャーハンとスプーンを持って来た。

「いただきます」

「いただくゾナ」

四人はチャーハンを食べ始める。

「おお、バクの大好きな魚肉ソーセージゾナ！　味も最高ゾナ！」
ゾウさんは満足そうに笑顔で頷く。
「王様……いや、ゾウさん。このキレイなお姉ちゃんは誰なんだい？」
「なんじゃ、タンパンを知らないのか。今、この国で一番人気がある美人局アナの丹下あゆみちゃんじゃ！」
「ふーん……」
「なんじゃその薄い反応は！　まあ良い。お子ちゃまなお前たちにはタンパンの良さが分からんのじゃ」
「で、でも結構イケてるお姉さんゾナ」
ゾウさんの機嫌を直そうと、バクが愛想笑いを浮かべて褒めた。
「そうじゃろう！」
王様はすぐに機嫌を直し、満面の笑みで、さらに続けた。
「実はのう、タンパンが務めるテレビ局のＡＤの試験を受けたら合格したんじゃ！」
「ええ――っ……うぐっ」
思わずクロミがチャーハンを喉に詰まらせてむせた。バクが素早く流しに行き、グラスに入れた水をクロミに飲ませた。
「ふー……普通、王様をクビになったら落ち込むはずなのに、すごいポジティブなんだ

ね、ゾウさん」
「当たり前じゃ。これから毎日タンパンに会えるんじゃ！　わしの人生、バラ色じゃ！」
（単純な奴……）
クロミは心の中で思ったが、口には出さなかった。
食事が済み、みんなで食器を洗いながら、クロミが三週間だけ一緒に住まわせて欲しいと頼むと、ゾウさんは二つ返事で了解してくれた。
「それじゃあ、わしは出かけて来るゾウ」
「え、どこへ行くゾナか？」
「テレビ局じゃよ。タンパンの深夜番組の収録があるんじゃ。それじゃあのう。布団は適当に使っていいゾウ」
タンパンに会えるのが嬉しいのか、ゾウさんは口笛を吹きながら出かけて行った。
「バクも出かけてくるゾナ」
「えっ!?　バク、まさかお前までテレビ局に……」
「違うゾナよ。当分こっちにいるんなら、ゾウさんに世話になりっぱなしでは申し訳ないゾナ。バクたちの生活費ぐらいは稼ぐゾナよ」
「なるほどな。もしかして、新聞配達のアルバイトかい？」
クロミが尋ねると、バクが笑顔で頷いた。

「ピンポンゾナ。行ってくるゾナ」

バクも出かけて行った。

バクが採用されたのは言うまでもなかった。新聞配達店の主人は真面目なバクをすごく買っていたのだから。

その頃、マイメロ、フラットくん、ピアノちゃんは、ようやく夢野家の上空に辿り着いたところだった。

心地よい風に桜の花びらが三人の前を通り過ぎていく。

「とっても気持ち良い風ね」

「わっぱ、めー」

風に揺られながら傘でユラユラ揺られていると、フラットくんが、眼下の通りを歌が歩いて来るのを発見した。

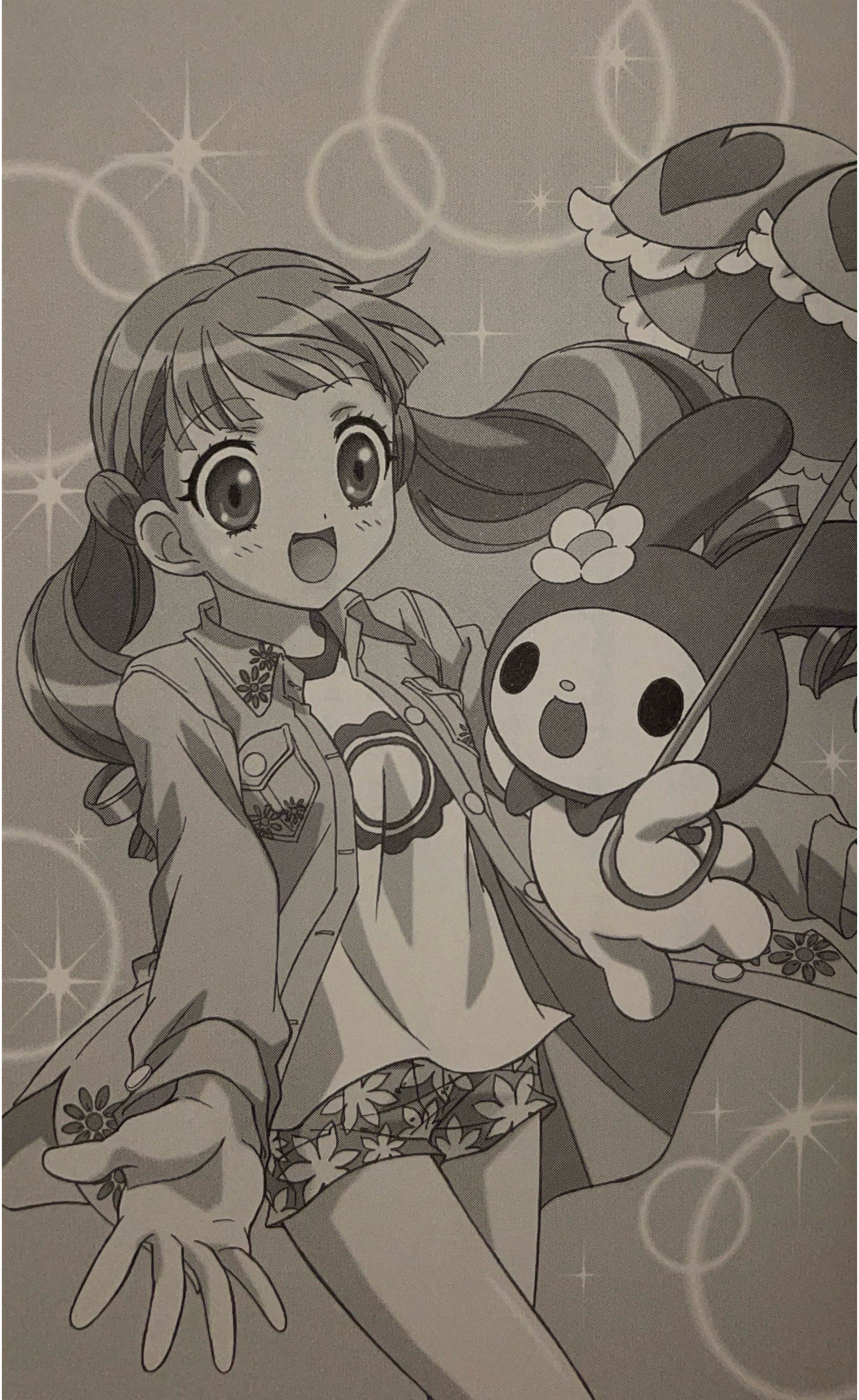
「あっ、歌ちゃんだ！」

「うーたーちゃーん」

マイメロが片手を振りながら声をかけた。

歌が驚いて頭上を見上げると、マイメロたちが舞い降りて来る。

「マイメロ⁉」
「歌ちゃん、会いたかったわ」
マイメロは歌の腕に飛び込んだ。
「私だって同じだよ！」
歌は嬉し涙を浮かべ、マイメロを抱き締めた。
「いや〜ん。歌ちゃん、苦しい」
「ご、ごめん！　つい力が入っちゃって」
フラットくんとピアノちゃんも、二人の横に着地した。
「歌ちゃん、久しぶり！」
「わっぱめ〜」
「フラットくんもピアノちゃんも一緒なんだ！　本当に久しぶりね」
歌は二人とも握手をした。
「さあ、入って入って」
歌が玄関のドアを開け、三人を招き入れた。
「お父さん、ビッグニュース、ビッグニュース！」
自分の部屋で原稿を書いていた雅彦が、
「ビッグニュース？　宝くじでも当たったのか」



などと言いながらリビングに入ってきた。
「買ってないのに当たるわけないでしょ！　見て見て！」
歌は足下にいるマイメロたちを指差した。
「おおー、マイメロ！　フラットくん！　ピアノちゃん！　久しぶりぶり大根！」
「開口一番ダジャレかよ」
フラットくんがツッコむが、マイメロはニッコリ微笑み、
「マイメロ、ぶり大根だーいすき。今夜作っちゃおうかな」
見事なボケに一同は、
「…………」
「もうマイメロったら相変わらず天然なんだから〜」
みんなの顔に笑みが溢れた。
その時、大学の授業を終えた奏と部活を終えた琴が帰って来た。
「マイメロ〜〜！」
二人に代わる代わる抱き締められ、マイメロは嬉しそうに笑った。
「ところでマイメロ、どうして戻ってきたの？」
琴が尋ねると、
「そんなに急かさないで。紅茶にしましょ」

あくまでもマイペースなマイメロに、みんなは苦笑した。
マイメロが淹れた紅茶を飲むと、みんな笑顔になった。
「おいしい！」
「やっぱマイメロの淹れた紅茶は最高だわ！」
「ふふふ、ありがとう」
「それでマイメロ、どうして戻ってきたの？」
今度は歌が尋ねた。
「あのね～……クロミちゃんたちがね～……」
のんびり口調で話すマイメロに代わって、フラットくんがテキパキとマリーランドの城からクロミたちがドクロボウを盗み出して人間界に逃亡したことを説明した。
「またクロミの奴か……」
奏が呆れ顔で呟いた。
「いや、どうやら主犯格はクロミじゃなくてニャンミみたいなんだ」
フラットくんが言った。
「ああ、クロミーズ５のサブリーダーね」
フラットくんが頷き、続けて言った。
「理由は分からないけど、ドクロボウを持ってると危険なんだよ」

マリーランドから持って来たドクロボウ取扱説明書を見せながら、メガネザル博士が教えてくれたことを話した。
「その矢を全部射たらダークパワーに身も心も乗っ取られる!?」
ダークパワーには何度も苦い目に遭っている夢野三姉妹が驚きの声を上げた。
「マイメロ、分かったわ。私たちも協力してクロミたちを捜し出すわ」
「ありがとう、歌ちゃん」
マイメロがニッコリ微笑んだ時、ピアノちゃんが立ち上がった。
「わっぱ、めーめー」
「ピアノちゃん、美紀ちゃんに会いたいんだって」
マイメロが通訳した。
「美紀なら、さっき別れたばかりだから、家にいると思うわ。美紀もピアノちゃんと再会したら、驚くと思うわ」
「わっぱめー」
ピアノちゃんは嬉しそうに頷くと、夢野家の面々に一礼して去って行った。
「僕もまた駆の家に厄介になるよ」
フラットくんも立ち上がろうとしたが、歌が制した。
「駆は家にはいないわ」

「え？」
「駆は都内の高校に進学して、今は寮暮らしなの」
「へえ、歌ちゃんとは学校が別々なんだ。じゃあ、当分は僕もこの家に厄介になるしかないか……」
「お父さん、フラットくんも一緒に暮らしてもいいよね？」
琴が雅彦を見て言った。
「勿論だよ。賑やかになるのは大歓迎さ」
「良かったね、フラットくん」
マイメロも嬉しそうだ。
「ああ。でも、なんで駆の奴、歌ちゃんと違う高校へ進学したんだ？」
「それは……」
歌が言いづらそうなので、代わりに奏が答えた。
「駆くん、中三の時に、県の陸上大会の一〇〇メートルで、中学新記録で優勝したのよ」
「へえ、すごーい」
マイメロが驚きの声を上げた。
「それが、有名な体育大学の付属高校の陸上部のコーチの目に留まり、推薦入学したっ

てわけ」
「高校に入ってからも、都大会で一年生ながら二位になったんだよね、歌ねえ」
琴が歌を見ながら言った。
「ええ……」
「へえ、駆、走るの得意だったもんな。ふふ、今度会ったら、褒めてやろうっと」
フラットくんもまるで自分のことように喜んだ時、
「でも、違う高校なら、歌ちゃん、駆くんと会えなくて、寂しくないの？」
マイメロが尋ねた。
「そ、そんなことないよ。ときどきメールは交換してるし、月に一度は夢ヶ丘にも帰ってくるから……」
歌は答えたが、声に力がない。
「ええ——っ⁉　メール交換だって⁉　いったいどんなメールをやり取りしてるんだ⁉」
雅彦が身を乗り出してきたので、奏がすぐに話題を変えた。
「折角、マイメロが戻ってきたんだから、マイメロの手料理食べたいな」
「琴も食べたーい！」
「じゃあ夕ご飯の買い出しに行きましょう！」
こうして雅彦以外は全員、買い物に出かけて行った。

「お、おい……」
雅彦も立ち上がろうとしたが、ソファーに座り直し、大きなため息をついた。
マイメロを抱いた歌たちが夢ヶ丘の商店街を歩いていると、あちこちの店の店主や店員たちがマイメロを見て声をかけてきた。
「お、マイメロじゃねーか」
「マイメロちゃん、帰って来たの？」
「またうちに買いに来てよー」
この町の人々はぬいぐるみのような生き物のマイメロにまったく違和感がなく、マイメロがダーちゃんの野望を阻止して地球を守ってくれた事を知っていた。
マイメロはみんなに手を振り、可愛らしい笑顔を振りまいた。
その時、商店街の向こうから人影が急速に近づいてきた。
「マイメロちゃーん！」
ぬいぐるみ好きでマイメロをこよなく愛する白山十三だった。
白山は歌と同じ夢ヶ丘学園高等部に進学しており、自ら立ち上げたぬいぐるみ同好会の部長をしていた。

白山は目をハートマークにして接近してくる。両手を開き、マイメロを抱こうとしたが、

「いやーん」

マイメロが拒否したために歌がサッと横に移動すると、白山は空振りしてそのまま地面に倒れ込んだ。

鼻をすりむきながらも白山は立ち上がった。

「大丈夫？　白山君」

歌が心配そうに見た。

「二度と会えないと思ってたマイメロちゃんが戻って来てくれたんだから、こんなすり傷たいしたことないんだな」

白山は頬を赤らめて満面の笑みを浮かべる。

「白山君、マイメロたちとお買い物なの。またね」

「分かったんだな～」

去って行くマイメロたちに手を振ると、マイメロたちと再会できたのがよほど嬉しかったのか、スキップしながら去って行った。

「白山くんのマイメロ好きも相変わらずだね」

琴が見送りながら言った。

「マイメロ、白山くんより真菜ちゃんや美紀ちゃんに会いたいな」
「すぐに会えるよ」
　歌が言うと、マイメロはニッコリ微笑み、
「真菜ちゃん、マイメロが戻ってきたこと喜んでくれるかな」
「そ、それは……」
　大の可愛いもの嫌いな真菜の顔が脳裏に浮かび、歌は苦笑した。
　マイメロたちが魚屋の前に来て立ち止まった。
「え、なんで魚屋さんの前で止まるの？」
　マイメロが尋ねると、
「はあ？　ブリ大根作るって言ってなかったっけ」
　奏が言うと、マイメロがぽかーんという顔になった。マイメロは忘れていたのだ。
「マイメロ、ハンバーグが作りたーい」
「マイメロのハンバーグ大好き！　ハンバーグにしよ」
　琴が笑顔で同意した。
「マイメロも相変わらずね」
　奏が笑った。
　ハンバーグの材料を買い終えたマイメロたちが家に戻る途中、フラットくんが歌に尋

ねた。
「ねえ、歌ちゃん。駆とは月に一度会ってるって言ってたけど、今度はいつ会うの?」
「第四土曜日にデートするんだよね!」
歌が答える前に琴が言った。
「こ、琴! なんで知ってるのよ」
「それくらい私だって知ってるわよ。毎月第四土曜日はオシャレして出かけてるもんね」
奏がウインクした。
「お姉ちゃんまで、もう……」
歌が頬を膨らませたが、すぐにフラットくんを見て言った。
「駆に会ったら、フラットくんが会いたがってたって伝えておく」
「ありがとう、歌ちゃん。ついでに駆の寮に住みたいって言っといてよ」
「分かった」
歌が微笑みながら言った。

マイメロが作ったハンバーグにみんなで舌鼓を打ち、洗い物を済ますと歌はマイメロと一緒にお風呂に入った。

二人は三年間の空白を埋めるように、それぞれの暮らしぶりを語り合った。
二人が喋り疲れて湯船に浸かってまったりとしている時、マイメロが言った。
「歌ちゃん、ちっぱいじゃなくなったね」
「ええ⁉」
歌は恥ずかしそうに胸を押さえて頬を赤らめた。
「もう、マイメロったら！　変なとこ見ないでよ！」
マイメロはちょっと悪戯っぽい笑みを浮かべると、
「歌ちゃん、駆くんとはうまくいってるの？」
直球をズバッと放り投げてきた。
「まあ、うまくいってるって言えばいいってるんだけど……月に一度しか会えないのに、手も握ってくれないんだよ」
マイメロの前ではつい愚痴が出てしまう歌だった。
「ありやま」
マイメロはマイメロのママが言ったことを思い出した。
「『二人きりになって手を握れないようなヘタレには、こっちから積極的に攻めないとだめよ』ってママが言ってた」
「そ、そうかあ……積極的にねえ……」

歌はブクブクと泡を立てながら顔を湯船に沈めた。

「ゾナ、ゾナ、ゾナ、ゾナ……」

翌日の早朝、バクは朝もやが残る夢ヶ丘の街を新聞配達しながら軽快に走っていた。新聞の束は、器用に二つの耳で挟み、頭に乗せていた。

バクは、この町が好きだった。東京からさほど離れていないのに、この町には自然が残っており、汚れていない朝の空気を胸いっぱいに吸い込むとすがすがしい気持ちになる。

バクは昔作ったポエムを思い出した。

夜の帳が上がり東の空が白みはじめる時
そんなひと時が私は好きだ
眠りから覚めた小鳥たちがさえずり
朝露は葉っぱを弾き
誕生したばかりの朝の風と私の汗が混ざり合う時
私が大地の優しさを感じる時

そんな時が私は好きだ……byバク

バクが自分のポエムに酔いしれていると、早起きの老人が声をかけてきた。
「おっ、バクくんじゃないか。また新聞配達を始めたのかい？　ご苦労様」
「はいゾナ！」
バクは笑顔で新聞を渡した。バクはこの町に住む人々のことも気に入っていた。
角を曲がると、夢野家が見えてきた。
玄関のドアが開き、マイメロが出てきて、新聞受けに入っている新聞を取っているのが見える。
（あっ、マイメロゾナ。よその会社の新聞を取ってるゾナね。うちの新聞にかえて貰うゾナ）
バクがそんなことを考えながら近づいていき、
「マイメ……」
と言いかけた時、ハッとなって電柱の陰に隠れた。
マイメロがその声に気づき、こちらを見たが、バクの姿は見えなかった。
「誰かが呼んだ気がしたんだけど……」
マイメロは小首を傾げながら玄関に入っていった。

「危ないところだったゾナ。マイメロにバクがこの町にいることがバレたら、絶対マリーランドに知らせるゾナ……ゾナ？　でも、なんでマイメロがいるんだゾナ？　とりあえず、クロミ様に知らせるゾナ」

バクは新聞配達を終えると、負け犬荘に急行した。

「何～～っ、マイメロが⁉」

バクから報告を受けたクロミが、驚きのあまり大声を出した。

「し～っ、ゾナ」

バクは昨夜遅く帰って来て寝息を立てているゾウさんを見ながら小声で言った。

「わ、分かったよ」

居候の身であることを、クロミも自覚している。

「リーダー、ひょっとしてマイメロの奴、あたいらを捜しにきたんじゃ」

「それは、十分考えられるね。くそ～っ、これじゃあ、外に出られないじゃないか」

「当分はここで大人しくしてた方がいいゾナ」

二人は渋々承知した。

「むしゃくしゃしたら、急に腹が空いてきた」

「バク、とっとと朝めしを作りな！」
「新聞配達店の御主人に前借りして、朝めしの材料も買ってきたゾナ」
　バクはコンビニ袋を持って、台所へ向かった。

　朝、歌が目を覚ますとマイメロの姿がない。気になって階下に走っていくと、
「おはよう、歌ちゃん」
　朝食の支度をしているマイメロを見て、歌はホッとして手伝いを始める。
　マイメロが再び歌の家に来て、もうすぐ二週間になる。桜は葉桜になり、ハナミズキの花が咲き始めた。
　マイメロが我が家にいることが、不意に夢のように感じられて、歌は不安になる。
「マイメロはね、ずっといるよ、歌ちゃん」
　ニッコリとされて、ようやく現実に戻る。そんな日々だった。
　マイメロは家事がとても得意で、夢野家の家族はとても助かっている。ただ、のんびりスローペースなので、なんでも時間がかかる。だから、簡単な朝食の支度も、一時間くらい手間取っている。
「着替えたらすぐ手伝うね」

どうやって作業をしているんだろうと、マイメロの手を見た。調理器具が手に吸い付いているように見える。その小さな後ろ姿に、歌は安心する。最近、歌はマイメロの次に早起きをして、朝食の準備を手伝うようにしている。歌にとっても、マイメロにとっても、楽しい時間だ。

歌は高校に入学してから、軽音楽部に所属している。名前の通り音楽が大好きなので、クラシックからは離れても、何か関わっていたいと思っていた。好きな楽器はヴァイオリンだったが、才能のなさを痛感し、今では滅多にヴァイオリンを手に取ることはない。

軽音楽部ではベースを担当することになった。ギターやヴォーカルの志望者は多く、それでも楽器は何か覚えたいということがあって、ベースに決めた。元々リズム感もあり、どんなタイプの曲でも好きなので、ベースのコードを覚えるのは早かった。ただ、初めて演奏したときの最初の問題は、「重〜い……」だった。

練習も長時間になると、ストラップが肩に食い込みそうになり、一年の頃は苦労した。二年生になった今、ギターを担当しても良かったのだが、ベースという楽器に愛着も感じている。名前の通りベースになる音は、ドラム同様バンドでは重要なポジション

で、若干玄人好みなところも気に入っている。そして、体力もだいぶついたようだ。今では学園祭などでのライブ演奏も苦にならない。
軽音楽部の活動のない放課後は、親友の桜塚美紀や、藤崎真菜と一緒にファストフード店でお喋りしたり、ファッションや雑貨のショップに立ち寄ったりと、普通の女子高生らしい毎日を送っている。
学校の帰りにスーパーに寄ることも多く、食事や家事の分担はマイメロを中心に、メールなどで合わせている。夢野家の日常は、ごく一般的な家庭となんら変わることはない。ただ、母親がいないということで、他の学生たちよりも家事は得意な方だろう。マイメロがいない三年間で、歌と琴の家事スキルはかなり高くなった。

歌の親友の二人以外の友人たちも、多くは夢ヶ丘学園中等部に隣接する敷地にある高等部へと進学している。
エスカレーター式に進学できるため安心していた歌は、
「甘いわよ」
という、奏の言葉を聞いてドキドキしながら編入試験を受けたものだった。確かに、誰でも簡単に進学させてくれるほど甘いものではなかったが、無事合格して、奏と同じ制

服に身を包むことになった。

「中学と全然デザインが違って、何だか急に大人っぽくなったみたい。お姉ちゃんみたいにうまく着こなせるかなあ」

新しいブレザーの制服を着てみた歌が呟くと、

「よく似合ってるわよ、歌。大丈夫。毎日着ていれば、しっくりくるものよ」

同じ制服で姉妹が夢ヶ丘学園高等部に通ったのは一年間だけ。美人の姉に比べられることを心配していた歌も、ブレザーと高校生活に慣れてきた頃には、美人な姉と可愛い妹というふうに、セットで名前が知られるようになった。

奏が卒業し、二年生になった今では、歌のブレザー姿はちゃんと様になっている。

お昼時、歌はいつものように美紀と真菜と一緒に、中庭でお弁当を食べていた。

夢ヶ丘学園高等部には学生専用の食堂とパンなどの軽食を扱う売店が併設されている。私立高校らしく、食堂にはいわゆる定食ものや、丼ものや麺類の他に、今時のカフェメニューのようなラインナップもある。値段は街のレストランよりも安く設定されていて、男女ともに好評だった。

その代わり、お昼休みの時間は全員一緒なので、当然混み合っている。一年生のうちは

遠慮もあって、あまり食堂を使わず、手持ちのお弁当やパンなどの昼食を取る生徒が多い。

二年生になると、食堂を使ったり、教室でパンやお弁当を食べたり。歌たちのように、中庭などに集まって昼食をとる生徒もいる。食堂のメニューが安いといっても、それは一般のお店に比べてのことで、毎日食べるとなると、金額もバカにならない。

夢ヶ丘学園は私立だが、特別に裕福な学生だけが通っているわけではなく、歌たちのように、普通の家庭で育った生徒が大半だ。だから、家で作るお弁当やコンビニ弁当、そして売店で買うパンなどを組み合わせて食べる生徒が多い。

「うーん、気持ちいいなー」

歌は明るい日差しの差し込む中庭を歩きながら、大きく深呼吸した。

「やっぱり今の季節は、教室で食べるより断然いいね」

新緑のこの季節、中庭には十数人の生徒が、二、三人のグループになってお弁当やサンドイッチなどを広げている。中にはカップルもいて楽しそうだ。中庭は小規模な公園の様相で、東屋が一か所とベンチが各所にあり、低木の他に芝生や花壇もある。

園芸部が手入れをしている花々や緑がまぶしくて、日差しが気持ちいい。歌は早めに到着したので、いつも座るベンチが空いていた。場所を確保した後は、美紀と真菜の到着を待っていた。

特に、今日は美紀から重大発表があるとのことで、歌は授業が終わると真っ先に立ち上がり、お弁当を取り出して中庭に来た。

場所取りという目的を果たして満足した歌は、スマートフォンを取り出し、メールをチェックした。歌がメールをやり取りする相手は、家族の他は学生ばかりなので、この時間にメールが来ていることは滅多にないが、予想通りだった。心もちガッカリした顔で、歌はスマホをランチバッグの中に入れると、代わりにお弁当を取り出した。

すぐに真菜が、続いて美紀が、キョロキョロと辺りを見回しながらやって来た。

「ここだよー」

歌が小さく手を振ると、二人はすぐに気づいて、駈け寄って来た。

お弁当を食べ終わると、そわそわしている二人に、美紀がクスっと笑って、

「だいたい想像ついてると思うけど、潤くんが夢ヶ丘に戻って来るらしいの」

歌も真菜も潤のことだろうなとは思っていたのだが、何しろ美紀のことだ。想像の上を行く発表もありえると、二人はドキドキしていた。歌と真菜には、潤に関して気になっていることがあった。

「やっぱそうなん？」

「最近話題になってるよ、YeahTubeの映像。潤くんだよね、やっぱり」
三人が話題にしている潤くん、つまり柊潤は、ここ二、三週間で、急に有名人になってしまった。といっても、知らない人はまったく知らない。
YeahTubeという動画投稿サイトに、潤が派手なパフォーマンスをしながらギターを演奏し、歌っている映像が最初にアップされたのが、およそ一か月前のこと。歌たちにとっては春休みに入ったばかりの頃だ。ネット上で話題になると、あっという間に拡散する。だから、普段からインターネットにアクセスしている世代では有名人物だ。
柊潤というのは、歌が中学の頃に憧れていた先輩、柊恵一の弟で、歌たちとは同い歳の少年だ。夢ヶ丘にいた期間は短く、帰国子女でもある。歌たちとは同じ学校に通っていたが、潤は当時からギターを弾いたり、作曲をしたりしていた。
恵一と潤の母親はデザイナーで、恵一はパリの大学に通いながら、天才ヴァイオリニストとして、欧州を中心にコンサートも開いている。いずれは世界的に有名になるだろう。潤もまた、アーティストの柊家の血筋を受け継いでいるようだ。
また、潤の演奏は一時的にクロミたちのパワーを増幅させる格好になり、歌よりもクロミたちの方が潤とは長く接していた。それも三年前のことだ。
「もちろん、本名は書かれてないけれど、潤くんのいるロンドンでは有名よ」
三年前から潤は執事のセバスタンや使用人たちとロンドン南部のチェルシー地区の高

級アパートメントで暮らしながら近くの高校へ通っていた。

恵一のイケメンぶりに隠れてはいるが、潤もかなり美形な方だ。ただ、髪型や服装があまりにも個性的なので、見る人によって好き嫌いはあるかもしれない。

「潤は元々目立つ方やし。すぐバレるわ」

「ギターはずっと続けていたんだね。上手くなったもん。でも、今まで知らなかったけど、これまでに何度も映像をアップしてたのかな」

話題の主が潤に違いないと知って、歌もＹｅａｈＴｕｂｅを検索してみた。しかし、同じような映像が並ぶだけで、他の映像も古いものも見つからなかった。

「もちろん、初めてよ」

美紀が物知り顔で答えた。歌は軽音楽部に入部してから、欧米のポップスやロックも見聞きするようになった。最近の女子高生は、欧米のロックをあまり聞かない人が多いが、歌は今まで食わず嫌いだったことを後悔している。

英語の歌詞はあまり分からなくても、ロックやポップスにも名曲がたくさんあることを知った。まだ初心者の域を出ないが、潤のギターが上手いこともちゃんと分かったし、夢ケ丘にいた頃よりも上達していると感じていた。

「ええ曲やと思うけど……やっぱ、派手やな」

「曲作りやギターを続けていたのは知ってたけど。動画投稿サイトにアップするとは思

わなかったわ」
「あの映像って、誰かが内緒で録画したものなの？」
歌が演奏を思い出しながら訊いた。背景はホールやライブハウスではなく、部屋の中のように見えた。といって、歌の部屋のような場所じゃなくて、天井の高い広い部屋だ。
「あれは自宅でレコーディングするための練習の映像よ」
美紀はずいぶんと詳しい様子だ。
「なんやろ、怪しい匂いがするわ」
真菜が不審な目で美紀を見ると、美紀は少し考え込むふうになり、突然顔を上げると、
「続きはｗｅｂでね！」
「こらー、何ゆうてんねん！」
可愛らしく首を傾げた美紀に、真菜が声を上げた。
真菜の大声に、歌が慌てて周囲を見回すと、さっきまでお弁当を食べていた生徒たちの姿がどこにも見えない。中庭に残っているのは歌たちだけだ。
「美紀、真菜、そろそろ昼休み終わっちゃうよ」
「ホンマや」
あと五分で午後の授業が始まる。歌たちは大急ぎで弁当を片付け、立ち上がった。
「だから言ったでしょ。続きは……」

「webやのうて、放課後や」
すかさず真菜がツッコミを入れる。
「いつものところで続きを聞かせてね。そんなところで話を切られたら、気になって授業どころじゃないもの」
廊下を小走りに、三人は教室に向かった。

放課後、歌、美紀、真菜の三人は場所をファストフード店に変え、店の中に入った。注文をしながら店内を見渡すと、歌たちと同じように学校帰りの高校生や大学生が多く、一階のカウンター席は八割くらいが埋まっていた。幸い、二階席の奥が空いていたので、それぞれがトレーを持って四人掛けのテーブルについた。
「で、続きはどうなん？」
真菜が切り出した。
「私も、ちょっと気になってることがあるし」
ハンバーガーの包みを開きながら、歌が訊くと、
「美紀は一か月より前から知ってたんや。そうやな」
ズバリと真菜が言う。

「うふふ。最初に潤くんからメールがあったの」
いたずらがバレてしまった子供のように、美紀はクスッと笑った。潤のYeahTubeの映像については、歌や真菜には疑問に思うことがいくつもあった。その前に、美紀がどれくらい潤と連絡を取り合っていたのかだ。
日本を離れて三年、その間ロンドン市内の高校に通いながら、潤はずっと曲作りをしていた。それは中学時代より熱心なものになり、趣味の域を超えていた。
メロディが出来上がると、コンピューターでドラムやベースの演奏を録音する。実際に演奏しなくても、音楽ソフトでも出来る。次にギターの音を入れて、最後にヴォーカルを録音する。それを全部重ねると、一曲が出来上がる。
「へえ、結構大変なんだね」
歌が感心した。軽音楽部で楽器を弾いているが、オリジナル曲は少なく、スタジオを借りて演奏したこともなかった。
「手順はそんな感じになるみたい」
ドラムやベースは自分で演奏することもあるようだ。潤は思った以上にマルチな才能を持っている。
「ところで、潤くんってずいぶん歌も上手くなったよね？」
歌が首を傾げて言う。下手じゃないとは思っているが、歌にはギターの印象しか残っ

ていない。やはり、ギターと同じく練習を重ねたんだろう。
「あの歌詞もや。どうも潤と美紀は同じ匂いがするわ」
真菜はポテトをつまんで美紀の目の前で振った。
「やあね。私は犬じゃないわよ。匂いになんか釣られないわ」
と言いながら、真菜からポテトを奪うと、美紀はパクッと口に入れた。
美紀のペースで話が進むと、また続きが明日や明後日になりかねない。
「関西人ってせっかちね」
「私もそんなにのんびりしてないんですけど」
助けを求めるように視線を向けた美紀に、歌はビシッと言い返す。
「潤くんが作曲の才能があるのも、ギターが上手くなったのも分かった。そこはいいとして、なんで突然ＹｅａｈＴｕｂｅにアップしたの？」
「で、歌詞がずいぶんと美紀テイストなんやけど？」
美紀がしばらく考え込んだ。不思議なポエムはどんどん出て来るのに、ズバリと答えるのは苦手なのか、マイペースなのかよく分からない。しびれを切らした歌と真菜のキツイ目に、美紀がようやく本題に入った。
やはり、美紀は潤と連絡を取り合っていたようだ。しかも、ここ一、二か月は頻繁に。
「潤くんのデビューの話が出ているの。それで、最近は特に曲作りに励んでいたみたい」

ただね。と、美紀はため息をついた。
「みんなも知っていると思うけど、問題は潤くんの集中力なの」
YeahTubeに潤くんの映像が流れた経緯を、美紀は説明した。
「ロンドンで、潤くんは学校に通いながら、ギターの練習もしていたの。あの通り、家が広いでしょう。練習する場所ならいくらでもあるわ」
「潤くんと柊先輩、うまくいってるのかな？」
「たまーに、ロンドンかパリでお母さんと三人で食事はしてるみたい」
「たまーにかい！　和解してヨーロッパに行ったと思うてたんやけど」
ダーちゃんの一件がすべて解決し、夢ヶ丘が元通りになった後、恵一と潤はそれぞれパリとロンドンに留学することになった。
恵一は潤を嫌っているわけではない。潤が恵一に、一方的にコンプレックスを抱いていたのだ。子供の頃から成績優秀、ヴァイオリンの技術は一流、家は大富豪、顔はイケメンという、非の打ちどころのない少年。それが柊恵一だった。
弟の潤はどうしても、恵一よりも劣って見えるが、恵一と比べれば、大抵の少年は劣っているだろう。子供の頃は仲の良い兄弟だったのに、そんなことを、それも家族に指摘されたりすれば……。潤が恵一に対して抱いている気持ちがコンプレックスから敵対視に変化していったのも、仕方のないことと言える。

「柊先輩がヨーロッパのコンサートツアーに出かけることが決まって、その隙に一人でレコーディングをしようと思ったみたい」

「コンサートツアーが始まるっていう話、私もニュースで見た。注目されているんだね、柊先輩」

「それでまた、潤の奴、対抗意識を燃やしたっちゅうこと？」

歌にとってあこがれの先輩という位置は変わらない。

「それは考えられるわ」

また差が開いてしまうと、潤なりに危機感を感じたのだろう。

歌にも美人な姉がいるが、姉妹と兄弟は違うのだろうか。それほどコンプレックスを持ったことはなかった。

「曲は出来るんだけど、歌詞が苦手なのよ。それで私が作詞を手伝ったら、気に入ったみたい。で、ようやくあの映像が出来たってわけ」

思った以上にYeahTubeの反応が良くて、すでに一〇〇万アクセスを超えていた。潤は自信をつけたようだが、

「潤くんの集中力って、三分くらいしか持たないんだったっけ？」

実際は五分くらいならなんとかなると、美紀が答えつつも、

「ただし、自己申告よ」

不安は隠せない様子だ。潤の瞬間のパワーは凄いのだが、長続きしない。スイッチが入った途端、『強』で、あっという間に『弱』に、そしてスイッチが切れる。そんな感じだ。

「曲も演奏もいいし、カッコいいってことで、人気はあるのよ。だから、CDを出さないかっていう話が出たの」

「潤はええかっこしいやからな。カッコ悪いところは見せたくない。それで、日本でレコーディングすることにしたんやな」

ピンポン！　と、美紀が真菜を指差した。滞在期間は短かったものの、友人も出来たし気持ちも理解してもらえた。潤にとっての夢ヶ丘での生活は、楽しいものだったに違いない。それに夢ヶ丘の柊家なら、スタジオ並みに改装出来そうだ。

美紀が積極的に語らなかったのは、不満があったからだ。当然、潤の曲の歌詞のことで、

「私が作った日本語の歌詞はともかく、英語の歌詞は許せないわ。ちょっとひど過ぎよ」

美紀が怒った顔を見せるのは珍しい。

「……そう？」

歌と真菜は顔を見合わせるばかりだ。曲は最初が英語、その後が日本語の歌詞になっている。日本語を知らない人が聞けば何とも思わないだろうけど、英語の部分はハッキリ言

って日本語の直訳にしか思えなかった。
「話は分かったけど」
歌は時計を見た。もうお店に入ってから一時間以上過ぎている。
「こんなに時間のかかる内容だった？」
真菜を見ると、肩をすくめた。同意見ということだ。
「レコーディング用の曲を、何曲か送ってもらっているの。来週の頭には歌詞作りをするつもり。潤くんが日本に来るまでに、渡したいのよ」
作詞の才能については、歌には何の知識もないが、潤と美紀のテイストは近いと感じている。
「そうか、美紀の作るポエムって、ロックだったんだね」
「なんや、それ」
日本のバンドの歌詞とも違う。美紀が選んだ言葉も並べ方も、ある意味ロックだ。そうとしか説明しようがない。歌たちには時々意味不明なメルヘンなポエムも、潤がロックに味付けしてくれそうな気がする。
「そういえば、そろそろゴールデンウィークやし、歌も小暮とデートとちゃうの？」
突然、ニヤニヤしながら真菜が言い、
「作詞より楽しそうね。ラブラブハートが飛んできそう。今度の土曜日よね」

美紀も興味津々だ。
「そんなことないってば。陸上の予選も近いし、なかなか会えないんだから」
歌が慌てて否定しても、二人はにんまりするばかりだ。
「ゴールデンウィークが明けたらすぐテストもあるし。同じ学校なら毎日会えるのに」
「まあまあ」
と、真菜がなだめた。真菜自身は格闘技に夢中で、ゴールデンウィークも道場に通うことになっている。地元の道場では師範クラスになったので、ゴールデンウィークには紹介してもらった大きな道場へ稽古に行くのを楽しみにしている。
三者三様の過ごし方で、歌も本来なら楽しみだったのだが、実際、春休みもほとんど会っていない。しょんぼりする歌を、美紀と真菜が慰めて、店から出た。
辺りはすっかり暗くなっていて、そろそろ琴も帰って来る時間だ。歌は大急ぎで買い物を済ませ、家に向かった。

歌が家に着くと、マイメロと父の雅彦が夕食の支度を始めていた。雅彦は仕事が順調に進んでいるのか、味見をしたり、サラダの野菜を切ったりと、楽しそうな雰囲気だ。フラットくんは、マリーランドに依然としてクロミたちの行方が分からないでいることを報

告に行っているため留守だ。
「歌ちゃ～ん、お帰り～」
「ただいま、お父さん、マイメロ」
「お帰り、買い物ご苦労様。琴もさっき帰ってきたぞ。今、風呂に入ってる」
琴はテニス部の練習でヘトヘトになって帰ってくると、真っ先にお風呂に入る。夕食後宿題をしているうちに、ウッカリ眠ってしまうからだ。テニスは琴に合っていたようで、部員の中でも上手い方だ。普通なら同級生や先輩の妬みの対象になりかねないが、琴の嫌みのない末っ子気質と明るさで、部の中でも可愛がられている。
「お父さん、マイメロ、後で手伝うね」
部屋に戻り、制服から部屋着に着替えると、歌はふと気がついてスマートフォンを見た。メールも電話も入っていないことが分かり、ガッカリした顔で椅子に座った。
「……もう、ゴールデンウィークは目の前なのに」
文字を入力しようとして、歌は手を止めた。スマホを放り出すと、
「月に一度じゃつまらないよ」
歌が待っていたのは、小暮駆からの返事だった。
歌が駆と付き合い始めて三年が過ぎた。付き合うといっても、中学時代はまだ友達感覚が抜けきらない感じだった。高校からは、もう少し彼氏と彼女みたいにと、歌は思って

いたのに、駆は陸上に力を入れている、別の高校に進学してしまった。
しかも、特待生扱いで、自宅からの通学ではなく寮生活を送っている。寮には他の部活の生徒もいるし、規則は厳しく、陸上の練習も専門的でハードなものだ。
「そんなに遠くないんだから、土日くらいは会えると思ったのに」
椅子からベッドに移り、スマホを指で弄びながら、歌が呟く。同室の寮生の目もあり、電話はなかなか出来ない。仕方なくメールをやりとりするのだが、歌への返事は甚だそっけないものだった。
歌が二ページにも及ぶメールをしても、返信内容はせいぜい二行程度のもの。休みの日には会えると思っていたのに、それも大会や練習や疲れで反故にされ、
「今度の土曜日かあ。ホントに会えるのかな……」
冬の間は毎月会っていたが、新学期が始まると同時に、陸上のシーズンになる。駆は全国レベルでも、短距離で期待されている選手の一人だ。わがままを言ってはいけないと、歌も分かっているのだが。
「歌ねえ、ご飯出来たよー」
階下から琴の声が聞こえ、歌はガバッと起き上がった。
「もー、歌ねえったら、ちっとも降りて来ないんだもん。あたしだって部活で疲れてるのにさー」

テーブルに食器を並べながらプンプンしている琴に、両手を合わせ、
「ゴメン、つい……後片付けは私がやるから」
宿題をやっていたんだろうからと雅彦がとりなすが、実際はベッドに寝転がっていただけなのだから、今日ばかりは反論できない。
バイトがあり、少し遅くなるという連絡が入った奏を除き、マイメロと三人がテーブルにつき、夕食を食べ始めた。話題はやはり、間近に迫ったゴールデンウィークのことだ。
「あたしは前半は部活があって、後半の一日が試合の応援になったよ」
運動部は春の大会が始まる季節だ。琴はまだ試合には出られないが、部員全員で応援に行くのを楽しみにしているようだ。
「後はね、クラスのみんなと遊びに行くんだ～」
「楽しそうだね～、琴ちゃん」
琴はマイメロにVサインを出して見せた。中学に入学してから、琴は充実した毎日を送っている。クラスでも男女問わず人気がある。中学生になって、制服を着るようになったら、すっかり大人っぽくなり、雅彦は少しばかり心配している。
「歌ねえは、デートだよねー」
と、琴がニヤニヤしながら歌に言うと、
「まだ決まってないわよ。陸上部も大会があるから忙しそうだし」

家族は歌と駆が付き合っていることを知っている。高校に入ってからは、毎月最終の土日に会うことも分かっていて、ゴールデンウィーク後半はまさに、デートの日にあたる。

その貴重なデートも、二日間とも歌が駆を独り占めするわけにはいかない。夢ヶ丘の友人たちや家族と過ごす日も含まれていて、歌が二人っきりで会えるのは、土日のどちらかの昼間だけだった。

「駆くんは短距離界では期待の選手らしいね」

雅彦が言うように、中学時代から陸上の才能を見せている駆は、一〇〇メートル走を得意にしていて、高校一年生の時、都大会で二位入選した。だから、ひとたび大会に出場となると、順当にいけば全国大会に進むのが通例で、陸上の強化選手にも選ばれている。

高校生の今は、トレーニングも大事な時期で、専門のコーチがいる高校に進学したことは大正解だった。雅彦のみならず、地元の大人も駆のことは知っている。

「私も連休明けにはテストがあるし、会いたいな、とは思うけど……」

「歌ちゃ～ん、大丈夫だよ～」

マイメロが涙ぐみそうになる歌をポンポンと叩いた。

高校生の歌に彼氏がいるということは、父の雅彦には複雑だったが、なかなか会えなく

てしょんぼりしている歌を見るのも可哀想になる。
「だったら、歌ねえも大会の応援に行けばいいじゃない」
琴に言われ、
「でも、私が行きたいって言っても、そっけないし」
「マイメロたちが来たこと、言った？　駆くんもマイメロに会いたいんじゃないの？」
琴に言われるまでもなく、当然、メールに写真を添付して、駆に送っている。しかし、反応は微妙だった。何かトラウマを思い出したのだろうか。
歌も駆の応援をするために、陸上競技場に行ったことは何度かある。だけど実際、別の高校の歌が見に行っても、競技場のスタンドからの観戦に過ぎない。
駆がマネージャーの女生徒や、応援しているクラスメートたちと話しているのを遠くで見るだけだ。余計寂しい気持ちになるので、毎回応援に行くわけではない。
「歌、男ってシャイなところがあるから、案外照れているのかもしれないよ」
「そうだよ。折角の休みなんだから、勇気出して応援すればいいじゃん」
雅彦と琴が言う通り、秋以来の大会だから応援に行くのもいいかもしれない。歌は前向きに考えることにした。
「歌ちゃん、歌ちゃん、ママが言っていたよ。『男は追いかけてばかりじゃダメ。追いかけさせるのがコツよ』って」

マイメロがよく引用するマイメロのママの言葉は、どこかしら毒を含んでいるように感じるが。
「そうだね。大会の日程も調べれば分かるし、行ってみる」
「マイメロも行く～」
デートの予定は連絡が来ないが、大会の日程が分かれば歌から指定してもいい。こうなったら、駆には良い記録を出してもらわなければ。折角のゴールデンウィーク、折角のデートに、沈んだ顔で会うのもつまらない。
「駆の応援しなきゃね、マイメロ」
「そうだね～、歌ちゃん、一緒に応援しようね～」
話がまとまり、食事の後片付けをみんなでしていると、
「マイメロ、デザートも作ったよ～」
と、マイメロが冷蔵庫からパウンドケーキを出した。片付けのスピードも上がる。
デザートの支度が出来た頃、奏が帰ってきた。
「お帰り～、奏ちゃ～ん」
マイメロが手を振った。読者モデルの撮影が長引いたという奏は、
「マイメロ～、みんな、ただいま」
帰るなり、マイメロを抱きしめた。歌と違い、普段はマイメロにはややクールに接する

のだが、大学の講義が終わってからの撮影で、よほど疲れていて、癒されたかったのだろう。着替えると、自分の分の食事を出し、デザートを食べる歌たちと一緒にテーブルについた。

「みんなでゴールデンウィークの予定を話していたんだよ」

雅彦が奏に話す。

雅彦は紀行ライターという仕事柄、しょっちゅう国内や海外に出かけているが、観光客でごった返す上、旅行代金も高い時期は、たいてい家で原稿をまとめている。ゴールデンウィーク明けにはまた出かける予定だ。

「でも、お父さんは連休明けが原稿の締め切りだから、遠出は出来そうにないなあ。たまにはのんびり旅行でもしたいんだけどな」

「仕事でいつでも行ってるじゃない」

歌が言うと、

「仕事の旅行はどうものんびり出来ないんだよ。結局は取材ばかりだからね」

「そういうものなの？」

「歌から見れば、贅沢な悩みかもね。でも、私も切実だわ。バイトもあるし、新しく出来たショップめぐりもしなきゃ」

奏は高校時代から読者モデルのバイトを始めたのだが、美人でセンスも良く、すぐに

人気が出た。大学生になった今は、ファッション雑誌にコラムも書いている。父親譲りなのか、文章も上手いようだ。ショップ巡りは、コラムのための取材である。常にアンテナを張っているのは趣味なら楽しいことばかりだが、仕事となるとまた別のようだ。
「オシャレなお店を見つけてくるから、みんなでご飯でも食べましょう」
奏の提案に、みんなが賛成した。
と、その時、奏のスマートフォンが光った。奏は食器を片付けると、デザートの皿を持ってソファに座り、画面を見て微笑んでいる。
「また彼氏からのメールだね」
琴が呆れ顔で言うと、歌も頷いた。奏は指先を画面の右から左にクリックし続けている。
「どんだけ長いんだ、奏」
雅彦も引くほどの長文のメールは、小説家を目指しているという、奏の彼氏からのものだ。歌も奏から聞いているが、メールは長いが実際の小説は目指しているというだけで、応募したという話はない。いつも何故かダメンズを好きになる奏のことは、他に欠点が少ないだけに、家族中が残念に思っている。
（せめて、お姉ちゃんの彼氏の半分でもいいから、駆も色々書いて送ってくれないかな）
奏の姿を見ながら、歌は心の中で呟いた。

「あっ、そういえば美紀が言ってたんだけど」
歌は突然昼間の会話を思い出した。
「潤くんが夢ヶ丘に戻って来るらしいよ」
「ええ〜〜っ！」
びっくりするくらい、全員が同じことを言った。ニュアンスは少しずつ違うように歌には感じられたが。
「また何かトラブルを起こさないといいけどなあ」
雅彦は、三年前のことを思い出した。
「YeahTubeで人気が出たから、そろそろバレる頃よね……まさか、柊恵一も一緒じゃないわよね」
奏はさすがに知っているようだ。そして、恵一ほどではないが、三年前のことは忘れたい過去と位置付けている。もう、あのテンションにはついていきたくないのかもしれない。
「久しぶりだね〜。元気かな〜、潤くん」
マイメロはいつものような笑顔だ。覚えていないはずはないのだが、解決した時点で、やはり過去のものになっているんだろう。
「潤くんが帰って来るの？　いついつ、歌ねえ！」

嬉しそうな顔をしたのは、琴一人だった。琴はなぜか潤を気に入っているようだ。テンションが高くて元気なところが、似ているからだろうか。
「戻って来るのは間違いないけど、ハッキリしたらまた教えるね」
歌は迫ってくる琴に、たじろぎながら答えた。

マイメロが来たことで、駆に会えなくて寂しい気持ちが少し減ったのは確かだが、またこれから事件が起こるのは目に見えている。
マイメロはともかく、潤は駆と仲良しだ。折角彼氏彼女の関係になりつつあるのに、良からぬことは起きそうだし、空気を読めない潤にデートの邪魔をされそうだし、歌にとっては手放しで喜べないことも増えた。
そして、間もなく陸上の予選が始まり、インターハイもあって、強化合宿もあるだろう。駆と会えるチャンスは少ない。ただでさえ、温度差を感じているのに、それが深い溝になったりしないかが歌には心配だ。
「歌ちゃん」
マイメロが歌の背中をポンと叩いた。
「マイメロ……」

歌はマイメロを抱きしめた。マイメロは歌の気持ちを分かってくれていた。
「楽しみだね～、ゴールデンウィーク」
「……マイメロ」
本当に分かってくれているのかは、やはり歌には分からない。

ついにゴールデンウィークに突入して、第四土曜日がやってきた。
駆から昨夜ようやくメールが届き、土曜日の午後と日曜日の丸一日デート出来ることなり、歌の機嫌は良かった。
念入りに髪の毛をセットして、奏から貰ったラメ入りのグロスを塗り、美紀とわざわざ渋谷まで行って買ってきたおしゃれなワンピースを着て出かけようとすると、運悪くフラットくんがマリーランドから帰って来た。
マイメロから今日、歌が駆とデートすることを聞いたフラットくんは、
「歌ちゃん、僕も連れてってよ。駆に会いたいんだ」
「マイメロも～」
さすがに二人から言われては、歌も断るわけにはいかない。
「分かった……一緒に行こう」

心の中で泣きながら言った。
歌がマイメロとフラットくんを抱いて集合場所である夢ヶ丘公園の噴水前に到着すると、小暮駆はすでに来ていた。
「よう」
と、駆はそっけない挨拶をするが、歌の腕の中にマイメロと一緒にいるフラットくんに気づくと、
「あーっ、フラットじゃねえか！　久しぶり！」
「駆！　会いたかったぜ！」
フラットくんが駆に抱きついて、頬を擦り合わせる。
（う～、フラットくん。それ、私の役でしょうが……）
歌は心の中で呟きながら苦笑した。
フラットくんやマイメロとばかり話をする駆に、歌がイライラし始める。
駆はすぐに分かったので、フラットくんとマイメロにジュースを買いに行かせた。
「歌、ゴメン！　まさか二人を連れてくるとは思わなかったんだ。今日はしょうがないからさ、明日二人きりで会おう」

「分かった」

ようやく歌の機嫌も直ったので、駆は安堵の息を吐いた。

それからフラットくんとマイメロが戻ってきたため、その日は取り留めのない話をしただけで終わった。

別れ際に、フラットくんが駆と一緒に住みたいと提案し、駆は喜んで了解した。フラットくんがいれば、恋愛下手な自分に適切なアドバイスをしてくれると思ったからだ。

こうして二組になり、駆は一か月ぶりの自宅へ帰っていった。

歌は見送りながら、マイメロに気づかれないように小さなため息をついた。

翌日の日曜日、負け犬荘ではクロミとニャンミのイライラがピークに達していた。

こちらに来てから三週間というもの、昼間はほとんど外に出られないでいたのが原因だが、テレビから流れるゴールデンウィークを楽しむカップルの映像を見るにつけ、その苛立ちは倍増されていた。

「あ～～っ、イライラする。バク、今日は昼間でも出かけるかんな！」

「ええっ⁉　クロミ様、マイメロに見つかったらどうするゾナ」

「うるさい、ガタガタ言うんじゃないよ！」

クロミはハリセンでバクを思いきり張り倒した。
壁にめり込むほど吹っ飛んで目を回すバクだが、これ以上逆らうと、命がいくつあっても足りないと思ったのか、二人を背中に乗せて、負け犬荘から舞い上がった。
それでも、自分たちをマイメロに発見されたくないバクは、夢野家から遠く離れた郊外の遊園地に二人を連れていった。
ジェットコースターやゴーカートに乗り、歓声を上げる二人を見て、
「いいガス抜きが出来たゾナ」
とバクはホッとした。

ところが、夕方になり、二人を背中に乗せたバクが夢ケ丘公園の上空に差しかかった時だった。
「ストップ！」
いきなり、クロミがバクの両耳を引っ張って止めた。
「どうしたゾナか、クロミ様？」
「あれをごらんよ」
バクがクロミの指差す先を見ると、公園のベンチでいちゃつく大勢のカップルの中に、

なんと歌と駆の姿があった。
「ああっ、あれは……！」
「なんで、あの生意気な小娘とヘタルがデートしてんだよ⁉」
「歌ちゃんと駆くんゾナよ」
「そんなのどっちだっていいんだよ！」
またクロミがハリセンでバクの頭を張り倒した。
「痛いゾナ！　バクに八つ当たりは止めて欲しいゾナ！」
「うるさいよ！」
クロミがもう一発叩き、
「なんで、あいつらがあんなにいいムードになってるのかって、訊いてるんだよ！」
「そこまでは分からないゾナ」
「ったく〜っ！」
「リーダー、なんかむしゃくしゃしてきたよ。あいつらの後ろに着陸して、もうちょっと様子を見ましょうぜ」
「そうだな！　バク、二人に気づかれないように、ベンチの後ろの植込みの裏へ行きな！」
「二人ともあんまりいい趣味とは思えないゾナ」

「バクのくせに説教するんじゃないよ！」
またもう一発喰らったバクは、やむなく舞い降りていった。

歌と駆は、マイメロ、フラットくん、ピアノちゃんがクロミ捜しに出かけたため、今日は思いきりデートを楽しむことが出来た。

昼前に待ち合わせて、昼食を一緒に食べ、映画を観て、ボウリングを楽しんだ後、この公園にやって来たのだ。

陽もすでに落ち、暗くなった公園のベンチでは、人目もはばからず若いカップルが肩を抱き合ったり、キスをしたりしていて、駆は目のやり場に困ってしまう。

歌も同じだだが、頭の中では、マイメロのママの言葉が何度も木霊のように聞こえて来た。

「男は追いかけてばかりじゃダメ。追いかけさせるのがコツよ」

駆とは、中二の春休み、駆の想いに応えて、一度だけキスしたことがあった。

それもちょっと唇が触れるだけのキスだ。それ以来、キスはしてないし、手さえ握ったこともない。

歌は意を決して、駆の目を見てぽつりと言った。

「駆……どうして、周りのカップルみたいに、肩を抱いたり、キスしたりしてくれないの？」
あまりの衝撃に、駆は心臓が口から飛び出すのではないかと思った。
たちまち、顔が真っ赤になり、心臓の鼓動が早鐘のように打ち始めた。
「私のこと嫌いなの？」
「そ、そ、そんなわけねえよ！　毎日お前のこと想ってるよ」
「だったら、キスして」
歌も心臓が破裂しそうだったが、静かに目を閉じた。
駆の鼓動の音が歌にも聞こえてきた。
（歌にここまで言わせて、何もしないのは男じゃねえ。頑張れ、俺）
駆は心の中で呟いた。そして、さっき観てきた映画のキスシーンを思い出し、歌の肩を抱くと、優しく引き寄せて、唇を合わせようとした。
その時だった。
「お前ら、イチャイチャしてんじゃないよ！」
と叫びながら、二人の背後から飛び出してきたのは、クロミではなく、ニャンミだった。
「ニャ、ニャンミ⁉」

歌たちの背後で、唖然としたクロミとバクも飛び出してきた。
「クロミ⁉　バク⁉」
「歌ちゃん、駆くん、お久しぶりゾナ」
二人に頭を下げるバクをクロミが思いきり張り倒すと、
「お前ら、キスなんて百万年早いんだよ！　あ～っ、ムカムカしてきた！　ニャンミ、こいつらの仲をぶち壊してやりな！」
「言われなくても分かってますよ、リーダー！」
激しい嫉妬の炎を瞳に宿したニャンミはすでにドクロボウに矢をつがえていた。
「なんで邪魔するのよ！」
あれほど勇気を振り絞って、駆とキスしようとしていた歌は完全にキレていた。
「うるさい！　これでも喰らえっ！」
ニャンミが歌の胸に向かって、矢を射た。
「危ないっ！」
咄嗟に、駆が歌を庇ったため、矢は駆の胸に命中してしまった。
「うっ」
駆がよろめく。
「駆⁉」

歌が素早く抱き支えた瞬間、矢は閃光とともに駆の胸に吸い込まれた。
「やったぜ！」
ニャンミがちょっと狂気じみた笑みを浮かべたが、
駆が拍子抜けした表情で言った。
「ん？　……なんともねえ」
「えっ……どういうこと？」
クロミもバクも目が点になった。
王様やドリアン大臣のように、駆も歌を罵倒すると思ったのに、拍子抜けもいいところだ。
その時、上空からマイメロ、フラットくん、ピアノちゃんが傘で舞い降りてきた。
「クロミちゃん、発見。ドクロボウを盗み出すなんてメッだよ」
「何がメッだよ！」
クロミがマイメロに殴りかかろうとするのを、バクが羽交い絞めにして押さえた。
「クロミ様、ここは逃げるゾナ！」
クロミとまだ唖然としていて立ち尽くしているニャンミを背中に乗せると、バクは夜空に舞い上がっていった。
「待ちなさい！」

歌が追いかけようとしたが、三人は夜の闇の中に消えてしまった。
結局、歌と駆は来月のデートの約束をすると、公園で別れて、駆はフラットくんを連れて都内の寮へ、歌はマイメロと自宅へ、ピアノちゃんは美紀の家へ帰っていった。
なぜ、ドクロボウの矢が当たったのに、駆が歌を罵倒せずに、無事だったのかという謎だけが残った。
実は、矢は駆の胸のポケットに入っていたスマートフォンに当たっていたのだ。駆は気づいていないが、スマホの待ち受け画面には、ドクロマークが浮かんでいた。

自宅に戻った歌は、夕食後、自分の部屋から駆にメールを送った。
『今日は大変だったね(-_-;)
せっかくデートだったのにぃ～(T_T)
陸上頑張ってねぇ～(>_<)
来月まで会えないけど楽しみに待ってるから(^_^)v
おやすみぃ～♥』

と打ったのが、ドクロボウのせいで、駆のスマホが受信した時には、

『今日はサイテー(╋_╋)
せっかくのデートなのにぃ~(T_T)
どうして、手を握ってくれないの?
どうして、キスしてくれないの?
私のこと嫌いになったのね(:´_`)
駆のバカ(╬`_´╬)』

と書き換えられていたのだ。

寮に戻って、歌のメールを読んだ駆は顔面蒼白になった。
「フ、フラット……これ見てくれ~」
駆は半泣き状態で、フラットくんに文面を見せた。
「折角、二人きりのデートだったのに、本当に手の一つも握らなかったのか？」
駆はこくりと頷いた。

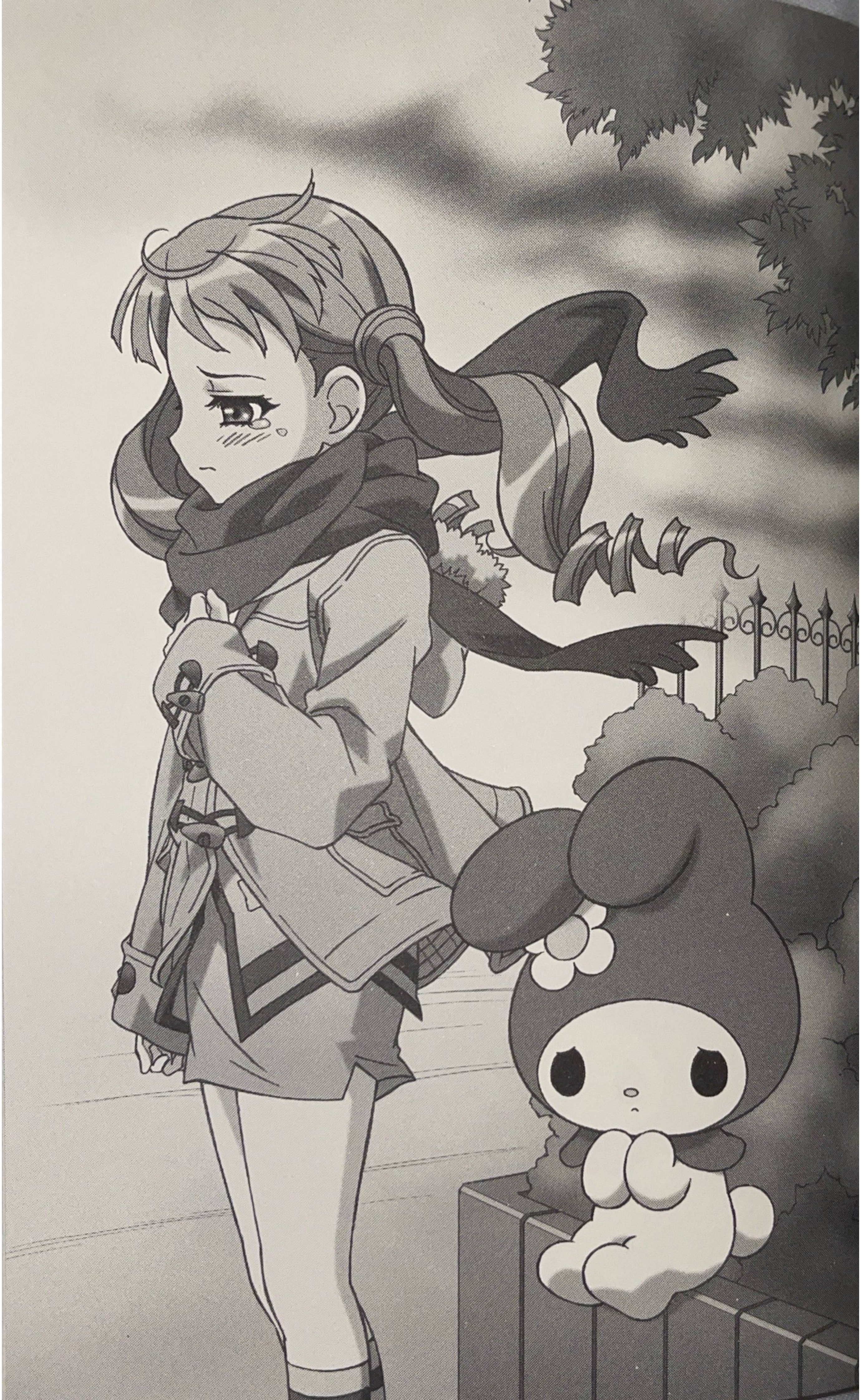
「信じられないよ。歌ちゃんが怒るのも当然だよ」
「キスしようと思ったんだけど、クロミたちに邪魔されて出来なかったんだよ……」
「仕方ないなあ。傷は浅いうちに治した方がいい。すぐに謝りのメールを送りなよ」
さすが、愛の伝道師フラットくんである。よく分かっている。
駆はすぐに謝りのメールを送ったが、返事は来なかった。
「相当怒ってるのは間違いないね……でも、愛があれば時間が解決してくるさ」
「だよな。明日もう一回メールしてみるよ」
駆は深刻になることはなかった。

しかし一方、ドクロボウの影響をもろに受けた駆からのメールを受け取った歌は絶望していた。
駆からのメールには、

うるせーな！
そんなことでいちいちメールしてくんなよな(#｀皿´)
だいたい毎日毎日メールすんのもメンドーなんだよ！

こっちは練習の方が大事だし、お前の事なんて構ってられないっつーの！
それにお前全然色気ねーし、キスしたいとも思わねーよ(´Д｀)
つーか、キスを強要してくるような女とは二度と会いたくねーよ!!

と書かれていた。愛や心遣いが微塵もない、ひどいメールだった。
家族に心配をかけたくない歌は、近くの児童公園に行き、ブランコに腰かけて何度も読み返したが、涙で文面が滲んだ。
「駆がこんなふうに私のこと思っていたなんて……」
歌は流れ続ける涙を拭おうとしないで、駆との付き合いも終わったなと思うのだった。



第三章　ママが来てくれたらイイナ！



カウントダウンが始まる。潤を除く全員が、アイコンタクトを取った。
まずは第一関門の三分。ギターの激しい音が響く中、歌たちは心の中で10、9、8、7……と、数え始めた。
(ゼロ！……1、2、3、4……！)
三分を過ぎてからカウントアップを始める歌たちが見守っている。やがて、ギターの音が止まり、潤はパンチを喰らったボクサーのように、ゆっくりと膝をつき、床に崩れた。
「全然や」
「やっぱり五分は持つなんて、嘘ついてたのね」
真菜と美紀が残念そうに言う。
「そんなことないよ、昨日より二秒くらい増えてたよ～」
マイメロがのんびりした笑顔で言っても、
「潤様、おめでとうございます。またまた新記録達成です」
セバスタンがハンカチで目頭を押さえながら言っても
「毎日二、三秒じゃほとんど変わりないよ」
歌がビシッと言い返した途端、セバスタンは視線を泳がせた。
歌、美紀、真菜、マイメロ、セバスタンに囲まれて、すっかりへこんでいるのは、帰国したばかりの潤だ。

YeahTubeで一躍有名人となった潤は、メジャーデビューの依頼を受け、日本で曲作りとレコーディングをするために、ロンドンから戻ってきたのだが、
「まだちょっと時差ボケが……」
三分前のハイテンションが嘘のようだ。よろよろと立ち上がり、ソファに倒れこみながら潤が言い訳をするが、
「帰国して三日過ぎたし、ええ加減時差ボケは解消してるはずや」
真菜に突っ込まれても、潤には反論するパワーがない。
スイッチが切れるのも早いが、高速充電できるのか、復活も早い。歌が見ている間に、潤はパワーを取り戻していく。
「曲作りよりも、体力作りを先にした方がいいのかしら？」
美紀も残念そうな顔をしている。
「レコーディングは細切れでしか出来ないし、アルバムなんて当分無理ね」
ギターを軽くしたり、一曲の長さを三分以内にすれば、レコーディングの作業は何とかなる。しかし、潤は長年使っているお気に入りのギターを変える気はない。
そして、ライブの出来ないギタリストとなると、歌の中では情けないイメージだ。潤のギターも作曲も歌唱力も、技術は相当上がっているのは分かったが、テンションがおよそ三分で切れてしまう。最初からハイテンションでなければ、本当に五分もつかもしれ

ないが、それでは潤の良さがなくなってしまう。
「体鍛えるんなら、うちと一緒にジムに行こか。ええコーチ知ってるわ」
「そうね。まずは体力ね。私も作詞、頑張るから、潤くんも頑張って」
真菜と美紀も、潤の良さを分かっているだけに、もどかしい思いだ。帰国して三日目、潤の演奏時間は毎日数秒ずつは伸びているが、まだ三分台だ。
「ギャラリーが多いとテンションが上がるとか、潤くんならありそう」
真菜が『ええかっこしい』と言っていたが、潤は目立ちたがりだ。みんなに見守られたら、いつもよりも頑張れるのではないかと、歌は思った。
「そだね～、フラットくんとピアノちゃんも見たいって言ってた～」
マイメロも賛成した。
「琴も、すっごく潤くんに会いたがってたよ。カッコよくなったところを、琴にも見せてあげてね」
歌たちのポジティブな意見に、潤もやる気を起こしたようで、
「よっしゃー、オレはやるぜ！　みんなの前で、カッコいいとこ、見せてやるぜー！」
うまくノッてくれたようだ。セバスタンもホロリとして、
「見事、立ち直りましたね、潤様。ご立派でございます」
頭のてっぺんの一本の毛が、感動で揺れている。

その様子をドアの隙間から覗いていたのは、クロミ、バク、ニャンミだ。
三人は、潤が帰国したゴールデンウィークが後半に突入したその日の晩に、負け犬荘から抜け出し、柊家に潤を訪ねて、屋敷に住むことを許可されていた。
柊家の兄弟は、大金持ちのくせに金銭感覚はしっかりしており、食費と光熱費と電話代を毎月三人分払うという条件で、潤は三人が同居することを許可し、部屋を一つ提供していた。
「折角潤くんの家に入れたのに、なんだよ。全然自由に出来ないじゃないか」
「マイメロまで毎日来るとは、想定外ゾナ」
クロミは憤慨し、バクは諦め顔だ。柊家は普通の家の何倍も広く、敷地も大きい。だから、他の部屋にいればいいのだが、やはりマイメロが近くにいるので気になっている。
かといって見つかるわけにもいかないので、こっそり様子を窺っている。
マイメロは自覚していないが、超天然だ。予想外の動きをしないとも限らない。
「リーダー、どうしましょう？」
ニャンミが不安そうに言うと、
「ゴールデンウィークも明日で終わりじゃないか。明後日からは、みんなは学校に行くは

ずだよ。それまでは、様子を見ながら作戦を練るんだよ」
クロミに言われ、ニャンミも納得した顔になった。
「明日はさらに人数が増えそうゾナ」
バクはバイトの疲れもあって、本当は偵察などより眠りたいのだが、仕方なくクロミに付き合っている。
「それにしても、潤がこんなに人気が出てるとは、知らなかったよ」
クロミは柊恵一には予測通りだったが、潤の今の状況は考えてもいなかった。そして、願っていた。それはヴァイオリン奏者として有名になってほしいと期待していたし、みんなが潤のことを応援しているのが、なぜか腹立たしい。
クロミは言葉に出さないが、潤のことが好きなのだ。
LOVEではなくLIKEなのだが、クロミの妄想の中では、柊恵一は愛する絶対的存在で、その弟の潤は義理の弟で放っておけない存在なのだ。
恵一と違って、不器用でオチャらけているが、実はとてもナイーブで、両親の期待を一身に受けている兄に強いコンプレックスを抱いているところなんか、自分に近いものを感じている。
誰からも愛され、良い子と思われているマイメロにコンプレックスを感じて、素直になれずグレた自分を見ているようで、親近感を持っているのだ。

（あたいなら、潤くんを覚醒させてあげられるのに……）
そんなことを思っていると、ニャンミの声が聞こえてきた。
「みんなが帰っていくよ」
ニャンミが指差した先をクロミが見ると、歌たちがぞろぞろと部屋を出ていくのが見えた。クロミたちは、すかさず門の見える窓に走り出した。
やがて、潤とセバスタンに手を振って、門の外に向かって歩いている歌たちの姿が見えた。全員が外に出て行くのを見届けると、クロミたちは安心した顔になった。
「潤様、順調に記録が伸びていきますね」
セバスタンが紅茶の用意をして、ソファに座る潤に話しかけた。手放しでは喜べないものの、潤は手ごたえを感じていた。
ただ、真菜との特訓はハードルが高すぎる。三年ぶりに会う真菜は、外見こそ大きく変わっていないが、その身体能力は、その辺の男子ではかなわないように見えたからだ。
「体力作りなんてダサいこと、やってられるかよ」
その上、地味な努力など、潤にとってはダサいとしか考えられない。
「お任せください、潤様」
セバスタンが自信たっぷりに胸を叩く。そして、そそくさと部屋を出ていくと、すぐに舞い戻ってきて、

「間もなく、トレーニングマシンが到着いたします」
「そうか、家で鍛えれば、カッコ悪いとこ見せずに済むぜ」
潤は素早く気持ちを切り替えた。当然届けられるマシンは、潤の好みを押さえたセバスタンならではのチョイスだろう。トレーニングマシンが最新型でも、やることは同じなのだが、潤は満足そうだ。

そして、翌日の昼過ぎに、マイメロと歌と琴、フラットくんとピアノちゃんを連れた美紀、マイメロたちとは距離を保ちながら歩く真菜がやって来た。嬉しそうな琴の横で、歌は浮かない顔をしていた。やはり、駆のことが気になっているのだろう。
まずは、潤の事情を詳しく知っている関係者だけとした。この作戦が成功したら、ギャラリーを増やして行こうと、歌たちは相談していた。
そして、駆のことよりも、今はみんなで、潤がデビュー出来るように協力しよう。自分のことは後で美紀と真菜に相談しようと考えていた。
早速、セバスタンが防音室に案内した。昨日届いたトレーニングマシンは、離れた部屋に集められていて、潤は昨日全部試し済みだった。当然、トレーニングも数分しかもたず、すっかり疲れ果てた潤は、夕食もそこそこに眠り込んでしまった。

「待たせたな！」
ぐっすり眠って疲れも取れたのか、潤はすでにノリノリだった。
「みんな、オレの曲を聞いてくれ！」
実際の体力は昨日とほとんど変わっていないが、ギャラリーを前にするとテンションが上がる。歌たちも期待しながら潤の演奏を待った。
「行くぜーー！」
絶叫と共に、ギターをかき鳴らした。YeahTubeの映像そのままのハイテンションな演奏が繰り広げられ、歌たちも手拍子をしたり、立ち上がったりで、ノリノリだ。
そして、歌、美紀、真菜が顔を見合わせた。曲は終わりに近づいている。
（今日はもっといけるかも！）
歌たちが立ち上がった途端、ギターの音がプッツリと切れ、潤は床に倒れこんだ。
「潤くん！」
ビックリした琴が潤に駆け寄った。
「昨日よりもテンション上がるの早かったしな……」
「トータルで測れば、昨日よりも長いと思うわ」
美紀と真菜もガッカリしつつも、ギャラリーの効果はあったと感じた。潤はセバスタンに支えられ、ソファに座った。

「頑張ったね～、潤くん～」
「うん、昨日よりも良かったよ」
マイメロと歌が拍手した。
「YeahTubeの映像よりも、今日の潤くんは、ずっとカッコ良かった」
琴は感激を隠せない様子で潤を見つめ、歌は少し心配になったが、
「ありがとう、琴ちゃん。本気を出したオレはスゴイぜ！　次はもっと頑張るから、応援よろしくな！」
潤は琴の手を握って言うと、琴は顔を赤らめて、恥ずかしそうにうつむいた。普段は元気いっぱいの琴なのにと、歌はますます心配になる。
「想像していたよりも、ずっと上手かったね。ギターもカッコ良かったよ」
フラットくんがピアノちゃんを見て言うと、
「わっぱめー」
ピアノちゃんも潤の演奏を褒めているようだ。みんなに励まされたせいか、潤はみるみる復活した。
「よっしゃー、もっと体力つけて、レコーディングするぜ！」
「その先は世界ツアーでございますね、潤様」
セバスタンはツアー先の空港でもみくちゃになる潤を、必死でガードしている自分を想

像して、サングラスの奥の目を細めた。

「なんだいなんだい、ほんの三分ほどの演奏でグッタリしてるのに、ずいぶんとチヤホヤされてるじゃないか」

今日もクロミ、バク、ニャンミは物陰から様子を窺っていた。

本来なら最前列にギャラリーとして参加したいクロミたちだったが、すっかり歌やマイメロたちに自分たちのポジションを奪われた格好だ。

「今日のところは仕方ないゾナ。バクたちは日陰者の身ゾナ」

普段ならバクを罵倒したいところだが、音を立てるといけないので、クロミも我慢している。

再びクロミとバクが、やれやれと偵察を続けていると、後ろにいたニャンミが、

「リーダー、なんか、あの潤ってヤツ、ムカつくんですけど」

邪悪なニャンミの発言に、クロミとバクが驚いた顔で振り向いた。ニャンミはすでにドクロボウを手にしていた。

「ちょ、ちょっとニャンミ……」

クロミとバクにとって、潤は快適な居場所の提供者だ。潤は単純な性格だが、悪気が

あるわけではないし、神経質でない分、クロミたちの自由度は高い。
「今は、レコーディングとやらのために、みんなも必死で盛り上げているだけゾナ」
バクもとりなすが、ニャンミは早くも矢をつがえている。
「あんなにチヤホヤされて……きっと、二股も三股もかけるつもりですよ、リーダー」
「ニャンミ、落ち着くんだよ」
ラブラブな二人を引き裂くのがドクロボウというアイテムだ。しかし今、潤はみんなに励まされてはいるが、別にモテているわけではない。
「そうだよ、ニャンミ。そんなに簡単にドクロボウを使ってると、肝心なところで矢がなくなっちまうよ」
「最初の目的を思い出すゾナ」
クロミとバクが引き留めている間に、潤はみんなと一緒に部屋を出て行った。今日はここまでということか。胸をなでおろしてニャンミを見ると、
「い、いないゾナ」
見ると、こっそり後をつけている。クロミたちも慌ててニャンミを追いかけた。
やがて、歌たちは玄関から庭に出た。潤はギターを抱えたまま、セバスタンがすぐ後ろに立ち、みんなを見送っているところだ。ニャンミは柱の陰から矢を握りしめながら様子を見ていた。

「帰っていくようだよ。ニャンミ、明日は学校があるから、誰も来ないよ」
クロミがニャンミの肩を叩き、ニャンミの表情が和らいだ途端、
「潤くん、またぜーったいに演奏を聞かせてよね」
琴がいつになく可愛い声を出した。
「琴ったら、すっかり潤くんのファンになっちゃったのね」
「今日の潤くんは、一番カッコ良かったものね～」
歌とマイメロがやれやれという顔をした。
「あたし、ファンクラブが出来たら、絶対に一番に入るからね！」
「おっ、潤ったらモテモテやん」
囲まれた中心に潤がいて、照れながらも満更でもない表情だ。きっと、今日もトレーニングしようと決めているに違いない。
「潤くん、デレデレしてる場合じゃないわよ。折角のチャンスよ。頑張って」
美紀が潤をたしなめるように言ったが、もちろんいつもの笑顔だ。
「……リーダー、あれでも二股じゃないって言うんですか！」
再びニャンミが矢を握りしめた。
「だから、ニャンミ、冷静になれって！」
クロミはニャンミが飛び出さないように押さえているバクに加勢した。

「遅くなるとお父さんが心配するから、帰ろう、琴」
潤を熱く見つめ、エールを送る琴を、歌が促した。
「そうね。明日からは学校で会えるわね。それに、テストも近いし」
美紀が言い、みんなが潤から離れた。名残惜しそうな琴の顔を見たニャンミの瞳の中では、邪悪な炎がメラメラと燃えていた。クロミとバクを払いのけ、矢をつがえる。
「よっしゃー、オレは絶対デビューしてスターになるぜ！」
潤はスターになった自分を想像したのか、ノリノリでギターを持ち上げて振った。
「ええファンが出来て良かったな、潤」
クロミたちにはまったく気づかず、真菜が冷やかすように軽く肘打ちをすると、潤はフラフラっとよろめいた。会話を聞いていなくても、ただの仲良しな同級生にしか見えず、完全に誤解なのだが、その様子はニャンミの暴走に追い打ちをかけた。
「チヤホヤされてニヤけているヤツには、天誅だよ！　喰らえ！」
クロミが止める間もなく放たれたドクロボウは、真菜の肘打ちでよろけた潤の持っているギターに当たった……ように見えたが、すぐにスーッと消えた。
「潤くん！」
ドクロボウが放たれたのを見て、歌たちは同時に叫び、周囲を見回した。当然、クロミと、ニャンミを抱えたバクはすぐに逃げ去っていて、姿も見えない。家の中ならともか

く、庭に出てしまっているので、どこから飛んで来たのか分からなかった。

「なんだなんだ？」

潤がギターを持ったまま、キョロキョロするが、何ともないようだ。

「潤くん、どこか痛いとかない？」

「いや、オレは何ともないけど……また変なアイテムが出てきたのか？　まあ、不良品だったんじゃねえの？」

心配顔の歌とマイメロに、潤は笑って答えた。

「ああー、やっちまったよ」

「ギターに当たったゾナ……どうなってしまうゾナ？」

クロミたちは、かなり離れた木の上にいた。潤に当たらなくて、内心ホッとしたものの、心配になって、クロミは潤を見るが、表情も顔つきも特に変わった様子はない。もちろん潤が歌たちを罵倒することもなく、やや疲れているように見えるだけで、普段と変わりない。

「ありやま？」

マイメロも首を傾げた。王様の時のパターンとはまた違っている。駆の時のこともあり、潤の言う通り、ドクロボウには不良品も混じっているのだろうか。

「じゃ、じゃあ、私たちは帰るね。明日学校で会いましょう」

歌たちは不安ながらも柊家を出た。

翌日、潤は学校に来なかった。潤のことだから、テストが終わってから編入手続きをするんだろうと、気楽に思えたのだが、昨日のドクロボウの件もあり、歌たちも心配になった。

一旦家に帰って、マイメロを連れて、歌たちは柊家の前で待ち合わせた。琴も心配していて、慌てて学校から直行した。

「家は特にいつもと変わりないね」

歌がホッとして言うと、セバスタンが血相を変えて出てきた。

「お待ちしておりました。みなさん、どうか、潤様を止めてください」

セバスタンのただならぬ雰囲気に、歌たちが後に続くと、一室からギターの音が聞こえてきた。

「ギターの練習してたんか？　ずいぶん熱心やなあ」

「熱心にもほどがございます。あれでは倒れてしまいます」

セバスタンにドアップで迫られて、さすがの真菜もタジタジになった。

「潤くん！」

防音室の中にはギターの轟音が鳴り響いていて、いつから弾いていたのだろう。潤はフラフラな様子だ。昨日と同じ、隠れた場所にクロミたちも様子を見ていた。クロミやバクも、必死で止めようとしたのだが、憑りつかれたようにギターを弾きまくっている潤には、まるで通じなかった。
「あの調子で、昨日からずっとギターを弾いているのです」
止めようとした歌たちに気づいたのか、
「イエーイ！　どうだい、俺のギターは！　こいつさえあれば、オレはスターになれるのさー！」
ギターを振りかざしている潤の顔は、疲労の色が濃い。
「潤、ええ加減にせんと、デビューどころか体を壊すで！」
真菜がタックルしようとするが、潤がひらりとかわす。
「潤くん、体壊すよ。休んで！」
「潤くん、ギターを降ろして！　限界超えてるわ」
「琴、美紀、危ないよ！」
歌が止めるのもきかず、二人は潤に近寄っていく。
「女は来るんじゃねーよ！　チャラチャラすんのはロッカーじゃねえ！」
ギターをかき鳴らしながら、歌たちを威嚇し始めた。こうなると、真菜でさえ近寄れな

い雰囲気だ。見ると、ギターにはドクロマークがついている。やはり、ドクロボウが原因だったのだ。
「この場合、どういうこと？」
歌を始め、みんながマイメロを見た。
「う～ん……マイメロ、分かんない」
予想通りなのだが、可愛く顔を傾けたマイメロに、クロミたちもコケた。
「想像だけど……」
フラットくんが口を開き、みんなが注目した。
「長年愛用してきたギターだから、本人以上にデビューを心待ちにしていたのかも。だから、潤の集中力のなさに、我慢の限界が来たんじゃないかな。帰国してから、女の子たちに囲まれているのが、余計に気に食わなかったのかもしれないよ」
フラットくんの説明の間も、琴や美紀を中心に、潤のギターアクション攻撃は続いている。
「そうなの、マイメロ？」
マイメロは黙ってにっこりした。可愛いからいいものの、フラットくんに丸投げの雰囲気だ。
見ているそばから、ギターは禍々しい形になり、潤の顔には歌舞伎の隈取のような模様

アン大臣のように巨大化して暴れ出すパターンになってしまう。このままだと、ドリが浮かんだ。それにつれて、音も大きくなり、歌たちは耳を塞いだ。
「ヤバいよ。家が壊れちまう」
物陰から見ていたクロミがどうすることも出来ず、地団駄を踏む。バクも困り果てているが、後ろから見ているニャンミは一向に気にしていないようだ。
「ドクロボウが原因だと分かったら、大事になる前に、何とかしなきゃ、マイメロ！」
マイメロは歌に頷くと、メロディ・タクトを出して、
「メロディマーク！　くるくるシャッフル！」
マイメロが声とともにタクトを回すと、メロディ・コンパクトが出現し、カードが円を描きながら回り出す。回転が止まると、一枚のカードがクルリと飛び出した。
「あっ、ママのカードだ！」
マイメロの前に、椅子に座ったままのマイメロのママが現れた。
「ママ、潤くんを元に戻して。おねがい♥」
マイメロが可愛く言うと、マイメロのママはニッコリと頷いた。その姿に気づいた潤が、ギターをかき鳴らしながら近づいていく。
「あらあら、潤くん。すっかり有名になったわねえ。でも、ちょっと調子に乗ってるんじゃないの？」

マイメロのママはすぐに潤に話しかけた。潤は一瞬たじろいだが、再び近づいた。
「もう少し音、小さくならないかしら……潤くんたら、ギターに踊らされるなんて、三年たっても相変わらず残念な男子ね」
マイメロママのため息交じりの毒舌に、
「うるせーよ、オバサン！　オレのギターは最高だぜ！　当然、オレのテクニックが最高だからなんだけどな！」
潤の表情が険しくなり、ギターの音は超音波となって、マイメロのママを直撃した。
「きゃっ」
マイメロのママが、壁まで吹っ飛んだ。
「ママ……」
マイメロが心配そうに床に落ちて目を回すママを見た時、歌が叫んだ。
「潤くん、ギターをそんなふうに人を傷つけるために使っていいの!?　そのギターは潤くんにとって、宝物じゃなかったの!?」
歌は知っていた。そのギターは母親がプレゼントしてくれたものだった。子供の頃、潤は恵一と共にヴァイオリンを習っていた。だが、天才の恵一と絶えず比べられるのが嫌になり、潤はヴァイオリンを捨てた。挫折感と兄へのコンプレックスにさいなまれていた時期に、母親にねだって買ってもらったのだ。

「潤くん、言ってたじゃない！　ギターのお陰で嫌なことも忘れられて、寝る時も抱いてると心が休まるって！」
歌の必死の叫びに、潤の動きが止まった。
その声を聞いたマイメロのママが、マイメロが『も〜っとおねがい♥』をする前に、スクッと立ち上がった。
この辺りが、王様やドリアン大臣とは違い、筋金入りの大物である。
マイメロのママは無表情で潤とギターを睨んだ。無表情だけに、怖さは倍増だ。
「ギターの方は不満みたいよ、潤くん。そんな集中力じゃ、そのうちギターにまで愛想をつかされるわよ」
マイメロのママは口に手を当てて、クスリと笑った。そして、視線をギターに向け、
「潤くんはね、褒められて伸びるタイプなのよ。飴と鞭じゃなくて、飴と飴と時々鞭よ」
ギターが考え込むように静かになり、マイメロのママがたたみ込む。
「毎日新しいスターが生まれているのよ。この世界のスピードは高速回転よ。努力しなきゃ、デビューどころか、あっという間に過去の人よ」
「そ、そ、そんなわけねえだろ！　オレはやるぜー！」
潤が叫ぶと同時に、ギターが元の形に戻り、潤は倒れこんだ。すると、手から離れたギターからドクロマークが取れて、折れたドクロボウに戻り、そして光とともに消えた。

「やったあ！」
歌たちはハイタッチをしながら喜んだ。と、同時に安心した。今日のことを潤が少しでも覚えていたら、きっと真面目にトレーニングするだろうと。部屋も最小限の被害で済んだ。
「ありがとうございます、マイメロのママ様」
セバスタンがマイメロのママに深く礼をすると、潤を抱き上げた。
マイメロはマイメロのママに、メロディ・キャンディを一粒出して、
「ママ、どうもありがとう。はい」
キャンディが口の中に入った途端、マイメロのママは消え去った。潤はぐったりとしている。相当疲れているのだろう。
「良かったね、解決して」
マイメロは歌ににっこりと微笑んだ。
「じゃあ、私たちは帰りましょうか。明日もテストだし」
そう美紀が言うと、ようやくテストのことを思い出し、歌たちも慌てて屋敷を出ていった。

取り残されたクロミ、バク、ニャンミも脱力していた。
「結局メロディ・タクトがなきゃ、解決出来ないのか。チクショー、あの時、一緒に持ち出してたら……」
クロミが悔しそうに言うと、
「持ってても、誰もお助けしてくれないゾナ」
「なんだってー！」
また余計なことを言ってしまった、と後悔しても、もう遅い。バクはクロミに張り倒された。手をパンパン叩いて、クロミはニャンミに言った
「見ただろう、ニャンミ。ドクロボウはやっぱり危険なアイテムだ。マリーランドに帰ってジャガー先輩に使う時までは、しまっておくんだよ」
「分かりましたよ、リーダー……」
「マイメロたちがこっちにいるのは好都合だよ、手はあるさ」
「何とかこっそり帰れるように、考えるゾナ」
クロミとバクに言われ、渋々ながらも承知したニャンミだったが、ドクロボウのパワーの大きさに驚きながらも、使う楽しみの方がさらに膨らみ、残りの三本の矢を見てニヤリと笑った。
ドクロボウというアイテムは、想像以上に危険なものなのかもしれない。

第四章　ウサミミ仮面ってイイナ！



「小暮！　もっと集中しろ！」

トラックにコーチの怒鳴り声が響き渡った。

スタートの練習を繰り返していた小暮駆は、思わず転びそうになった。

「す、すいません……」

駆は自分が練習に集中出来ない原因が歌であることを分かっていた。

両手で頬をパチンと叩いて、気合を入れ直す。

中学三年の時に県大会の一〇〇mで打ち立てた一〇秒六六の記録を、高校一年の都大会でコンマ三八秒縮めて、期待の新人としてスポーツ新聞や陸上の専門誌で脚光を浴びたが、あれから記録は伸びあぐねていた。

その原因はスタートだ。第一歩を踏み出すタイミングが遅いのだ。どの大会でも、スタートの上手い選手と最初の一〇メートル地点で最大二メートルの差が出ていた。後半加速してからのスピードの伸びは、誰にも負けない自信があった。だから、スタートさえ決めれば、高校日本一も夢ではなかった。

それで一年生の冬からずうっと練習してきたのに、この体たらくの自分が情けない。

駆の脳裏には、昨日一か月ぶりに会った夢野歌の顔がこびりついて離れない。

ゴールデンウィークの喧嘩から、駆は何度も歌にメールを送った。それでも、返事が返ってこなかった。

それがドクロボウのせいであることなど知らない駆は、五月の最終日曜日に、今日会おうとメールを打ってから、夢ヶ丘の駅近くの公園で約束時間の午前一〇時から四時間待ったが、歌は現れなかった。

（なんで、俺の気持ちを分かってくれないんだ！）

腹立たしかったが、

「怒ったら、おしまいだぞ。歌ちゃんが好きなら、何があっても、何を言われても我慢して、自分の気持ちを直接伝えるんだ」

というフラットくんのアドバイスを思い出し、グッと堪えた。

フラットくんはついていくと言い張ったが、駆は断った。男として、自分一人で解決したかった。

駆は公園からもメールを打ったが、やばり返事はなく、痺れを切らせて、夢野家に歌を訪ねた。

歌はおらず、家族も留守だった。

駆はそれでも諦めきれず一時間ほど待つと、マイメロを抱えた歌が美紀と真菜と自宅に帰ってくるのが見えた。

駆は猛然と駈け出し、歌が気づいた。

だが、駆の行く手を真菜が両手を開いて遮った。

「歌と話したいんだ！　どいてくれ！」
「小暮！　いい加減にしいや！　あんた、どれだけ歌を傷つければ気が済むんや！」
「だから、どけって！」
真菜を押し除けようとした次の瞬間、駆は宙を舞い、隣の家の垣根に突っ込んでいた。
真菜に投げ飛ばされたのだ。
駆が垣根の中から這いずり出てきた時には、歌はみんなと玄関へ入ろうとしていた。
「う、歌……」
「歌——っ！」
駆は声を絞り出すように叫んだ。
「これ以上、私につきまとうんなら、警察に通報するからね！」
歌は目に涙を溜め、今までに見せたこともない険しい表情で言った。
「け、警察……⁉」
「駆くん、ストーカーはメッ！　だよ」
マイメロまで口を尖らせた。
「ス、ストーカー……？」
駆が唖然とする中、玄関のドアがガチャンと閉まった。
その時の歌の顔が駆の目の奥に焼きついたまま、今日に至っているのだ。

（謝りのメールを打っただけで、なんでストーカーなんだよ……）
駆がそんなことを思いながらスターティングブロックに両足をかけた瞬間、スタータ
ーをしてくれていたコーチからまた罵声が飛んだ。
「やる気がないなら、帰れ！」
「コ、コーチ、すいません！」
駆は深々と頭を下げるしかなかった。

その頃、歌は自宅の自分の部屋で、駆からのメールを消去していた。
四月二九日を境に、まるで別人になってしまったとしか思えない駆のメール。最後の
『お前の全裸を写メしておくれ！』を消し終え、駆からの連絡が入らないように通信拒否
の設定をした。
「昨日の駆くん、歌ちゃんが言うほど、ひどい人には見えなかったけど……」
傍らで見ていたマイメロが言った。
歌は一瞬、ドキッとしたが、
「マイメロ、私の前で、もう二度と駆のことは口に出さないで！」
とビシッと言った。

「歌ちゃん……」
歌の険しい表情に、マイメロはそれ以上何も言うことが出来なかった。
柊家の屋敷に住むようになってから、クロミたちは何不自由のない生活を送るようになった。バクが朝夕の新聞配達のアルバイトをして、三人分の生活費をちゃんとセバスタンに支払っていたお陰なのは言うまでもない。
それでも、ニャンミはフツフツと不満を募らせていた。
潤やセバスタンと馴れ合いの日常を楽しそうに過ごしているクロミやバクが幼稚に思えて仕方なかった。
「いったい、いつになったらマリーランドへ帰れるのさ⁉」
と、ニャンミが尋ねても、クロミの答えはいつも同じだった。
「もう少し待った方がいいよ」
二度マリーランドへこっそり偵察に行っていたバクも、
「ニャンミの家は勿論、クロミーズ5のメンバーの家は、近衛兵たちが物陰に隠れて見張っているゾナ。それが解かれるまで我慢した方がいいゾナよ」
と言うばかりで、ニャンミはひとりヤキモキしている自分がバカらしく思える。

「あ〜、むしゃくしゃする！」
ニャンミはこの日、朝ご飯を食べ終えると、クロミたちに黙って、柊家を抜け出した。右手にはドクロボウを持ち、背中には残り三本の矢が入った矢筒を背負っていた。
ジャガー先輩への復讐のために、矢は一本残しておけばいい。公園でイチャイチャしているカップルや幸せそうにしているカップルに、残り二本の矢を射たくて仕方なかった。
公園に来る途中、ニャンミはアパートの駐車場からバイク……いや、三輪車を盗み出し、ペダルを漕いだ。マリーランドなら爆走できるが、ここ夢ヶ丘では車が多すぎてタラタラ走るしかない。余計イライラが募ってくる。
公園に到着すると三輪車を乗り捨て、カップル狩りしようとあちこち歩くのだが、平日の午後ということもあり、カップルは一組も見つけることは出来なかった。
「もう、なんなんだよ！」
ニャンミは不貞腐れて、ベンチに横になる。
すると、それはいかにも楽しそうな鼻歌が聞こえて来た。ニャンミは起き上がり振り返ると、公園脇の歩道を元王様のゾウさんが足取りも軽やかに通り過ぎていく。
ジャンパー姿に首にインカムをかけ、テレビ局のADが板についてきた感じだ。
「あいつ、なんであんなに楽しそうなんだよ……ん？　待てよ。確か美人局アナと一緒

に仕事してるとか言ってたな……よーし、次のターゲットはあいつにしよう！」

ニャンミはゾウさんを尾行し始めた。

都内にあるテレビ局に到着するまで、ニャンミは苦労の連続だった。

定期券を持っているゾウさんとは違い、お金がなく、切符が買えないニャンミは女性の乗客のカバンに掴まり、ぬいぐるみのフリをして改札口を通り抜けたり、車内で正体がばれるのを避け、電車の網棚に身をひそめたり。

テレビ局に到着したらしたで、通行許可証があるゾウさんとは違い、わざわざ業者の搬入口まで行って、台車の荷物に紛れてなんとか局内に侵入することに成功した。

しかし、テレビ局内はまるで迷路のようだった。テロに備えてわざとそうしているのだが、事情を知らないニャンミは迷いに迷い、ゾウさんをスタジオで発見するまで三時間以上もかかってしまった。

「マリーランドの城とは大違いだよ！」

ニャンミが吐き捨てるように言った時、ゾウさんの楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

ドアが開けっ放しになっていた収録スタジオを覗くと、室内の隅でゾウさんは美人局アナのタンパンこと丹下あゆみの膝の上に乗っていた。

「本当にゾウさんの淹れてくれるコーヒーは最高だわ」
「ほっほほーい、タンパンのために愛を込めて淹れたからのう」
「まあゾウさんったらお上手なんだから。でも、嬉しい。ありがとう」
頬にキスされ、ゾウさんはポッと頬を赤らめた。
「うひょーっ！　ADになれてこんなに嬉しい事はないゾウ！」
その時、スタジオ内にフロアディレクターの声が響いた。
「本番一分前ー。みんな所定の位置についてください」
番組はお笑い芸人のトーク番組で、アシスタントのタンパンは司会者の売れっ子漫才コンビの横に移動した。
ひな壇にも芸人たちがスタンバイする。
「ゾウさん、カンペよろしくね」
タンパンが正面のカメラの横に移動したゾウさんにウインクした。
「わしに任せておけばバッチリだゾウ！」
ゾウさんはタンパンのセリフが書かれたスケッチブックを構え、インカムを耳に付けた。
「本番一〇秒前……九……八……七……六……五……」
その時、スタッフの背後にニャンミミが忍び寄る。

本番スタートの「キュー！」のサインと同時にドクロボウから矢を射った。
だが、ゾウさんはタンパンにカンペが見やすいように少し体を動かしたため、矢はゾウさんのインカムに命中した。
その時、インカムが閃光したかと思うと、ヘッドホン部分にドクロマークが浮かび上がる。
その時、テーマソングと共に番組司会者の芸人コンビが、
「こんばんはー、『メチャトーク』の時間やで！」
「今夜は二時間スペシャルの生放送でお送りしまっせ！　タンパン、頑張ろうな」
「はい、頑張っていきましょう！」
タンパンはカメラに向かっていつもの爽やかな笑顔を浮かべた。
「ほな、最初のお題は……」
司会者の一人がタンパンを見て言った。
「はい！　最初のお題は……」
その瞬間、ゾウさんはパタンとカンペのスケッチブックを閉じてしまい、タンパンの表情が凍りついた。
司会者二人もひな壇の芸人たちもざわめき、
「ＡＤ、何やってんねん！」
ゾウさんを見てツッコミを入れた。

ゾウさんの表情はドクロボウの影響で険しくなり、
「司会のアシスタントなんだから、台本くらい覚えておけ！」
と怒鳴った。
「え、ひょっとしてこれドッキリですか？」
タンパンが天然なボケを言うと、一瞬にして芸人たちが納得したらしく、
「なんや、そういう事やったんか〜」
「ほんまビックリしたわ」
その場が和んだように見えたが、
「ドッキリじゃないゾウ！　わしは本当の事を言っただけじゃゾウ！」
カンペのスケッチブックを床に叩きつけると、カメラの前を横切り、タンパンに歩み寄る。
「ちょっとくらい可愛いからっていい気になってるんじゃないゾウ！　だいたいその服はなんじゃ！　胸の谷間を強調したりパンツが見えそうなミニスカートを履くんじゃないゾウ！」
「カットカット！　コマーシャルだ——っ！」
スタジオに隣接している調整ブースの中でプロデューサーが叫び、スタジオ内にいるスタッフたちがゾウさんを捕まえると、スタジオの外へ運び出していく。

コマーシャルの間中、全国の視聴者からの電話が殺到した。

タンパンのファンからの苦情が大半かと思われたが、それはほんのひと握りで、残りの電話は面白いからそのまま続けろという要望だった。

それはたちまちプロデューサーに伝えられ、思わぬ反響にひょっとしたら視聴率が上がるかも、と思ったプロデューサーは、

「ゾウさんを連れ戻せ！」

大きな声で命令した。

「女王様、大変でございます！　元王様のただのゾウが、人間界のテレビ局で暴れております！」

マリーランドのお城に、反省部屋での謹慎が解かれたドリアン大臣の声が響いた。

「なんですって⁉」

女王のルミちゃんは慌てて自室に駆け込み、王様がよく観ていたテレビのスイッチを入れた。

テレビの画面には、タンパンを庇う司会者や芸人たちと、睨み合うゾウさんが映し出されていた。

「あなた……！」
ルミちゃんが呟いた時、ゾウさんがタンパンを指差し、
「お前みたいな女は最低じゃ！　健全な視聴者を惑わしおって！　お前のお陰でわしは愛するルミちゃんに離縁されてしまったんだゾウ！」
すかさず芸人の一人が、
「ルミちゃんて誰や！」
とツッコミを入れた。
「ルミちゃんはな、タンパンとは違って賢くて清楚でおまけにとってもチャーミングなゾウだゾウ！」
その言葉を聞いた途端、ルミちゃんはポッと頬を赤らめた。
「もう、あなたったら……正直者！」
だが、すぐに別のツッコミの声が響いた。
「なんだゾウかよ！」
その途端、ゾウさんのインカムが閃光し、みるみるその体が巨大化していった。
「ルミちゃんの悪口をいうヤツはわしが許さんゾウ！」
天井の照明器具を剥ぎ取ると、出演者やスタッフに向かって投げつけた。
その時、一緒に見ていたドリアン大臣が、画面のゾウさんのインカムのヘッドホン部分

を指差した。
「女王様、これをご覧ください！　ドクロボウのせいに間違いありません。大臣、人間界に行く準備を！」
「ドド、ドクロマーク!?」

「かしこまりました！」
ドリアン大臣が部屋を飛び出して行くと、ルミちゃんはすぐに携帯電話を取り出し、マイメロに連絡した。

夢野家のリビングで家族と『メチャヤトーク』で大暴れするゾウさんを観ていたマイメロがいきなりブルブルと震えた。
「あわわわわ……」
頭巾に入っていたマナーモードになっている携帯電話が振動したからだ。
「はいはーい」
マイメロが着信ボタンを押すと、ルミちゃんの声が響いた。
「マイメロ、大変です。王様がドクロボウのせいで、今テレビ局で暴れています」
「マイメロも観てるよ。ゾウさん大活躍」

「何をのんきなこと言ってるのですか！　すぐにテレビ局へ行って王様を止めるのです！」
「王様じゃないよ、ただのゾウさんだよ」
「そんな事はどうでもいいの！　早く行って騒ぎを収めるのです！」
「マイメロ、分かった」
「私もこれからハリネズミくんを連れてそっちに向かいますから」
「はいは～い」
「マイメロ、私も行くわ」
歌はマイメロを抱き上げると、ソファの脇に置いてあったSuicaと財布が入ったカバンを持ち、急いでテレビ局へ向かった。

マイメロと歌がテレビ局に到着すると、既に建物は半壊しており、テレビ局に要請された警察関係者が仁王立ちしたまま巨大なゾウさんを取り囲んでいた。
その後方には、建物の中から脱出した番組の出演者たちやスタッフ、さらに番組を観て駆けつけた大勢の野次馬たちでごった返していた。
歌が野次馬たちをかき分け前に進むと、警察関係者から自衛隊に応援を要請する無線の

声が聞こえて来た。
「どんどん事件が大きくなっちゃうわ！　マイメロ、早くなんとかして！」
「はいは〜い」
マイメロは、メロディ・タクトを振りながら呪文を唱えた。
「メロディーマーク！　くるくるシャッフル！」
空中にメロディ・コンパクトが出現すると、蓋がひとりでに開いて、二〇枚ほどの裏返しのカードが飛び出してきて、くるくると円を描きながら回り出す。そして、回転が止まると、一枚のカードがクルリと飛び出してくる。
最強のカード、『ウサミミ仮面』だった。
「やった〜！　ウサミミ仮面さんだ」
同時に歌の胸も高鳴った。
（三年ぶりに柊先輩に会えるの？）
と、心の中で言いつつ、ウサミミ仮面の正体である柊恵一に会えると思っただけでドギマギしている自分に驚いた。
その時だった。
野次馬たちの後方からエンジン音が轟いてきた。
野次馬たちがサッと道をあけると、ヒツジの着ぐるみを着た執事のセバスチャンである

シツジ仮面が運転するピンクのウサミミカーが急速に接近してきた。
その後部席にはウサミミ仮面が偉そうにふんぞり返っている。
白の全身タイツにピンクの手袋とブーツをつけ、ピンクと黒の縞模様のカボチャパンツを履き、マイメロのようなウサギの頭巾を被り、顔は黄金の仮面と白のマスクで隠れている。到底ヒーローとは思えない恥かしい姿だ。
警察関係者の間をすり抜け、巨大なゾウさんの前でウサミミカーは急ブレーキで止まった。
「坊ちゃま、三年ぶりですぞ！　ビシッと決めて下さいませ！」
「フンッ」
ウサミミ仮面は、やはりやる気がなかった。
嫌々立ち上がると、まったくやる気のない態度で、棒読みの口上を述べ始めた。
「聞こえる聞こえる、愛に悩む人々の叫びが。悪に苦しむ人々の嘆きが。だってウサギの耳は長いんだもん。愛と正義の使者、ウサミミ仮面、参上」
おざなりのポーズも決めると、シツジ仮面も負けずにその前に顔を出し、
「シツジ仮面もよろしく」
と言うと、すぐに顔を引っ込めた。
マイメロはすぐにウサミミ仮面に歩み寄った。

「マイメロ、なぜ私を呼んだ⁉」

ウサミミ仮面がマイメロを睨みつけた。

「いや～ん、ウサミミ先輩さんこわ～い」

「先輩と言うな！　ウサミミ仮面でいい！」

マイメロもウサミミ仮面が柊恵一であることは知っていたが、今でも柊恵一の着ぐるみの中に入っているのがウサミミ仮面だと思っているのだ。

「分かったわ、先輩さん」

「……………」

ため息をつくウサミミ仮面に向かって歌が叫んだ。

「ウサミミ仮面、ゾウさんがドクロボウの影響で大暴れしているの！　助けてあげて下さい！　お願いします」

「夢野くん……」

仮面の下で見えないが、ウサミミ仮面は頬を赤らめていた。

「もう、歌ちゃんたらマイメロのセリフだったのに。でもマイメロも言っちゃう。ウサミミ先輩さん、おねがい♥」

だが、こっちにはまったく反応せず、ウサミミ仮面は気合の声と共に、こちらを見下ろしている巨大なゾウさんの前にジャンプして、カッコ良く着地した。

「ウサミミ仮面、久しぶりじゃのう。だが、今日のわしはなんだか分からないが無性に腹が立っているのじゃ。お前など踏み潰してやる！　パオーーン！」
ゾウさんは大きな足で踏み潰そうとしたが、ウサミミ仮面は鮮やかなバク転で躱す。
「僕は色々忙しいんだ。お前のような暇人に拘っている時間はない。くらえ！」
ウサミミ仮面は仮面を外しながら叫んだ。
「イケメンビーーーム！」
凄まじい勢いの光線がゾウさんの顔に向かって一直線に飛んで行った。
ビームが命中すると同時に、
「ぎょえええええ！」
正義の光がゾウさんの体全体を包むと、巨大なその体がゆっくりと後ろに倒れていく。
大きな地響きと共にゾウさんが元の姿に戻り、インカムが地面に落ちた。
同時にドクロマークが消え、ヘッドホンに刺さっている矢に変わった。
その時、上空からゆっくりと気球が舞い降りてきた。
気球にはルミちゃん、ドリアン大臣、ハリネズミくんが乗っていた。
「あなた！」
ルミちゃんは気球が着陸すると同時に飛び降り、インカムに刺さっていた矢を抜くと両手で折り、ゾウさんに駆け寄る。

「あなた、しっかりして下さい！」
ルミちゃんは気絶している王様を抱き起こし、
「う〜ん……わしは何をしていたんじゃ。……あ、ルミちゃん！」
「すべてはドクロボウのせいだったのです。あなたのこと誤解してしまって本当にごめんなさい」
「それじゃあ、わしはまた王様に戻れるのかのう？」
「勿論ですわ！」
「そうか　じゃあ、マリーランドへ戻ってルミちゃんとあんなことやこんなことをするかのう！」
「やだ、王様ったら〜」
あまりのラブラブっぷりに、マイメロも歌もウサミミ仮面も周りの人間たちも、唖然としたり、ぽかーんとしたりしていた。
その時、野次馬たちの間からダークなオーラが湧き上がった。
騒ぎを起こした張本人のニャンミだ。
「おのれ、マイメロの奴〜〜っ！」
ダークなオーラがニャンミの体からさらに迸り、周囲の野次馬たちは驚いて後退りをしたため、その存在をマイメロたちが知ることになった。

「ドクロボウで矢を射れば射るほど、ダークパワーに身も心も乗っ取られてしまうのです！」
「なんじゃ、あのダークな光は⁉」
「ニャンミですわ！」
ルミちゃんの言葉に、歌が驚いた。
「なんですって⁉」
「そういえば、メガネザル博士が言ってたような……」
「マイメロ！　どうして、そんな重要なこと話してくれなかったのよ！」
歌に睨みつけられ、マイメロが悲しそうな顔になった。
「歌ちゃん……こわい」
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！」
歌はウサミミ仮面に向かって叫んだ。
「ウサミミ仮面、ニャンミを捕まえて！」
ウサミミ仮面は頷くと、サッとマントを翻して高々とジャンプした。
「イケメンビーーーム！」
再びニャンミに向かって光線を放った。
だが、光線はダークパワーに弾かれてしまった。

「な、何っ⁉ イケメンビームが通用しない……！」

その時、ニャンミの体から迸っていたダークパワーは光の玉となって、ニャンミもろとも、夜空に舞い上がった。

「みんな、覚えてろ！ お前ら、必ずぶっ飛ばしてやるからな！」

ニャンミの怒声が響いたかと思うと、ダークパワーの光の玉は夜空の彼方へ飛び去った。

「ニャンミちゃん……」

マイメロが心配そうに呟いた。

ウサミミ仮面はマイメロの前に着地すると、

「私の役目はとりあえず終わったはずだ。早くキャンディを」

「分かった。ありがと、ウサミミ先輩さん」

メロディ・キャンディをウサミミ仮面に渡した。

ウサミミ仮面は背を向け、マスクをずり下げキャンディを口に入れると、

「さらばだ」

カッコ良くピンクのウサミミカーの後部席に飛び移った。

だが、スタートするはずのウサミミカーはなかなかスタートしない。運転席にいるはずのシツジ仮面が乗っていないのだ。ウサミミ仮面が、

「シツジ仮面、何をしている！　さっさとスタートさせろ」
「ちょっとお待ちを」
そう言うと、シツジ仮面は歌に耳打ちした。
「歌様、来週ビッグなニュースが日本を駆け巡ると思いますので、お楽しみに。では」
シツジ仮面はウサミミカーの運転席に乗り、猛スピードで走り去っていく。
「ウサミミ先輩さん、ばいば〜い」
無邪気に手を振るマイメロの横で、歌はシツジ仮面の言葉が気になっていた。
ビッグニュースっていったい……。
その後、ハリネズミくんのコロリンの術で今回の事件をなかったことにすると、ルミちゃんは、ゾウさん……ではなく王様を連れてマリーランドに帰っていった。
真菜に投げ飛ばされ、散々な目にあった駆のことを思い出すと、歌は泣きそうな気持ちになる。あの真っ直ぐに自分に向かって呼ぶ駆の声が、耳について離れない。
それと同時に思い出すのが、どうしようもない内容のメールだ。嫌いになったとしても、こんな別れ方になるなんて、歌は思ってもいなかった。
「ううん、もう忘れなきゃ」

未練とモヤっとした気持ちが半々の歌にとって、次から次へと事件続きの今は、辛い気持ちに浸っている暇もない。

平穏な三年間を過ごしていた歌たちの周囲は、マリーランドで起こった事件をきっかけに、一気に慌ただしくなっていた。

歌たちの世界が平和だから、マリーランドも平穏だったわけで、クロミたちの存在はマリーランドではスパイスのようなものだ。だが、大事になってしまえば、人間の世界も無関係ではない。

そして、ゾウさんとルミちゃんの誤解が解けて、王様とお妃様に戻って、マリーランドはドクロボウのことを除いては、一応いつも通りになった。

ニャンミの存在は気にかかっていて、何とか捜し出そうとしているのだが、テレビ局の騒動から、今はクロミといつも一緒にいるとは限らないのではないかと、歌もマイメロも考え始めていた。

実際、ニャンミはテレビ局から姿を消して以来、柊家には出入りしていなかった。

その間、ニャンミは一度マリーランドへ行った。勿論、ジャガー先輩への復讐のためである。だが、人間界との出入口になっているホルンから出ようとした途端、ホルンが鳴り出し、その周りの上空に浮かんでいたたくさんの気球が集まってきた。気球には、近衛兵たちが乗っており、武器を携えている。

ニャンミは最近、自分でも経験したことがない不思議なパワーが体に漲っていることは感じていたが、それがダークパワーだとは思ってもいない。

「近衛兵たちぐらいならぶっ飛ばせそうだが……あの二人がヨリを戻したとなると、話は別だよな」

あの二人とは、王様と王妃様である。二人が力を合わせて繰り出す、とてつもない力を以前見ているニャンミには、二人を倒せる自信はなく、もう少し警戒態勢が解かれるのを待つことにして、人間界へ戻っていった。

久しぶりにウサミミ仮面に会い、助けてもらったことで、歌は柊恵一のことが再び気になり始めていた。駆と別れた心の隙間に、絶妙なタイミングで恵一が入ってきたのだ。

ビッグニュースとシツジ仮面ことセバスチャンが言っていた通り、翌週になると、『天才ヴァイオリニスト柊恵一、凱旋コンサートのため来日』の記事が新聞やネットに流れた。

歌がいつものように、美紀、真菜と高等部の中庭で弁当を食べていると、柊潤が仲間に加わってきた。

「潤くん、知ってたんなら、教えてくれてもいいのに」

歌が不満そうに言うと、潤は急に不機嫌な表情に変わった。
「俺が知ったのだってネットからだよ。可愛い弟にも黙ってるんだから、ろくでもねえ兄貴だぜ」
だが、その表情は不仲だった以前のように険しくはない。
その潤も、デビューに向けて帰国した直後に、ニャンミが放ったドクロボウのお陰で、ひと騒動が巻き起こったばかりだ。その時は、マイメロのママの毒舌攻撃で、すぐに元に戻り、潤には大きな影響もなかった。
ただ、以前よりもギターの手入れを熱心にするようになった。ドクロボウのことなどすっかり忘れていたが、ギターへの愛着は覚えていたらしい。
演奏の方は、マイメロのママの言葉が身に染みたのか、胸に突き刺さったのか、一層真面目に体力作りに励んでいる。順調に集中力が伸びているようだ。
美紀は作詞を、真菜は体力作りの手伝いを、そして歌と琴は潤の応援と、潤のやる気が長く続くように、みんなが協力している。
クロミとバクも柊家の生活が快適なので、歌たちのいないところでは、潤にごく普通に接しているし、何より潤は過ぎたことを気にしないタイプだ。

　そして、潤から恵一の帰国を知らされたクロミは、なんだかそわそわしている。普段の調子と違い、オトメな女の子っぽくなることがあり、この日、久しぶりに柊家に戻ったニャンミはそんなクロミを苦々しく見ている。
　ニャンミの気持ちが、どんどん悪い方にエスカレートしていることを、クロミとバクは心配していた。ラブラブなカップルに限らず、幸せそうな人を見ただけで、ニャンミの嫉妬具合がハンパない。ドクロボウも、今は肌身離さずの状態で、クロミ達も気が気ではない。
　早くジャガー先輩のいるマリーランドに、ニャンミを連れて行かなければと思うのだが、なかなかチャンスが訪れない上に、クロミにとっては恵一もまた気になる存在だ。
　帰国すると知ってしまうと、何とか会いたいと思う気持ちを抑えきれないクロミだった。
　ヴァイオリニストとして海外でも有名になってきた恵一は、日本でのコンサートなど考えていなかった。しかし、日本のプロモーターが恵一を放っておくわけがなかった。
それに、有名になったことを誰よりも喜び、帰国を望んでいる人物がいた。
　柊　恵一、潤兄弟の母親と、ヴァイオリンの師である永代橋先生である。恵一が日本でのコンサートを了承したのは、母親の強い要望があったからだ。母親の要望には、子供の頃から逆らったことがない。母親が怖いとか、好きだからとかというのではなく、

断った後が面倒臭いだけである。
それに、母親には他に目的があった。
最愛の息子のために、自分のセレブ仲間を集めて、凱旋お披露目パーティーを開きたいのだ。
「めんどくせーなー」
恵一に先だって帰国して、毎日準備に励むセバスチャンを一瞥して、潤が呟いた。
「柊しゃま……」
歌たちがいない日には、潤の演奏時間を測ったり、トレーニングマシンでの体力作りを手伝ったりしているクロミだが、恵一のことを、つい考えてしまう。パーティーには表だって参加は出来ないが、ニャンミには内緒で、こっそり恵一の晴れ姿を見たいと思っている。
「柊先輩、カッコよくなってたね。コンサートも大成功間違いなしだよ」
「うんうん、楽しみだね～」
パーティーの招待状を手に、ネットに上げられた恵一の画像を見ながら、歌とマイメロが笑顔で話している。

「ホンマ、派手なイベント好きやな」
「本当にね。これでまた、潤くんのレコーディングの予定が伸びちゃうわ。私も作詞が進まないのよ」
真菜と美紀にも招待状が届いていた。言葉とは裏腹に、三年ぶりに恵一に会えることを、二人とも純粋に楽しみにしていた。
恵一の帰国はニュースにもなり、成田国際空港は海外からの追っかけや、日本で待ち構えている女性ファンでごった返していた。そして、恵一の姿が見えると、みんなが黄色い声を上げて前に押しかけてきた。
以前なら一瞥しただけで無視したに違いないが、色んな経験が恵一を大人にしたのだろうか。わずかに笑顔を浮かべ、手を振って通路を歩いていく。これが、潤だったら、もっとノリノリで、握手やサインもしたのだろうが、恵一にはこれでも精一杯だった。
「すごい人気だね～」
「ホントだね。柊先輩も日本でこんなに人気があるって知らないんじゃやない？」
マイメロを手伝って歌が一緒に夕食の支度をしている。夕方の芸能ニュースには、帰国した恵一の様子が映し出されている。奏は洗濯物を片付けながら映像を見て、
「少し無愛想に見えるけど、あれでも相当頑張ってると思うわよ」
手を振る恵一を見て、同い年で、高校まで一緒だった奏が苦笑しながら言う。

「柊先輩はやっぱりカッコいいね。潤先輩もデビューしたらあんな風になるのかな」
お風呂から出てきた琴は、部活の疲れもあるのか、ソファに寝転がりながらテレビを観ている。招待状は取材で家を空けている雅彦以外の全員に届いている。恐らく手配したのは、セバスチャンか潤だろう。
「どんなドレスにしようかしら」
奏がファッション誌を開いて、歌と琴が覗き込んだ。三姉妹ともに、パーティーの衣装やヘアスタイルが話題の中心になった。

パーティーは恵一が札幌での帰国初日のコンサートを終えて、柊家に戻った夜に開かれた。
当日、歌たちが柊家に到着すると、すでに大広間は人、人、人だった。
今日の司会役を務める永代橋先生は派手なパーティー用の衣装をバッチリ着こなして、恵一の才能を見出した自慢話をしようとした時、大広間の照明の光が消え、舞台に登場した恵一がスポットライトを受けて浮かび上がった。
永代橋先生の長い話を聞きたくない参加者たちは一斉に拍手を送る。
永代橋先生が渋々マイクの前から離れて、拍手の輪に加わった。

恵一は、現在ユーロ圏内でクラシック音楽部門売り上げナンバー一の自分のCDアルバムのオープニング曲を弾き始めた。もちろん、自分が作曲した曲だ。

その美しい音色とイケメンな顔立ちに、独身女性ならずとも、うっとりと見つめている。

クロミもバクの背中に乗って、屋敷の外からじっと恵一を見つめている。もちろん、瞳はハートになっている。バクは最近目を離すといなくなってしまうニャンミのことが気になっていた。今日は一緒にいるのだが、恵一を見つめるクロミの背中に、きつい視線を送っている。

恵一の曲が終わると、潤がギターを弾きながら歌った。数日間で見違えるほどに上手くなっている。大勢の前だとテンションも上がり、いい演奏が出来るのは、ライブにうってつけの性格だ。

一曲演奏し終わると、潤は恵一と並び、握手をした。会場内からまた拍手が沸き起こる。母親が嬉しそうな顔を隠そうとせず、挨拶し、いよいよパーティーの開幕だ。

舞台には室内楽の演奏者がセッティングを始め、次から次へと料理が運ばれてくる。有名モデルや女優、俳優、財界人など、いわゆるセレブが大勢集まっていて、大豪邸の大広間で歌は恵一の姿を見つけるのも難しいくらいだ。

「ふうう～。すごい人だね、歌ちゃん」

「たぶん、あの人だかりの中心に、柊先輩がいると思うんだけど……」
マイメロが歌のバッグから、顔を出した。歌は人混みを抜けてバルコニーに出ていた。テレビで見たことのある有名人が多く、奏や琴は積極的にファンアピールをしているが、傷心の歌は思った以上に興味もわかず、その様子を遠巻きに見ていた。
広いバルコニーに風が通り抜け、初夏とはいえ、広間の中よりも涼しく感じる。
「気持ちいいねえ～、歌ちゃん」
「ホントだね」
歌のカールした髪が、風に揺れる。その横顔に恵一がハッとなって、人混みをかき分けながら歩み出した。
せっかく招待されたのだからと、歌がもう一度恵一のところまで行こうとすると、
「久しぶりだね……」
恵一が歌のところまで辿り着き、手を取った。恵一も歌のことを捜していたのだが、先に会った奏にバルコニーを指差されて驚いた。最後に会ってから三年も過ぎている。
歌は活躍している恵一をネットなどで見る機会があったが、恵一の方は三年前の印象のままだ。大人びてスタイルも良くなった歌を、奏に言われるまで気づかなかった。
歌はマイメロをバルコニーに残し、恵一に手を取られ、広間のダンスの中に加わった。
「キレイになったね、夢野くん」

「……そんな……」
歌ははにかんで下を向いた。恵一からそんなセリフを聞けるとは思わなかったのだ。
恵一はパリ仕込みなのか、社交ダンスのステップもよどみなく、歌をリードしている。歌も最初は慣れないステップに、一生懸命ついていく感じだったが、ようやく周囲に注意を払う余裕が出た。
歌たちの他にも、何組かが中央でダンスを踊っている。巧みなリードのおかげで体も軽くなった気持ちがして、まるでお姫様になったみたいだ。
美紀や真菜もその様子を見て、気晴らしになって良かったと思う反面、駆とのことが完全に吹っ切れていないだけに、歌を心配している。
「やっぱり歌はまだ柊先輩のこと、忘れてなかったのね」
疲れ果てて休んでいる潤を見舞った二人が広間に戻ってくると、歌と恵一のダンスが、ちょうど始まったところだった。
「駆がかなりマイナス評価になってるしな。こんど歌抜きで駆に問い質してみよう思うとるんや」
「そうねー、ちょっと不思議な展開よね。まあ、歌が柊先輩とうまくいくなら、それでいいけど」
二人の心配通り、歌は駆との行き違いで、暗くなっていた気持ちが和らぎ、恵一に尋ね

られるまま、そのいきさつを話していた。
「そう……彼とはケンカ別れをね」
恵一は歌の話を信じ、駆に怒りを感じたが、相変わらずの無表情を崩さない。また、ここで歌と一緒に駆を悪く言う立場でもない。恵一の表情は変わらないものの、寂しそうな顔を見せまいと、ダンスに付き合ってくれている歌を、いじらしいと思っていた。
そこで、ダンスの曲の終わり際に、歌を都内のレストランに誘った。
「気晴らしに美味しいものでも食べようか。いいレストランを予約しておくよ」
三年前の歌は幼さが残る感じだったが、目の前にキレイに成長した歌を見ると、その寂しげな瞳と表情に、つい惹かれてしまっていた。日本に来たもう一つの目的、クルミ・ヌイを捜すことを忘れそうになるくらいに。
「キイーーッ、またしてもあの小娘だよ！　あたいの柊しゃまにくっつきやがって」
その様子を物陰から見ていたのはクロミたちだ。
「あれは社交ダンスゾナ。くっついているわけではないゾナ」
「分かってるよ！」
クロミがバクを張り倒した。柊家の外まで飛んでいったバクを見て、
「リーダーはあの男に惚れてるんですかい？　そしたら……」
と、ニャンミはダークな笑みを浮かべた。見ると、ドクロボウをすでに手にしている。



「いやっ、そういうわけじゃ……」

ダンスをしている人も多く、そもそも人数が多すぎる。恵一を狙っても失敗する確率も高い。何より、もう無駄にドクロボウを使う余地などないはずだ。

（いざとなったらアレで）

クロミはマリーランドの秘密の部屋にあるメロディ・キーを思い出していた。ドクロボウが威力を発揮するには、相手がラブラブな状態でないと意味がないことも分かってきたのだ。今のままでは歌に分があるが、下手に割りこんで、ニャンミにドクロボウを使わせるわけにはいかない。恵一にも危険があるかもしれない。

「ここじゃあ、人が多すぎだよ。まだチャンスはあるからさ」

と、ニャンミに話し、思いとどまらせた。

曲が終わり、恵一と食事の約束をして再びバルコニーに戻ってきた歌は、頬を上気させていた。恵一はまた色んな人に誘われて、ダンスをし始めた。

人数は多くて少し疲れるものの、パーティーという非日常空間は、傷心の歌をロマンティックな気分にさせるには効果抜群だった。駆との付き合いの中では、決してないシチュエーションだから無理もない。

バルコニーで、歌がマイメロを抱きしめ、甘いムードに浸っているところを、様子を見ていた美紀と真菜がやってきた。恵一との会話を教えると、

「なんだかいい雰囲気だったけど、デートね、デートなのね。新しいラブの予感？」

「駆も悪い奴には見えへんけど、あのメールはあかんわ」

間違いなく、メールは駆からのものに他ならない。美紀はメールのセンスのない文章にガッカリし、真菜はヘタレな姿に怒っていたので、歌に同情的だ。

今の二人には冷却期間が必要だと、親友たちは思っている。

「なんだかお腹すいちゃったね。まだ料理残ってるかな」

恵一にも会えて、気持ちも落ち着いた三人とマイメロは料理を取りに会場に戻った。人数は多かったが、料理やデザートも十分用意されていて、奏や琴とも合流し、それぞれが料理や飲み物を選んで楽しく過ごしていた。

ちょうどその頃、駆が柊家に到着していた。

「申し訳ありません、恵一坊ちゃまから固く言われております」

恵一の執事であるセバスチャンが、門の前で首を振った。

「じゃあ、潤を呼んでくれよ。潤の許可があればいいだろう」

駆はこのパーティーに歌が来ることを潤から聞き、招待状がないことを話すと、
「オッケー！　着いたらオレのところに電話くれれば、すぐに入れてやるよ」
そう言われ、寮の先生に急用だからと強引に許可を取り、駆け付けて来たのだ。
しかし、すでに恵一が歌から事情を聞いた後だったのが悪かった。恵一は、駆が歌を手ひどく振ったことを怒っていて、万が一、駆が来ても中に入れないように、セバスチャンに言いつけていた。
「潤様は、すでにお部屋でお休みの様子です」
「嘘だろ！」
それは嘘ではなかった。今は恵一とは不仲ではない潤は、先ほどの演奏に相当力を入れていた。恵一に聞かせたい気持ちもあったのだろう。周囲の反応も良かったし、演奏しまくった潤は、すっかり集中力をなくしていた。
パーティーが始まった直後は、頑張って会場にいたのだが、ついに体力切れして倒れてしまった。当然、駆の電話にもメールにも出ない。
（……使えねえ……）
頼みの綱を失い、駆は仕方なく諦めたふりをして門から離れるが、セバスチャンが家の中に入るのを見届けてすぐ、舞い戻って門扉をよじ登った。
「歌、絶対誤解を解いてやるからな」

軽々と第一の関門を難なく潜り抜けた駆だったが、間近に何かが近づいて来る気配を感じて後ずさりした。

「ぎゃあああーー！」

次の瞬間、何かが足に触れ、駆は慌てて門まで戻った。

「失礼な男ゾナ」

「あたいだよ。忘れちまったのかい？」

「リーダー、こいつ、結構ヘタレですね」

それはクロミ、バク、ニャンミだった。張り倒されて飛ばされたバクが駆を見つけ、クロミたちに教えたのだ。

「お前たち、悪口は相手がいないところで言え！」

駆が怒って門から離れ、クロミたちに近づこうとした。ところが、

「ぎゃあああーーっ！」

またも駆の叫び声を聞き、クロミたちが門のところに行くと、駆は鉄製の門扉にしがみついたまま、パニくっていた。

「なんだよ、パーティー会場に忍び込むんじゃなかったのかい？」

「わわわーーっ！」

もはや声になっていない。何事かとクロミたちが目を凝らすと、

「あーーーっ！」

暗闇に光る四つの目。柊家の番犬ならぬ番ワニ、地獄のみっちゃんと横須賀のよっちゃんだった。つい最近も間近で見たばかりクロミたちだったが、暗がりのせいか、なんだか一回り大きくなったように見える。

「駆！　早く潤を携帯で呼び出すんだよ」

それはすでに試し済みだったが、震える手でリダイヤルする。当然出ない。潤は、きっと朝まで目を覚まさないだろう。

片手は門扉にしがみつき、片手はスマホを持っている。両手を離せば下に落ちて、大きく口を開けて待ち構えているみっちゃんとよっちゃんに食べられてしまうに違いない。

かなりカッコ悪い姿だった。

「ちっ、しょうがない、今日は諦めるよ」

「ほんっと、情けない男ですね、リーダー」

そういうクロミとニャンミも、バクを盾にして後ずさりしている。当然、クロミたちにも懐いていない上に、駆を助けたことで敵に回すと、これから厄介だ。

ひとたび番ワニとして発動されたみっちゃんとよっちゃんは、キッチリと仕事をするタイプだった。味方になってくれるとしたら、潤しかいないが、その潤もあてにならない今、駆はすごすごと退散するしかなかった。

パーティーが終わり、招待客がぞろぞろと柊家から出て行く。クロミは全員が帰ったことを確認すると、バクを呼んだ。

「マリーランドに行くよ」

「なんの用ゾナ？」

クロミは『シーッ』とバクの耳を引っ張り、ニャンミを見た。よく眠っているが、傍らのドクロボウが何だか不気味だ。

「あたいが行くっつったら行くんだよ！」

クロミは小さな声で怒鳴ると、無理やりバクの背に乗り、しぶしぶバクが飛び上がった。

「いったい何が目的ゾナ？」

マリーランドに到着し、お城の前に来てバクが尋ねると、

「さ、入るよ」

相変わらずザルのような警備を潜り抜け、修復中の秘密の部屋に入り込み、クロミはメロディ・キーを盗み出した。

「よしっ、じゃあ、戻るよっ！」

再びバクをどやしつけると背中に乗り込んだ。
「人使いが荒いゾナ。これからバイトゾナ」
明け方に戻って来ると、バクは新聞配達のバイトに出かけていき、クロミは何食わぬ顔をしてニャンミのそばで眠った。オトメな自分を知られたくなかったからだが、ニャンミは寝たふりをしていただけで、クロミとバクの会話を聞いていた。
（リーダーがリーダーなら、バクもバクだよ。よくも、あたいをのけ者にしたね）
もう、昔のニャンミの面影はなかった。

クロミはバクに用意させ、人間になる……クルミ・ヌイになるための儀式を始めていた。
燃える八本のろうそくを立てた魔法陣の中央に、メロディ・キーを持って静かに進み出た。
これから、クロミが行う儀式は、いわゆる黒魔法だ。
自分で自分にかける魔法で、八本のろうそくが燃え尽きてしまうまでに、魔法をかけた本人が吹き消さないと、自分が一番なりたくないものに一生なってしまうのだ。クロミの場合、バク族になってしまう。

「クロミ様、ろうそくの炎が消えるのは二時間後ゾナ。絶対消える前に戻ってきて、自分の息で消すゾナよ」
クロミは無言で頷くと、メロディ・キーを翳して、呪文を唱える。
「ラビトノメユケラヒ」
メロディ・キーを振り下ろすと、爆発が起き、その衝撃にバクが吹っ飛んだ。
「ク、クロミ様……！」
壁に激突しながらも、バクが目を擦ると、すでにクロミの姿は消えていた。

恵一の都内でのコンサート会場には、いつもより念入りにオシャレをしている歌が観客席に座っていた。
黒魔法でクルミ・ヌイに変身したクロミは、恵一が歌のために予約した高級レストランに先回りすべく、小走りに走っていた。黒髪を高い位置で二つに縛り、真っ赤なバラの髪飾りに、赤いルージュが似合う。黒を基調としたドレスで、ミステリアスな美少女というイメージだ。恵一はその存在がクロミと気づかず、自分に好意を寄せる女性として、ずっと気になっていた。
（この姿なら、柊しゃまもあたいを選んでくれるはずだよ）

クルミ・ヌイの足は軽やかで、その顔も自信に溢れていた。

駆は相変わらずタイミングを外しまくり、歌の心は駆から離れていくばかりだ。滅多に会えない恵一なのに、こんなところで歌に奪われてしまっては元も子もない。

一方、バクは上空でニャンミの姿を捜している。クロミが出かけようとした時に、すでにニャンミはいなかった。ニャンミがダークパワーの影響を受け始めたと、クロミたちは気づいていたので、そっちを解決するようにバクはクロミに進言したのだが、当然ながら受け入れられなかった。

歌から恵一を引き離すことが、クロミの最優先事項になっている。そして、ドクロボウの威力がどんどん強くなっている今、ニャンミが嫉妬にかられてドクロボウを射て、それが成功したとしても、誰であれ、単に仲が悪くなる以上に恐ろしいことが起きると、想像がついていた。

やがて、レストランの前に、高級車が止まり、中から恵一にエスコートされた歌が出てきた。

「久しぶりね」

「……き、君は！」

レストランの入り口に、突然現れたクルミ・ヌイに、恵一は動揺した。

「柊先輩、どうしたんですか？」

歌が恵一の腕を引っ張り、心配そうに見ている。目の前にはクルミ・ヌイが小悪魔的な微笑みで恵一に歩み寄って来る。

恵一はクルミ・ヌイと歌を交互に見て、激しく悩んでいた。

（クルミ・ヌイとこんな時に会うなんて……だが、今は夢野くんと……）

混乱のあまり言葉を失っている恵一の前に、突然ニャンミが現れた。

「ニャンミ！　どうしてここに？」

クルミ・ヌイが振り返ると、ニャンミは怒りの形相でドクロボウを構えている。

「そんなことはどうでもいいよ！　二股かけるなんて、最低の男だよ！」

と、言うが早いか、恵一に向けてドクロボウを射る。

クルミ・ヌイが恵一を庇うように走り込み、ドクロボウは首飾りの黒い宝石に当たった。

「柊様！」

「ああーっ！　なんということゾナ！」

急降下したバクが駆け寄ると、クルミ・ヌイの表情が険しくなり、ゴスロリ調のドレスが鋼のドレスに代わっていく。

「な、何なんだ、これは⁉」

「王様がテレビ局で大暴れした時と同じです！」

　歌は以前パーティーの席で、恵一とクルミ・ヌイが踊っている時、彼女にクロミと同じ尻尾が生えていたり、その影がクロミそっくりだったりしたことから、クルミ・ヌイがクロミであるのは知っていた。だが、今はそれを伝えても、意味がない。

「なんだいなんだい、デレデレしやがって！　あたいだって、ずっと柊様を好きだったのに！　この小娘がーーっ！」

　クルミ・ヌイが回転すると、鋼のドレスの一部がナイフになって、歌に襲いかかる。悲鳴を上げ逃げ回りながら、歌は次々と飛んで来るナイフを何とかかわす。

　呆然としたまま立ち尽くす恵一が取り残される。が、次の瞬間、クルミ・ヌイはクルリと方向転換し、恵一を睨みつけた。

「元はと言えば、柊様があたいを選んでくれないからじゃないかーーっ！」

　今度は恵一に迫ってきた。

「君、何を言ってるんだ⁉」

　クルミ・ヌイがクロミだとは知らない恵一は、まったく理解出来なかった。

　バクはおろおろとするばかりで、ニャンミはその様子を楽しそうに見ている。すっかりダークパワーの支配下にあった。

　クロミが恵一に方向転換した隙に、歌はスマホでマイメロを呼び出し、

「マイメロ——っ、助けてーーっ！」

わずかに残ったクロミの心が、罵倒はするものの恵一に直接攻撃をせず、その代わりとばかりに、今度は髪飾りの赤いバラの花びらを投げると、ミサイルとなり、レストランの一部を吹っ飛ばした。
そこへ、こうもり傘で上空から到着したマイメロが、素早くメロディ・タクトを出し、
「メロディーマーク！　くるくるシャッフル！」
空中にメロディ・コンパクトが出現すると、蓋がひとりでに開いて、二十枚ほどの裏返しのカードが飛び出してきて、円を描きながら回り出す。そして、回転が止まると、一枚のカードがクルリと飛び出してくる。
マイメロのパパのカードだ。
「あっ、パパ、クルミ・ヌイちゃんを元通りにしてね。おねがい♥」
瞬時に現れたマイメロのパパに、マイメロが可愛くお願いした。それに気づいたクルミ・ヌイは、マイメロのパパのところにやってくる。
「まあまあ、クロミちゃん、落ち着いて」
「何、のんびりしたこと言ってんだよ！　あたいの怒りは収まらないよ！」
マイメロのパパは早くも後ずさりしながら、
「事情は何となく分かったが、ここは冷静になって、二人の意見に耳を傾けてみようじゃないか。案外ちょっとした誤解だったのかもしれないよ」

「はあ〜〜？　何が誤解だっていうのさ！　もう、あたいの心はズタズタだよ！」
ますますクルミ・ヌイに圧倒され、マイメロのパパはずるずると後退していく。
「マイメロのパパ、大丈夫なの？」
歌が不安そうにマイメロに尋ねると、
「うーん、マイメロ、分かんない」
と、可愛く首を傾けた。そんなのんきなことを言われても、マイメロ頼りなだけに、歌も困り果てる。
クルミ・ヌイが再び回転して、ナイフ攻撃を仕掛けてきた。
「パパ、頑張って。も〜っとおねがい♥」
パパは頬を赤らめると、
「パパは頑張るぞ！」
パワーアップしたマイメロのパパは、さらに説得するのかと思いきや、ただ逃げ足が速くなっただけだった。
ちょこまかと逃げ回るマイメロのパパに、ナイフは空を切り、地面や塀に突き刺さるばかりで、クルミ・ヌイのイライラは募るばかりだ。
その間にも、騒ぎを聞きつけたマスコミ陣が集まってきており、遠巻きに二人の追いかけっこを報道している。

「もう、あんたのベタなお説教はこりごりなんだよ！」
クルミ・ヌイはサッと両手をクロスさせると、突然壊したレストランの瓦礫が宙に浮かんだ。
「逃がさないよ！」
そう叫び、クロスした両手を振り払うと、瓦礫は逃げるマイメロのパパの先々に飛んで行き、逃げ場を消していく。
すっかり逃げ場を失ったマイメロのパパは、不敵な笑みを浮かべて近づいてくるクルミ・ヌイにおしっこをチビりながら凍りついた。
だが、クルミ・ヌイがマイメロのパパにミサイル攻撃を仕掛けようとした時だった。
「お待たせパオーン！」
上空から聞き覚えのある声が響いてきた。
マイメロたちが上空を見上げると、光る物体が急速に接近してきた。それは気球となり、中には王様とルミちゃんとハリネズミくんが乗っていた。
二人は、マリーランドの城のテレビで、この騒ぎを知り、急遽駆けつけてくれたのだ。
「あっ、王様と王妃様だあ〜」
マイメロが喜びの声を上げる。
「マイメロのパパ、皆さん、私たちが駆けつけたからにはもう大丈夫ですよ！」

気球から飛び降りた王様とルミちゃんは、クルミ・ヌイの前に立ちはだかった。
その隙にマイメロのパパは何とか逃げ出すことが出来た。
「なんだよ、二人とも！　あんたたちから先に、木端微塵にしてやるよーーっ！」
クルミ・ヌイがバラの花びらを二枚剥ぎ取り、二人に投げようと構えた時を逃さず、
「行くぞ、ルミちゃん！」
「はい、王様！」
二人はヒシッと抱き合うと、サッと握り合った手をクルミ・ヌイの胸に向けて叫んだ。
「ラブラブビーム！」
今が絶好調の、マリーランド最強のラブラブカップルによる、ラブラブビームが放たれ、クルミ・ヌイの黒い宝石の首飾りを直撃した。
クルミ・ヌイが持っていたミサイルが大爆発を起こし、黒煙が周囲にもうもうと広がった。
やがて、黒煙が消えると、クルミ・ヌイの姿はなく、その胸に輝いていた首飾りの黒い宝石が落ちており、宝石にはドクロボウの矢が突き刺さっていた。
王様はすぐに矢を抜き、折った。
「やったーっ！」
歌がマイメロとハイタッチして喜ぶ。ようやく落ち着いた恵一も、歌の隣に来ていた。

「クルミ・ヌイくんはどこに……？」

　クルミ・ヌイはバクの背中に乗り、目を回していた。
　バクは光速のスピードで爆発寸前にクルミ・ヌイを救出して、そのまま飛び去り、柊家の自分たちの部屋に飛び込んだ。
「クロミ様、気絶してる場合ではないゾナ！　目を覚ますゾナ！」
　クルミ・ヌイの頬を平手で叩き、目を覚まさせる。
「痛いじゃないか！　バクのくせに何すんだよ！」
　バクを殴ろうとして、ハッとなった。
　なんと自分の手がバクの手のように太くなっていた。
「ひぃいいい――っ！」
「そこまで驚かなくても……」
　バクは複雑な思いにかられたが、すでに七本のろうそくは消えており、最後の一本も風前のともしびとなっていた。
「って言ってる場合じゃないゾナ！　クロミ様、早くろうそくを消すゾナ！」
「お、おおっ！」

クルミ・ヌイは慌てて最後のろうそくの火を吹き消すと、煙と共に元のクロミの姿に戻ることが出来た。
バクは安堵の息を吐くクロミの手を引っ張り背中に乗せると、叫んだ。
「クロミ様、しっかり掴まってるゾナよ！」
クロミの返事を待たずに、バクはまた光速のスピードで部屋を飛び出して行った。
二人が先程のレストランの前に到着した時、ニャンミはマイメロ、歌、王様、ルミちゃん、そして、イマイチ事情が飲み込めぬ柊恵一に取り込まれていた。
すでに、ハリネズミくんが不思議な術であるコロリンを行い、レストランは元通りになっており、マスコミ陣の姿も消えていた。
クロミは、恵一のところに駈け寄るかと思いきや、バクとともにニャンミに詰め寄った。
「ニャンミ！　もうこれ以上ドクロボウを使うんじゃないよ！」
自らドクロボウのパワーを浴び、巨大で邪悪な心に支配されることの恐ろしさを、身を以て体験したクロミが説得しようとした。
「そうゾナ！　クロミ様はニャンミ達のリーダーゾナ！　そのリーダーに向かってドクロ

ボウを射るとは、正気の沙汰じゃないゾナ！」
　バクも一緒にニャンミに迫っていく。
「さあ、ドクロボウを渡すんだよ！」
　王様とルミちゃんもニャンミに近づき、
「わしが預かって、絶対に持ち出せないところにしまっておくことにしよう」
「そうですよ、ニャンミ。分かったでしょう？　ドクロボウはとても危険なアイテムなのです」
　二人も説得しようとするが、ニャンミは後ろ手にドクロボウを持ったまま、邪悪な笑みを浮かべた。
「ニャンミ、気を確かにするんだよ！　ジャガー先輩のことは、あたいたちがぶん殴ってやるからさ！」
　クロミが叫び、ニャンミに近づこうとして、足を止めた。
　ニャンミの体から、凄まじいダークパワーのオーラが天まで焦がすように湧き上がったのだ。
「ニャ、ニャンミ……!?　早くこっちへ来るんだよ！」
　クロミが手を差し伸べるが、ニャンミは鼻で笑い、
「王様も王妃様も、いちゃいちゃしやがって！　リーダーだって、おんなじじゃない

か!」

その声は、ニャンミの声ではなく、ダークパワーの精だったダーちゃんの声に似ていた。

「ニャンミ、落ち着くゾナ!」

歌はマイメロをしっかり抱きしめるが、その手も震えている。

「もう、誰の指図も受けるもんか!」

ニャンミがドクロボウを高く掲げ、真上に矢を射った。

「な、何をする気じゃ!?」

王様が尋ねる前に、ニャンミは一同の頭上高くまでジャンプしていた。

そして、真っ直ぐ下に落ちてきたドクロボウに向かって、自分の胸を差し出した。

ニャンミの胸に矢は刺さった。

「ああ――――っ!!」

忽ち、矢はニャンミの胸に吸い込まれて、代わりにドクロマークが浮かび上がった。

一同の前に、着地したニャンミは、獣のような悪魔のような雄叫びを上げると、両手をクロスさせ、自分の肩を掴んだ。

「ニャ、ニャンミ……!?」

クロミは愕然となりながら、ニャンミは今まさにダークサイドに堕ちたと直感した。

ニャンミの顔はみるみる険しくなり、体の表面の血管が波打ちながら盛り上がっていく。

「うおおおおおお――――っ!!」

ダークパワーが血管を通して、体の隅々まで行き渡る。

猫族なのにカラスの羽のようなものが体全体を覆い尽くしながら、みるみる巨大化していく。悪魔のような先が尖った尻尾が急速に伸びていく。

さらに、背中の肩甲骨の辺りが隆起したかと思うと、瞬時に大きな翼が二つ、背中の肉を突き破って出現した。

「き、危険じゃ！　みんな、この場から離れるのじゃ！」

王様の叫びに、マイメロや歌たちが一斉に逃げ出そうとしたが、遅かった。

ニャンミが大きな翼をバサッと羽ばたかせた。

強烈な突風が起こり、一瞬のうちに全員が遥か彼方まで吹っ飛んでいった。

ニャンミは勝ち誇ったように笑うと、また両翼を羽ばたかせて上空へ舞い上がった。

第五章　地球が滅びないとイイナ！



寮のテレビで、クルミ・ヌイが暴れているのを観ていた駆とフラットくんは、居てもたってもいられなくなり、寮長に無許可で夢ヶ丘へ向かっていた。
乗客もまばらな電車の中で、二人は座席に座っていた。
「テレビには歌ちゃんもマイメロも映っていた。駆、無駄かもしれないけど、歌ちゃんに連絡を取ってみろ」
駆は頷くと、素早くシャツの胸ポケットからスマホを取り出した。
その瞬間、スマホの待ち受け画面にドクロマークが浮かんでいたのを、駆は見逃さなかった。
右手で目を擦り、待ち受け画面を見ると、ドクロマークはなかった。
「？　……」
「どうしたんだ、駆？」
フラットくんが尋ねた。
「目の錯覚かもしれないが、今一瞬だけ待ち受け画面にドクロのような顔が見えたんだ」
「何だって⁉」
フラットくんは駆から素早く駆からスマホを奪い取ると、その待ち受け画面を睨みつけた。
「じ〜〜〜〜っ！」

睨み続けていると、スマホの画面に汗のような水滴が浮かび上がった。
「そういうことか！　駆、ゴールデンウィークに、歌ちゃんとデートしている時に、クロミたちに邪魔されたって言ってたよな？」
「ああ、ニャンミとかいうクロミーズ5のメンバーが、いきなり歌に矢をぶっ放しやがったから、俺が盾になったんだ」
「それで、矢はどうなった？」
「俺の胸に当たったけど、不思議なことに痛くも痒くもなく、矢は消えたよ」
「その時、このスマホは今みたいに胸ポケットに入ってなかったか？」
「ああ、入ってた！」
「やっぱり！　駆、このスマホ、ぶっ壊わすぞ！」
「ええ〜〜っ⁉」
驚く駆に構わず、フラットくんはスマホを床に思いきり叩きつけた。
「ああ……そのスマホ、めちゃくちゃ高かったんだぞ！」
駆がスマホを拾おうとした時、待ち受け画面に目を回すドクロマークが現れた。
「こ、これは⁉」
「駆、早く踏み潰せ！」
「で、でも……」

「いいから早く！」
フラットくんの気迫に負け、駆は思いきりスマホを踏みつけた。
その瞬間、足の下でスマホが閃光した。
「なっ……」
すぐ閃光が消え、駆が足を上げると、画面が割れグチャグチャに壊れたスマホと、折れた先がドクロの矢が現れた。
「な、なんだ、この矢は!?」
「ドクロボウの矢だよ。この矢のせいで、駆が打った謝りのメールは、恐らく歌ちゃんに届いた時には、とんでもない文面に書き換えられてたんだと思う」
「何っ!?」
「歌ちゃんからのメールも、駆を怒らせるような文面に書き換えられていたに違いない」
「そうか……そういうことだったのか！　歌に直接会いに行った時、ストーカー呼ばわりされたのはそういうことだったのか！」
駆は歌との行き違いはすべてドクロボウのせいだったのだと納得した。
電車が夢ヶ丘駅に到着し、二人はクルミ・ヌイが暴れていている高級レストランに急いだ。
あのレストランには一度も入ったことはなかったが、前は通ったことがある。いつか歌

と一緒に行ってみたいと思っていたので、駆は場所を知っていた。
二人がレストランの前に到着すると、何事もなかったようにレストランは営業していた。
二人は窓の外から店内を覗いたが、歌たちの姿はなかった。
「とりあえず、歌ちゃんの家に行ってみよう！」
「おおっ！」
駆はフラットくんを掴むと、世界記録も狙えるのではないか思われるほどのスピードで夢野家を目指して走った。

ニャンミに吹っ飛ばされたマイメロや歌たちは、運よく夢野家の隣の垣根や木の枝に落ちたため、命に別状はなかった。
王様の命により、全員歌の家に集められた。
「いったい、なんなの？」
アルバイトや部活で、今回の騒ぎを知らない奏と琴が驚きの声を上げた。
さらに、歌から連絡を受けた美紀はピアノちゃんを連れて、真菜は柊潤とセバンスチャンとセバスタン兄弟を連れて、集まってきた。

そして、最後に、駆とフラットくんが駆けつけた。

「駆⁉　どうして、あなたがここに来るのよ？」

「お前が心配だからに決まってるじゃねえか！」

駆が真っ直ぐこっちを見て叫んだ言ったため、歌は何も言えなくなった。

「歌ちゃん、これを見てよ！」

フラットくんが手に持った、壊れた駆のスマホと折れたドクロボウの矢を見せた。

「ド、ドクロボウの矢じゃないか！」

クロミが叫んだ。

「駆のスマホに、この矢が刺さっていたんだよ」

「！　――」

歌をはじめ、みんなが驚きの表情を浮かべた。

「ほな、歌を罵倒したメールや、裸の写真を送れとかいうエロメールも、すべてその矢のせいだったんか？」

真菜の言葉に、駆とフラットくんは大きく頷いた。

「マイメロ、最初からそうだと思った」

「嘘言うんやない！」

真菜の回し蹴りを喰らい、マイメロは壁に激突して目を回しながら言った。

「……真菜ちゃん、ごめん」
やっぱり嘘だった。
だが、そのお陰で、緊張していたみんなの顔が和らいだ。柊恵一だけは相変わらず冷めた表情のままだが。
その時、夢野家の電話のベルがけたたましく鳴り響いた。
「はい、夢野ですが」
奏が電話に出ると、南米のアマゾンに取材旅行に行っている父親の雅彦だった。
「奏か！　今アマゾンではとんでもないことになってる！」
「とんでもないこと？」
「『滅びの雲』が発生して、上空を覆い出してるんだ！」
「『滅びの雲』ですって⁉」
奏の声に、みんなが電話口に集まってくる。
「ま、まずい！　雲が……雲が……うわあああ……マイメロ、後よろしく……」
その途端、電話が切れて、ツーツーツー……という音が虚しく響いた。
「ニャンミの仕業に間違いありません！」
「どこかで、『滅びの雲』を発生させて、地球を覆い尽くそうとしているんだわ」
美紀が不安そうに呟く。

「どこかって、どこ？」
琴が尋ねた。
「それは……」
美紀が考えあぐねていると、駆が吐き捨てるように言った。
「あそこしかねえだろ！　夢ヶ丘で一番高い建物！」
全員が顔を見合わせて、叫んだ。
「電波塔！」
そこは、かつてダークパワーの精ダーちゃんに憑りつかれた柊恵一、潤がダークパワーの力で地球やマリーランドを滅ぼそうとして、『滅びの雲』を発生させた場所だった。
全員が夢野家から飛び出して、夢ヶ丘の中心部にある電波塔を見ると、先程よりさらに巨大化したニャンミが塔の天辺で高笑いをしていた。
その笑い声は、地獄の底から響いてくるような不気味なものだった。
「このままでは、『滅びの雲』がこちらに迫って来るのは時間の問題じゃ！　それまでに、ニャンミを倒さなければ、マリーランドも地球も滅んでしまうゾウ！」
王様の言葉に、緊張した面持ちのルミちゃんは頷き、
「そんなことは何としても阻止しなければなりません！　皆さん、協力してくれますね⁉」

全員が大きく頷いた。

王様、ルミちゃん、マイメロ、フラットくん、ピアノちゃん、ハリネズミくんは気球で、クロミはバクに乗って、残りの者たちは走って電波塔へ急行した。

そうしている間に、『滅びの雲』は急速に地球の半分を覆っていく。

それは、NASAの衛星を通じて、米国のペンタゴンのモニターに映し出されている。危険度を表示しているパネルの針がぐんぐん跳ね上がっていき、『注意』『警戒』『ヤバツ』『マジヤバ』『激ヤバ』を超えて、最高レベルの『無理』に達した。恐らく、『滅びの雲』が建物の上空を覆い尽くしてしまったのだろう。緊張していた監視員たちの体から魂が抜けていく。

「マイメロちゃんたち、頼んだよ～」

何度も『滅びの雲』を経験していた監視員たちは、マイメロたちに地球の運命を委ねて、倒れていった。

マイメロたちが電波塔に到着した時、先に到着していたクロミとバクが、電波塔の天

辺に立っている巨大化したニャンミを説得していた。
「ニャンミ！　ダークパワーなんかに負けるんじゃないよ！　クロミーズ５のサブリーダーなら、ダークパワーを突き破って出てくるんだ！」
だが、クロミの声はニャンミの心には届かない。
「黙れっ！　もはや、誰もあたいを止められないよ！　このまま『滅びの雲』が地球を覆い尽くせば、人間は夢を失い、マリーランドも滅亡する。にっくきジャガー先輩ごとね！　お前たちもすべてが滅びるのを指をくわえて見ていなっ！　わっはっはっはっ」
「あたいの命令を聞かないんなら、実力行使しかないね！　バク、突っ込むんだ！」
「了解ゾナ！　地球もマリーランドもクロミ様とバクが守るゾナ！　ゾナー―ッ！」
クロミを背中に乗せたままバクは光となって、凄まじいスピードで巨大化したニャンミに突っ込んでいった。
だが、ニャンミの尻尾が竜のごとくうねると、強烈な電撃を二人を浴びせた。
「ぎゃあああ――っ‼」
「ゾナ――ッ‼」
忽ち、二人は黒焦げとなって、地面に落下した。
「クロミ！　バク！」
駆が駆け寄り受け止めたが、あまりの熱に、

「あぢぢぢ――っ！」
結局、二人を放り捨てた。
「最後まで面倒見てくれゾナ……」
バクはクロミと共に気絶した。
「マイメロ、何とかして！」
「はいは～い。ここは絶対ウサミミ仮面さんのカードを出すど～」
マイメロが気合い十分にメロディ・タクトを構えた。
近くにいた柊 恵一の右眉がピクリと動いた。
「メロディーマーク！　くるくるシャッフル！」
空中にメロディ・コンパクトが出現すると、蓋がひとりでに開いて、二十枚ほどの裏返しのカードが飛び出してきて、円を描きながら回り出す。そして、回転が止まると、一枚のカードがクルリと飛び出しそうになったが、チラッとドリアン大臣の絵が見えた。
「いや～ん。ウサミミ先輩さんのカードにして。おねがい♥」
途端に、ドリアンのカードは引っ込み、ウサミミ仮面のカードがひっくり返って、飛び出してきた。
「やったわ」
恐るべし、マイメロのおねがいパワー。

次の瞬間、「ちっ」という声を残して、柊恵一とセバスチャンの姿が消えると、すぐにエンジン音が轟かせながら、ウサミミカーが颯爽と走り寄ってきた。
みんなの横に、ドリフトしながら停まったウサミミ仮面は、いつものようにやる気のない口上を述べ、やる気のないポーズを取ったが、
「シツジ仮面もよろしく！」
シツジ仮面はやる気満々だった。
「ウサミミ仮面、一刻の猶予もございませんぞ！　ここは、必殺技の連続攻撃です！」
ウサミミ仮面は無言で頷くと、気合の声もろとも、上空に向かって高々とジャンプした。
「同じ手は喰わないよ！」
ニャンミは、両手を挙げると、不気味な雄叫びを上げながら、円を描いた。
すると、ダークパワーにより、体を包むように紫のシールドが張られた。
「ウサミミキック！」
上空から揃えた両足をドリルのように回転させながら急降下して、そのシールドを破ろうとしたが、あっさり跳ね返された。
「ううっ！」
ウサミミ仮面は落下しながら宙返りして着地すると、すかさず胸の花の飾りを取ると、

「お花ブーメラン！」
と叫んで投げた。だが、シールドは頑丈であっさり弾き飛ばされた。
「はっはっ、そんなやわな必殺技なんか通用しないよ！」
シールドの中から、不気味なニャンミの声が響いてくる。
「図に乗るな！　こうなれば……ウサミミジャンアント！」
ウサミミ仮面は、瞬時に巨大化すると、再びジャンプして、必殺技であるウサミミチョップとパンチを繰り出したが、やはりシールドはビクともしない。
「ウサミミ仮面、そんな攻撃では疲れるだけじゃ。ここは、超必殺技の『ウサミミ素顔』じゃ！」
王様が指示を出したが、ウサミミ仮面はためらった。
巨大化している上に、仮面を外して自分の素顔を見せるこの必殺技は、ウサミミ仮面が柊　恵一だということを世界中に晒すことになる。世界中の自分のファンを失望させるかもしれない。羞恥プレイもいいとこだ。
ウサミミ仮面のこのためらいがアダとなってしまう。
「きゃあああ！」
歌の悲鳴がウサミミ仮面の耳に突き刺すように聞こえて来た。
ウサミミ仮面がハッとして顔を上げると、ニャンミの尻尾が歌を絡め取り、絞めつけて

いた。ニャンミは超必殺技と聞いて内心ビビッたが、ウサミミ仮面のためらいの隙を突いたのだ。
「ゆ、夢野くん……！」
「はっはっはっ、ウサミミ仮面、これ以上攻撃すると、小娘に電撃を与えるよ」
ニャンミが余裕の笑みを浮かべた。
「ううっ……」
「小娘を守りたいんなら、さっさと元の大きさに戻って、その恥ずかしいコスチュームを脱げ！」
「…………」
ウサミミ仮面は無言で、元の大きさに戻り、何のためらいもなくコスチュームを脱ぎ捨て、全裸になった。
「裸は恥ずかしくないのね」
マイメロが天然のボケをかましたが、誰も笑わない。
「柊しゃま……」
クロミは顔を真っ赤にして両手で顔を覆ったが、指の隙間からこっそり覗いて、さらに顔を真っ赤にした。
「仮面とマスクも外しな！」

またニャンミが命令した。
「何っ⁉」
ウサミミ仮面は一瞬睨み返したが、すぐに仮面を外せば、イケメンビームを放つことが出来ると気づいた。
だが、敵もさるもので、
「イケメンビームを放とうなんて思っちゃいないよね。そんなことをしたら……」
ニャンミは歌をさらに絞めつけた。
「きゃあああ！　く、苦しい……」
「夢野くん！　わ、分かった」
ウサミミ仮面が仮面を外し始め、ニャンミがそれを注視した時だった。
「ラブラブビーム‼」
王様とルミちゃんの必殺技が炸裂した。
ビームは歌を絞めつけていたニャンミの尻尾を切り裂いた。
「ぎゃあああ！」
ニャンミが悲鳴を上げ、たじろいだ。
同時に、歌が悲鳴を上げながら落下していく。
「夢野くん！」

ウサミミ仮面が駈け寄ろうとしたが、

「歌──っ‼」

駆が凄いスピードでウサミミ仮面を追い越し、落下してきた歌をキャッチした。さすが、将来の陸上の日本短距離界を背負う男である。

「駆！」

歌は駆の首にしがみついた。

「大丈夫か？　怪我はないか？」

歌は目に涙を溜めながら頷いた。

「お、おのれっ！」

ニャンミは怒りの表情を浮かべ、バサッと両翼を広げた。

「ひとまず、逃げるんじゃや！」

王様たちは気球で、駆は歌を抱いたまま全力疾走で、残りの者たちはシツジ仮面の運転するウサミミカーにしがみ付いてその場を脱出した。

「フン！　逃げ足だけは速いんだね。まあいい。あと二、三時間で『滅びの雲』がここまでやってくる。何をやってももう手遅れさ。わっはっはっはっ」

ニャンミの高笑いの声が響く中、『滅びの雲』はすべての大陸と海を覆い尽くし、日本に迫っていた。

マイメロたちは王様の指示により、マリーランドへ一時避難していた。すでに、朝になっていた。
王様はさらに元老院の重鎮やメガネザル博士らの科学者を城の謁見の間に集めて、善後策を話し合った。
すでに、マリーランドも砂漠化が進んでおり、城も砂に埋まってしまうのも時間の問題だった。
マリーランドの英知を結集しても、ニャンミを倒す策はなかなか浮かばず、時間だけが過ぎていく。
「何か良い策はないのかのう……」
王様が苦渋の表情を浮かべた時、歌が手を挙げた。
「おおっ、歌ちゃん！　良い策が浮かんだのか？」
「良い策かどうかは分からないけど……さっきの戦いの中で、ニャンミに一番ダメージを与えたのは、王様と王妃様のラブラブビームの攻撃だったと思います」
「歌の言う通りや。一瞬だけやけど、ニャンミがビビッとったで」
真菜が言うと、メガネザル博士がポンと膝を叩いて立ち上がった。

「それです、王様！」
「メガネザル博士、どういうことかのう？」
「ニャンミがドクロボウのダークパワーに身も心も乗っ取られてしまったのは、醜い嫉妬心をどんどん募らせてしまったからです。嫉妬した者を救うには、大きな愛の力しかございません！」
ルミちゃんが納得して、続けた。
「成程！　深い愛で結ばれている王様と私のラブラブビームが有効ということは、もっと愛を増せば倒せるということですね？」
「さすが、王妃様。その通りございます！」
「愛を増幅させるのか。パオーン！　朝っぱらからいたす……」
と王様が言いきる前に、ルミちゃんのパンチが炸裂した。
「パオーン！」
王様は吹っ飛び、壁にめり込んで、足をピクつかせた。
「そういうことではありません、まったく」
ルミちゃんは頬を赤らめながら言い捨てると、続けた。
「愛で結ばれているカップルをたくさん集めて、ラブラブビームを放てばいいのです」
「ラブラブビームは、王様と王妃様の必殺技です。他のカップルでは……」

ドリアン大臣が疑問を投げかけた。
「ラブラブビームは、愛あるカップルならみんな放てます。王様が大袈裟に言ってるだけなのです」
「なーんだ、そういうことだったの。じゃあ、王様と王妃様よりもっと愛がある私とパパでも使えるのね？」
「そうですよ、マイメロのママさん」
ルミちゃんがにこやかに答えた。
「ということなんで、パパ、私たちも戦いますから」
「も、勿論だよ、ママ……」
マイメロのパパが汗を拭きながら言った。
「よし！　歌、俺たちもカップルになるぞ！」
「うん！」
駆と歌が頷き合った。
ウサミミ仮面が一瞬二人を睨んだが、すぐにクロミがその腕に抱きつき、
「あたいは柊しゃまとカップルを組みまーす❤」
「うっ……」
ウサミミ仮面の額に汗が浮かび上がった。

「俺は……」
潤が美紀と琴を見た。
だが、美紀はピアノちゃんと腕を組んでいた。
「私とピアノちゃんは、ポエムを愛する者同士！　ピアノちゃん、頑張りましょう！」
「わっぱめー！」
潤が苦笑した時、琴が嬉しそうに近づこうとしたが、奏に腕を掴まれた。
「奏ねえ？」
「あんたはまだ早いわ。ここは、姉妹愛で結ばれている私と組むのよ」
「ええ〜〜っ!?」
琴は不満だったが、
「文句ないわよねえ？」
この中ではカップルを組む相手がいない奏が引きつった笑みを浮かべて尋ねた。
「姉妹を思いやる気持ちも立派な愛ですよ、琴ちゃん」
「わ、分かった……」
琴は渋々承知した。
二人とカップルが組めなくなった潤は困った。
「ここは……」

自分の執事のセバスタンを見たが、すでに兄のセバスチャンとガッチリ右手を握り合っていた。
「弟よ、ここは執事兄弟の出番ですぞ！」
「勿論でございます、兄さん！」
頼みの綱のセバスタンにもフラれ、潤はますます困り果てた。
だが、いきなりキューーン！　というエレキギターの音が響いた。
潤が一方を見ると、いつの間にか潤顔負けの派手な衣装を着たドリアン大臣がエレキギターをかき鳴らしながら近づいてきた。
「ドリアン大臣⁉」
「潤くん、こう見えても私は若い頃、ロックバンドを組んで女の子たちをブイブイ言わせておりました。イエーイ！」
「マジかよ！　じゃあ、ロック愛で繋がったカップル誕生だぜ！　イエーーイ！」
自分もエレキギターをかき鳴らした。
「うるさいで！　うちはどないしよう……」
真菜が頭を掻きながら呟くと、
「僕を忘れないでよ、真菜ちゃん」
いつの間にか格闘技の道着を着たフラットくんが前にいた。

「フラット？　なんやその格好は？」
「僕が格闘技好きなのは知ってるだろう？」
「そやったっけ？　まあええわ。他に比べると愛が足りんかもしれへんけど、少しは力になれるやろ」
「押忍っ！」
最後に残ったのは、マイメロとバクだけとなった。
「ええ～っ、マイメロ、バクくんは好きだけど、愛はないんだけど～」
「そのセリフはそのままお返しするゾナ！」
「マイメロ、ウサミミ仮面さんとカップル組みたいな～。ウサミミ仮面さん、マイメロとカップルになりましょう。おねがい♥」
「…………」
ウサミミ仮面は沈黙した。
「黙れ、黙れ！　柊しやまはあたしのもんだよ！」
クロミが鬼の形相で睨みつけた。
「クロミちゃんが好きなのは柊先輩でしょう？　ウサミミ仮面さんじゃないよ～」
「あ、あのなあ！」
クロミが反論しようとした時、

「クロミ、時間がない。ここは仲の良いバクとカップルを組むのじゃ」
壁から這い出てきた王様が言った。
「ええ〜〜〜〜っ!!」
クロミは顎が外れるのじゃないかと思うほど、大きく口を開けて驚いた。
「バクは全然ＯＫゾナ！」
バクがクロミと腕を組んだ。
「なんで、お前とカップルを組まなきゃなんだよ!!」
バクの頭をハリセンで思いきり叩いたが、バクは嬉しそうにニコニコしている。
「究極ＳＭカップルね。凄いラブラブビームが発射出来そうね」
マイメロのママがニヤリと笑った。
「そ、そんな〜〜……」
クロミがガックリと項垂れた時、王様が呪文を唱えた。
「ホンダラホニャララホニャララホイホイ」
魔法の杖を使うと、それぞれのカップルの足下に光の円盤が出現して、一〇組のカップルが宙に浮かび上がった。
「それでは、ニャンミを倒して、マリーランドと地球を救いに行くぞ！」
「おお――っ!!」

一〇組のカップルが光の円盤に乗ったまま、城を飛び出して行った。
遂に、夢ヶ丘の上空を『滅びの雲』が覆い始めた。
雲に飲み込まれた夢ヶ丘の住民たちが魂を抜かれ、バタバタと倒れていく。
「わっはっはっはっ、これで地球もマリーランドも終わりだよ。ざまあみろ！」
完全にダークパワーに支配されたニャンミが勝利宣言をした時だった。
「そんなことは絶対させないゾウ！」
まだ『滅びの雲』に覆われていない空から一〇組のカップルが飛来してきた。
「お前ら、まだ懲りずに！」
ニャンミは素早く先程と同様に自分の周りにシールドを張った。
「ニャンミちゃん、男に何股かけられたかは知らないけど、男なんて星の数ほどいるわ。あなたに相応しい男がきっと現れるわ。だから、そこから、出てきて『滅びの雲』を消しなさい」
光の円盤にパパと乗ったマイメロのママが近づきながら言った。
「うるさい！　ピーマンと説教は大嫌いなんだよ！」
「そう。それじゃ、倒すしかないわね」

いきなり蘇生した尻尾から電撃を放ってきたが、パパの巧みな円盤操作で躱した。
「ありがとう、パパ。ちょっと見直したわ」
マイメロのパパは、ポッと頬を赤らめた。
「今なら、凄いラブラブビームが撃てそうだわ。パパ、行くわよ」
「うん、ママ」
二人は抱き合うと、サッと握り合った手をシールドに向けて叫んだ。
「夫婦愛ラブラブラブビーム！」
ラブラブビールがシールドに当たると、微かにヒビが入った。
「やっぱり、ラブラブビームは効き目があるわ！　駆！」
「お、おう！」
ぎこちない手つきで駆が歌を抱く。
「まだきごちないカップルだけど、愛はいっぱいあるわ」
「俺だって！　いくぞ！」
「もっとラブラブになりたいラブラブビーム！」
二人の手から強烈なビームが放たれ、シールドの一部が割れた。
「よっしゃっ！　フラット、行くで！」

「押忍っ！」
「格闘技は世界を救うラブラブビーム！」
それから、カップルたちが次々とラブラブビームを放った。
「ポエムこそ愛ラブラブビーム！」
「執事一筋仲良し兄弟ラブラブビーム！」
「ロックンロールだぜベイビーラブラブビーム！」
「とびきりの美姉妹ラブラブビーム！」
「ヤケクソラブラブビーム（ゾナ）！」
八組のラブラブビームにより、ニャンミの防御シールドは木端微塵に吹っ飛んだ。
「ウサミミ先輩さん、マイメロたちもラブラブビームを撃とう」
ウサミミ仮面の肩に乗っていたマイメロが言ったが、
「お前に愛など微塵も感じない」
「いや～ん。マイメロも撃ちた～い」
その間に、ニャンミは尻尾から電撃を乱射し続けるが、絶妙なコンビネーションです
べてのカップルが躱していく。
「二人とも何をしてるんですか？」
ルミちゃんが攻撃を促したが、ウサミミ仮面は沈黙したままだ。

「仕方がないのう。ここは、真打ち登場じゃ！　ルミちゃん、行くぞ！」
「はい、あなた！」
王様とルミちゃんはヒシッと抱き合うと、キスまでして、握った手をニャンミに向けて叫んだ。
「本家本元ラブラブラブビーム！」
凄まじい勢いの光線が、ニャンミの体を撃ち抜いた。
「ぎゃあああああ！」
ニャンミの巨大な体がグラリと揺れ、電波塔から落下したが、地面に落ちる寸前に身を翻し、何とか着地した。
片膝を突きながら、獣のような咆哮を上げると、電波塔の建物に片手を当て、起き上がった。
「よ、よくもやってくれたな！　許さないよ！」
ニャンミは巨大な翼を開くと、一〇組のカップルに向けて、バサッと扇いだ。
凄まじい強風に、カップルが次々と吹っ飛ばされた。
残ったのは、瞬時に上空高く飛んだウサミミ仮面とマイメロのカップルだった。
「ニャンミは弱っている！　ウサミミ仮面、マイメロ、ラブラブビームを撃って仕留めるのじゃ！」

遠くから王様の声が聞こえて来た。
「ウサミミ先輩さん」
マイメロが目をウルウルさせながら可愛く迫った。
「無理。私一人で十分だ。イケメンビーム！」
ウサミミ仮面は仮面を外して、強烈な光線を放った。
咄嗟に、ニャンミが両翼の体の前でクロスした。
イケメンビームが命中して、ニャンミの悲鳴と共に、翼の羽根が周辺に散った。
ニャンミはよろめき、電波塔の一部を壊しながら倒れた。
だが、歯を食いしばって立ち上がる。
「こんなことぐらいでやられてたまるか……」
全員が光の円盤に乗って戻ってくる。
「もはや、戦える力は残っていまい。とどめだ！」
ウサミミ仮面が『ウサミミ素顔』を放とうと、仮面とマスクに手をかけた時だった。
「待ってくれ！」
クロミの大きな声が響いた。
「クロミ……？」
ウサミミ仮面がクロミを見た。

「超必殺技の『ウサミミ素顔』を浴びたら、ニャンミは死んでしまうよ！」
「しかし……」
『滅びの雲』はすぐ近くまで迫っている。
「もう時間がないゾウ！　このままでは地球もマリーランドも滅んでしまう。撃つのじゃ、ウサミミ仮面！」
王様が叫ぶと、よろよろと起き上がるニャンミの前に、クロミとバクの光の円盤が飛んでいった。
「お願いだよ、ウサミミ仮面！　ニャンミを撃つんなら、まずあたいを撃ちな！」
「ク、クロミ様……バクとクロミ様は一心同体ゾナ！　バクも一緒に撃たれるゾナ！」
「バク……」
二人は両手を開いて、ウサミミ仮面の前に立ち塞がった。
「…………」
ウサミミ仮面は超必殺技を撃つか撃つまいか迷いに迷った。
その時だった。
一同の真上のわずかに残った空から何かの影が落下してきた。
数珠つなぎにした五台の改造三輪車に乗ったクロミーズ５のワンミ、コンミ、チュウミだった。

「お、お前ら！」

「リーダー、待たせたね！　ニャンミを救い出させるのは、あたいらしかいないよ！」

「メガネザル博士に飛べるように改造して貰ったんだ！」

「さあ、リーダー！　乗って下さい！」

「おおっ！」

　クロミが光の円盤から五台の改造三輪車の先頭の三輪車に飛び移った。

　クロミは、自分のすぐ後ろの無人の三輪車を見た。その目には涙が浮かんでいる。

「この席はニャンミのもんってわけか！　お前ら、粋なことしやがって！」

「リーダー、突っ込みましょう！」

「おお――っ！」

　四人はペダルを猛然と漕ぎ出し、いったん巨大なニャンミの頭上高く舞い上がると、Ｕターンして、猛スピードで降下する。

「ニャンミ――ッ‼」

　クロミたちの叫び声が響いたかと思うと、改造三輪車の光となって、巨大なニャンミの胸に吸い込まれた。

本物のニャンミは、ダークパワーの巨大なニャンミの体内の闇の中で倒れていた。
クロミたちの自分の名前を呼ぶ声に目を開けた。
「こ、この声は……⁉」
ニャンミが立ち上がり、闇の奥を見ると、強烈に輝く光が急速に近づいてきた。
「ニャンミ、さあ、これに乗るんだ――っ！」
クロミを先頭としたクロミーズ５のメンバーだった。
「リーダー！　みんな！」
クロミが差し出す手を、ニャンミが握った。
クロミはサッと後ろの三輪車にニャンミを乗せると、
「脱出するよ！」
「おお――っ！」
五人揃ったクロミーズ５は猛烈にペダルを漕いだ。
再び、光となって、前方の闇を引き裂いていく。
「ぐおおおおお――っ‼」
巨大なニャンミの胸を突き破って、クロミーズ５の数珠つなぎの改造三輪車が飛び出

してきた。
「クロミちゃんたち、すごーい」
マイメロが拍手した。
「今です！　ウサミミ仮面、『ウサミミ素顔』です！」
ウサミミ仮面が頷き、仮面とマスクを取ろうとした時、その体がゆっくり前のめりに倒れた。
「ウサミミ先輩さん？」
マイメロが心配そうにウサミミ仮面の顔を覗き込んで驚きの声を上げた。
「ありゃま。汗びっしょり……」
「す、すまない……。ずうっとウサミミ仮面になり続けていたので、『ウサミミ素顔』を撃つ力が残っていない」
「えええええ〜〜〜〜っ!!」
全員の表情が凍りついた。
「わしらももうラブラブビームを撃つ力は残っておらん。どうしたらいいんじゃ!?」
王様の言葉に、同じく疲労困憊のみんなも頷くしかなかった。
ニャンミが抜けたため、巨大なニャンミは体を維持出来ずに、真っ黒な炎となって、ゆらゆら揺れている。

「残念だったな。これで、地球もマリーランドも終わりだ」
ダークパワーの精の声だった。
みんなが絶望的な表情で頭上を見上げると、僅かに見えていた空が『滅びの雲』により、消えようとしていた。
「マイメロ、何とかして！」
歌が叫んだ。
「はいは〜い」
マイメロが、メロディ・タクトを構えた。
「メロディーマーク！　くるくるシャッフル！」
空中にメロディ・コンパクトが出現すると、蓋がひとりでに開いて、二十枚ほどの裏返しのカードが飛び出してきて、円を描きながら回り出す。そして、回転が止まると、一枚のカードがクルリと飛び出してくる。
なんと、マイメロのカードだった。
「ええええ〜〜〜っ‼」
またみんなの顔が凍りついた。
その瞬間、マイメロの姿がシュッと消えると、マイメロ仮面が現れた。
「この期に及んで、なんでやねん！」

真菜がツッコミを入れた。
「終わったわね」
奏が言うと、全員が弱々しく頷いた。
「大丈夫だよ～」
マイメロ仮面は、口を尖らせて反論すると、めらめらと燃えるダークパワーの大きな炎に向かって、メロディ・タクトを構えた。
「マイメロ仮面が地球さんを救うよ。マイメロビーム！」
タクトを振ると、ハートの形をしたピンクの光がヘロヘロとゆっくり飛んで行く。
その間にも、『滅びの雲』に空が覆い隠されようとしている。
みんなの顔に絶望の色が浮かぶ。
ヘロヘロと飛ぶピンクのハートの光がようやくダークパワーの炎に届いた。
だが、何も起こらない。
全員がずっこけそうになった時、突如黒いダークパワーの炎がピンクの炎に変わると、ダークパワーの断末魔の声が轟き、木端微塵に吹っ飛んだ。
その欠片は無数の花びらとなって、『滅びの雲』を掻き消していく。
無数の花びらは、マリーランドにも降り注ぎ、砂漠を消して、野山に花を咲かせ、虹が次々とあらわれた。



いく。
地球を覆っていた『滅びの雲』はどんどん消えて行き、倒れていた人々に魂が戻っていく。
「やったーーっ！　マイメロ、大手柄だよ！」
歌をはじめ、全員がマイメロに駈け寄り、胴上げをした。
「えっへん。マイメロはやる時はやるの」
笑顔で胴上げされるマイメロを、クロミだけは苦々しい顔で見ている。
「なんだい、なんだい！　一番美味しいところを持っていきやがって！　クロミ・ノートに書いとくかんな！」
すでにマイメロの悪口を二万ほど書いてある分厚い黒のノートを開いた。

こうして、危機一髪のところで、地球もマリーランドも滅びずに済んだ。
クロミ、バク、クロミーズ5のニャンミを除いたメンバーは、今回の功績が認められ、反省部屋送りは免れた。
ニャンミは、反省部屋に入れられたが、情状酌量の余地があるとして、一週間の反省で済むこととなり、代わりに、二股もかけていたジャガー先輩が一か月の反省部屋送りになった。

人間界に戻った歌と駆は、数日後公園のベンチに座って、マイメロが現れてからの慌ただしい二か月間を振り返っていた。
柊 恵一は、そのままパリへと帰って行き、潤はＣＤデビューを目指し、当分夢ヶ丘に残ることになった。
「ほんと、マイメロが現れると、色んなことが起こるよな」
「でも、誤解が解けて良かったよ」
「起こり過ぎだよね」
「……駆、ごめんね」
「いいって。俺も悪かったんだからさ」
「ねえ、駆……」
「なんだよ？」
「キスをねだる女の子、嫌い？」
歌が瞳を輝かせて、駆の目を見て尋ねた。
「そ、そんなことねえよ」
駆が視線を泳がせながら言った。

歌が目を閉じた。
駆の心臓の鼓動が早鐘のように鳴り出す。
駆は震える手で歌の肩を掴み、ゆっくり抱き寄せた。
そして、自分も目を閉じ、唇を重ねようとした時だった。
悪魔とも天使とも思える声が聞こえてきた。
「う〜た〜ちゃ〜ん」
二人は慌てて離れ、頭上を見上げると、傘を差したマイメロが舞い降りてきた。
「マ、マイメロ⁉　どうしたの？」
「マイメロ、大活躍だったから、王様が当分人間界に留学していいって許可してくれたの」
「そ、そう……」
「歌ちゃん、駆くんと何してたの？」
「な、何って……」
「なんにもしてねえよ！」
駆が顔を真っ赤にして言った。
「あのねえ、歌ちゃん、前にも言ったと思うけど、マイメロのママがね……『二人きりになって手を握れないようなヘタレにはこっちから積極的に攻めないとだめよ』って言っ

てたよ～」
「折角いいところだったのに！　大きなお世話よ！」
歌の強烈なアッパーカットがマイメロの顎に炸裂した。
「いや～～～～ん」
マイメロが空高く吹っ飛び、星となった。
「邪魔者は消えたよ、駆」
「だな……」
再び二人は見つめ合うと、抱き合って、唇を重ねたが、
「あわわわわわ！」
という声と共に、マイメロが落下してきた。
「助けて、歌ちゃ～～ん」
歌は苦笑すると、駆から離れて落下してきたマイメロをキャッチした。
「ふふ、また騒がしくなりそうだけど、マイメロが一緒なら、きっと楽しいことがいっぱいあるよね」
「うふ、マイメロも楽しみ～」
歌に抱き締められ、マイメロが嬉しそうに笑った。

（おわり）

あとがき

この小説を書くにあたって、『おねがいマイメロディ』のテレビシリーズのＤＶＤを改めて見直した。
ぶっ飛んでるなあ。突き抜けてるなあ。あのサンリオさんがよく許してくれたよなあ、というのが正直な感想だ。
テレビシリーズが始まったのは、八年前の二〇〇五年の四月三日だったが、今見ても全然色褪せていない。そればかりか、ますます異彩を放っている。
シリーズの後半は、大人の事情とやらで、三〇分番組が一五分になってしまったり、フラッシュ・アニメになってしまったりして、当時シリーズ構成と脚本を担当していた私は、こんなに面白いのに、マイメロたちが可哀想だなあ、と思ったものだ。
それでも、画面の中の登場キャラクターたちは、なんと生き生きしていることか。
瞳に漆黒の闇を持つ主人公のマイメロは、あくまでも可愛く、ボケまくっている。
そのライバルのクロミは、ドSでありながら、柊恵一を想い続けるひたむきな姿には感動さえ覚え、棚に飾ってあるぬいぐるみを思わず抱きしめたくなる（白山十三かよ！）。
バクにしても、あれほど叩きまくられながら、クロミのために命まで投げ出すドM……もとい、漢っぷりには拍手を送りたくなる。

　さらに、マイメロのママの毒舌ぶり、王様のちゃらんぽらんぶり、それを健気に支えるルミちゃんの献身ぶり、いつか王様になりたいと思っているドリアン大臣の小物ぶり……等々、なんて個性豊かなマリーランドの住人たちなんだ。

　人間のキャラクターたちも、マリーランドの住人たちに劣らず個性派揃いだ。

　恋に恋する等身大の中学生の魅力が輝いていた夢野歌、まったく意味不明のポエムを量産し続けた桜塚美紀、格闘家志望なのに可愛いものを見ると鳥肌が立つ面白いキャラの藤崎真菜、天才ヴァイオリニストで容姿端麗なのに夢を見つけられずにいる柊恵一、その兄にコンプレックスを抱きながらも懸命に前向きに生きようとする柊潤、不器用ながらひたむきに歌を思い続ける小暮駆……等々。書きだしたら、頁がいくらあっても足りない。

　その中でも、私のお気に入りは、ウサミミ仮面だ。あのやる気のない口上と決めポーズ。それなのに、戦う時は容赦のない攻撃で敵を完膚なきまでに叩きつぶすヒーローっぷり（仮面ライダーより強いぜ！　たぶん……）。

　小説の魔法の設定を、『おねがいマイメロディ　くるくるシャッフル』の世界にしたのは、ウサミミ仮面を登場させたい私の願望からだ。

　実際、ウサミミ仮面の登場シーンを書いていると、テーマソングとウサミミ・カーのエンジン音が頭の中に響き渡り、登場した時には思わず、

「キタ――――ッ!!」

と、叫んでいた。

この文章を書きながら、当時のことを色々思い出している。

とにかく、制作現場には活気があり、エネルギーが充満していた。森脇監督を中心に、面白い作品を作ろうと、スタッフ、キャストのみんなが徹夜をいとわず頑張っていた。脚本の打ち合わせで、午前様になることも多かった。殴り合いとは言わないが、それに近い状態になることもあった。みんなが真剣に面白いものを作ろうと戦っていた。

それが、見事に画面で弾けていた。

あの熱気と活気が、小説でも表現出来るんだろうか。そんな悩みと格闘しながら、私は『おねがいマイメロディ はいすく～る』を書いた。

あとは、読者の皆様に委ねるしかない。願わくは、この小説を読んで、マイメロやクロミたちともう一度会いたいと思って下されば幸いである。

最後に、この小説を書くきっかけを作って下さった株式会社ウィーヴの可知秀幸さん、利根りかさん、プロットの段階でアドバイスをして下さった森脇真琴監督、素敵な表紙と挿絵を描いて下さった宮川知子さん、そして、遅れに遅れた原稿を辛抱強く待って下さった株式会社PHP研究所の前田眞宜さんに感謝の意を表します。

二〇一三年二月一日

山田隆司

〈キャラクター著作〉
株式会社サンリオ
〈企画原案〉
akino
〈企画協力〉
株式会社ウィーヴ
株式会社スタジオコメット
〈装丁〉
彦坂暢章（株式会社ケイズ）
〈作画協力〉
原田雅史
〈編集担当〉
前田眞宜

スマッシュ文庫の最新情報はこちら！
http://www.php.co.jp/smash/

本書へのご意見・ご感想を
お寄せください。

宛先
〒102-8331　東京都千代田区一番町21
株式会社PHP研究所　スマッシュ文庫課
山田隆司先生
宮川知子先生

スマッシュ文庫

おねがいマイメロディ　はいすく～る

2013年３月22日　第１版第１刷発行

著者　山田隆司
監修　株式会社サンリオ
イラスト　宮川知子
発行者　小林成彦
発行所　株式会社ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　東京都千代田区一番町21
スマッシュ文庫課　☎03-3239-6251（編集）
普及一部　☎03-3239-6233（販売）
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/

組版　朝日メディアインターナショナル株式会社
印刷所
製本所　図書印刷株式会社

ISBN978-4-569-67969-3